

園児一人ひとりの遊び行為と空間・場の嗜好からみた
保育施設の環境評価に関する研究

平成 31 年 3 月

藤田 大輔

目次

研究の要旨

第1章 序論

1.1 本研究の背景	-----	1
1.1.1 建築計画学研究の今日的課題	-----	1
1.1.2 保育施設計画・設計の今日的課題	-----	4
1.1.3 保育施設における平面計画の特徴	-----	6
1.1.4 国が定めている施策の概要	-----	10
1.1.5 保育施設における幼稚園の位置づけ	-----	11
1.2 本研究の目的	-----	14

第2章 研究の位置づけと方法

2.1 既往研究の整理と本研究の位置づけ	-----	19
2.1.1 既往研究の整理	-----	19
2.1.2 本研究の位置づけ	-----	26
2.2 本研究の調査・実験方法	-----	28
2.3 本研究の構成	-----	29

第3章 各室・空間における園児の滞在時間とその特性

3.1 はじめに	-----	35
3.1.1 本章の背景と目的	-----	35
3.1.2 調査概要	-----	35
3.2 保育活動時間の特性	-----	42
3.2.1 保育活動の分類	-----	42
3.2.2 園別・学年別保育活動時間	-----	44
3.3 各室・空間の滞在時間	-----	45
3.3.1 各室・空間の分類	-----	45
3.3.2 保育活動別各室・空間別滞在時間	-----	45
3.3.3 園別各室・空間別滞在時間	-----	46
3.3.4 学年別各室・空間別滞在時間	-----	48
3.4 保育活動における集団形成単位	-----	49
3.4.1 集団形成単位の分類	-----	49
3.4.2 各室・空間別集団形成単位	-----	50
3.5 自由保育における学年別の滞在場所と空間特性	-----	51
3.6 まとめ	-----	54

第4章 園児一人ひとりの遊び行為と各室・空間の関わり

4.1 はじめに	-----	5 9
4.1.1 本章の背景と目的	-----	5 9
4.1.2 分析方法の概要	-----	5 9
4.2 調査対象園の空間的特徴と遊び行為の関係	-----	6 1
4.2.1 遊び行為の分類	-----	6 1
4.2.2 園別にみた各室・空間の特徴と遊び行為の関係	-----	6 2
4.2.3 属性別に見た遊び行為と場所の特性	-----	8 8
4.3 遊び行為に関わる各室・空間と特徴的な環境要素	-----	9 8
4.4 自由保育における園児一人ひとりの遊び行為実態とその特徴	-----	1 0 5
4.5 園児の興味・関心対象が存在する生活領域の特徴	-----	1 0 9
4.6 まとめ	-----	1 1 1

第5章 各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価

5.1 本章の背景	-----	1 1 9
5.2 本章の目的と方法	-----	1 2 0
5.2.1 既往研究方法の整理と本章の目的	-----	1 2 0
5.2.2 研究方法	-----	1 2 1
5.3 園児の好きな各部空間・要素と特徴	-----	1 2 4
5.3.1 実験対象施設別にみた撮影対象と特徴	-----	1 2 4
5.3.2 学年別・性別にみた撮影対象と特徴	-----	1 2 6
5.4 園児の撮影傾向と特徴	-----	1 2 7
5.5 写真投影法で明らかになった園児の興味・関心対象と特徴	-----	1 3 1
5.6 まとめ	-----	1 3 3

第6章 結論

6.1 各章のまとめ	-----	1 3 7
6.1.1 各室・空間における園児の滞在時間とその特性	-----	1 3 7
6.1.2 園児一人ひとりの遊び行為と幼稚園各室・空間の関わり	-----	1 3 8
6.1.3 各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価	-----	1 4 0
6.2 保育施設に求められる環境整備の試論	-----	1 4 1
6.3 本研究で取り扱った行動・心理の範囲	-----	1 4 6
6.4 今後の課題	-----	1 4 8

引用・参考文献

図表一覧

研究業績一覧

謝辞

研究の要旨

園児一人ひとりの遊び行為と空間・場の嗜好からみた保育施設の環境評価に関する研究

藤田 大輔

建築計画学で重視する研究の視点が、量的充足から質的向上に切り替わって久しい。質的向上のためには、ユーザーである人間に着目し、環境に対する個別的要求を整理・分析することが基本となる。このことは保育施設も同様であり、園児一人ひとりの個別的要求から空間の質的向上を目指す必要がある。現在の保育施設は、クラス集団の活動を重視した配置計画となっており、園児一人ひとりの行動的側面から空間のあり方を再検討するとともに、保育施設で想定すべき活動内容について明らかにすることが必要と思われる。なお、心理的側面については、園児に対する心理的調査・実験手法の困難さから、その手法確立が急務である。

本研究は、園児一人ひとりの行動観察調査および写真投影法を用いた認識・評価実験から、行動的側面と心理的側面双方の個別的要求を捉え、保育施設の環境評価を総合的に導き出していることが特徴である。特に園児の認識・評価は、ヒアリングを併用することで、今まで扱うことができなかった心理的側面からの個別的要求を抽出している。

本論文は6章で構成されている。

第1章は、序論であり、建築計画学および保育施設の今日的課題、国が定めている施策の現状と実際の空間構成といった研究の背景を整理し、本研究の目的を述べた。

第2章は、保育施設に関わる既往研究を整理し、本研究の位置づけ、調査・実験方法の概要、本研究の構成を示した。

第3章では、各室・空間における園児の滞在時間とその特性を明らかにすることを目的として、園児一人ひとりの登園から降園までの全ての活動を追跡して記録する行動観察調査を行った。まず自由保育が1日の4割強を占める重要な保育活動であることを確認した。次に活動場所をみると、自由保育、プログラム保育ともに保育室が拠点となっていることがわかった。さらに、自由保育における園児の滞在場所・時間は、高低差のある敷地や魅力的なしつらえ、保育室との近接・連続性等の空間特性に影響されることを示し、プログラム保育に特化した保育室以外に、自由保育で多様な活動が展開できる魅力的な各種内外空間をしつらえることが建築計画上の課題であることを明らかにした。

第4章は、自由保育で必要な環境構成・要素を検討するため、園児一人ひとりの遊び実態から各室・空間と環境要素の関係を把握することを試み、得られたデータについて改めて詳細な分析を行った。まず、保育施設で想定すべき基本的遊びとして14種類を抽出し、動的遊びや砂遊びは広い場所・拠点を中心に他の場所に行動領域が広がっていること、中間的遊び・静的遊びは保育室が活動の中心であることなどを導き出した。次に、園児一人ひとりの遊びの展開から、遊びの切り替わりに働く空間的余地、拠点とその周辺的环境配置、領域が広がるための近接配置などの計画上の留意点を導き出した。さらに、遊びの行動領域から配置計画を捉えると、様々な場所の行き来を重視しながら、階層的な空間構成、もしくは性質の異なるコーナー等を設置する必要性を導き出した。これらを総合的に考察し、自由保育で求められる空間は、園児の行動領域の広がり重視して各室・空間の関係性を計画し、遊び内容に応じて占有・共有されるコーナー・場を設けることが重要であることを明らかにした。

第5章は、心理的側面から園児の環境評価を抽出しようとするもので、ヒアリングを併用した写真投影法実験を実施した。まず施設別にみた撮影割合は、保育方針が造形中心の園では屋内の制作物、屋内の玩具・素材等が高く、コーナー保育実施により様々な空間利用が活発な園では屋内の空間が高くなるなど各園の環境的特徴が評価されていることを明らかにした。さらに、園児が興味・関心を有する屋内外及び周辺的环境要素は、身近に存在し教諭が教材等で展示するもの、過去の保育・イベント活動等で体験した近傍の生活領域にあるもの、日常的に利用・観察する遠方の生活領域にあるものの3つに大別されることを明らかにし、通常の実行動観察調査では一般に難しいと考えられる園児の環境に対する認識・評価の特性を捉えた。

第6章は、結論として各章で得られた結果をまとめ、その結果から保育室機能の解体と再構築、保育施設で想定すべき基本的遊びと整備すべき環境、園児一人ひとりの個性からみた環境要素の配置など、保育施設に求められる環境整備の試論を述べた。また、行動観察で表れにくい心理的評価を抽出し、本研究で取り扱った行動・心理の知見とその範囲について明らかにするとともに、今後の課題を整理した。

第1章

序論

- 1.1 本研究の背景
- 1.2 本研究の目的

第1章 序論

1.1 本研究の背景

1.1.1 建築計画学研究の今日的課題

建築計画学が扱う研究は、施設種別ごとの計画各論、施設種別を横断する研究課題に大別される。

施設種別ごとの計画各論を扱う研究分野では、建築計画学黎明期の量的向上を目指したタイプやモデル等の「型」の提示から、現在では質的充足を対象とするものにシフトしてきている。例えば J. ラングは、著書である「建築理論の創造^{1.1)}」の中で、自分のデザインについてデザイナーが予測・主張する内容と実際の働きには差があり、「デザイン活動のための知識ベースの質はまだかなり拡充する必要がある^{a)}」と述べている。こうした質的向上を目指すためには、ユーザーである人間に着目し、その行動や心理的評価を明らかにすることで、空間的要求を整理・分析することが基本となる。特に多様な生活スタイルや空間的要求が認められる今日では、その幅広い要求に即した空間構成が求められている。そのため、調査・実験等によりそこで生じている現象を克明に把握し、そのメカニズムを分析することで、個人的特性を包括する空間の質をどのように高めていくのかが問われている。

次に、施設種別を横断する研究課題を扱う視点について整理する。環境と人間行動の関係性を扱う研究上の立場としては、前述した「建築理論の創造」では自由意志論的アプローチ、可能論的アプローチ、決定論的アプローチ、蓋然論的アプローチ^{b)}があると紹介されている。自由意志論・可能論的アプローチは、主張が極端であり、本研究の視点として扱うことは適当ではないため割愛する。決定論的アプローチは、心理学分野で用いられてきた刺激-反応の考え方(S-R理論)を軸に、人間の個人的特性や意思は影響がないものと判断し、建築などの環境設定(刺激)が人間の行動選択(反応)に決定的に影響するといった環境決定論の立場をとっている。蓋然論的アプローチは、環境と人間の組み合わせにはある程度の関係性があり、個人的特性を踏まえたアフォーダンス概念と親和性が高いことから、近年では環境-行動研究の基本的立ち位置となっている。

この他に特記すべき立場として、相互浸透論、建築地理学からの視点が挙げられる。人間-環境系研究の基本的姿勢である相互浸透論は、環境と人間が対立的な立場ではなく、相互は切り離せないも

a) 「自分のデザインがどのように作用するかについてデザイナーが予測したり、あるいは主張したりする内容と、実際にそれがどのように働いているかという内容との落差を少なくしてはならない。そう考えると、デザイン活動のための知識ベースの質はまだかなり拡充する必要がある」

J. ラング：建築理論の創造 序 xi より引用

b) 蓋然論的アプローチ：「属性 a,b,c を持つ個人 A がいたとする。これが特性 d,e,f を持つ環境 E に行為への動機 M と共に置かれたなら、A は行動 B を行うのがもっともらしい。この立場は、人間の行動が起こる基盤であり、また環境デザイナーが活動する基盤となるシステムの不確かさを認めるが、人間の行動は完全な気まぐれではないと考えている。蓋然論的立場は、行動と環境デザインの関係についての最近のほとんどの研究の基礎となっている。」

J. ラング：建築理論の創造 p133-134 より引用

のと解釈し、お互いに時間をかけて浸透（トランザクション）しながら行動がなされているスタンスをとっている。また、大井がカンターの「場所の概念モデル」の解説の中で指摘している「同じ環境の中でも、違った役割をもっている人は、目的も違っているので、自分を取り巻く環境のとらえ方も違う～中略～人が外の世界に対して心の中で抱いている意味（概念）を理解することがカギとなる」^{o)}のとおり、人間に着目することが研究上の基本的姿勢となる。

建築のあり方を地理学の観点から扱う視点は、従来の建築計画学で行われてきた物理的特徴と人間の活動の関係を解き明かすだけでは不十分との評価から、それを成立させている背景や意味づけなども含めて広く解釈することで、建築計画学を時代のニーズに合わせて刷新しようとするものである。これらは、「建築地理学」と命名され、長澤泰らが主張している「環境が個人個人に与えるダイナミックな「意味」が人間行動に及ぼす影響は顕著で、意味そのものがそもそも個人個人のパーソナリティや経験・記憶に根ざしたものであることを考えると、人間の内部に構築される環境のイメージや意味づけといった内的・心理的な環境と外部の物理的環境との相互の関係を捉える必要がある」^{d)}こと、および「施設計画では利用者の「使いやすい施設環境」だけでなく、「使い心地のよい施設環境」のあり方を求めていく」^{e)}といった問題意識が背景となっている。また、長澤泰らは「建築地理学ではさまざまな側面からの観察で得た断片的・部分的情報から全体性を考察・省察し、推論して、鋭い洞察をすることが求められている」^{f)}と論じており、平均的な解を抽出するのではなく、個人個人の異なったパーソナリティ・経験とそれを包括する環境のあり方について、相互浸透論の立場から建築計画学の研究が今後どのようになされるべきか示唆を与えている。

次に、建築計画学全体に関わる問題意識の設定について整理する。集合住宅や公共施設の量的整備が求められていた時代においては、建築計画学の役割は建築の質的ボトムアップを担う標準設計を中心に検討されていた。そのため建築計画学を専門とする大学研究室の研究成果が設計に反映され、さらに出来上がった建築空間に対して調査研究を行うといったスパイラルアップの関係性が構築されていた。量的整備の段階を終えた今日では、研究者が設計に関わる機会を持つことが難しく、調査研究の意義を明確に打ち出す必要性が生

c)「同じ環境の中でも、違った役割をもっている人は、目的も違っているので、自分を取り巻く環境のとらえ方も違うのである。このようなモデルでは、人が外の世界に対して心の中で抱いている意味（概念）を理解することがカギとなってくる。「場所」は、その物理的属性、そこでの行動、人がその場所に対して持っている概念、の3つから成り立っていると考えられている。」

日本建築学会編：よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門^{1,2)}、p12,2000.05 より引用

d)「環境と人間との関係を探っていくと、人間行動は環境の側から捉えるというパラダイムを個性の側面よりとらえるという方向に転換することになった。つまり、環境が個人個人に与えるダイナミックな「意味」が人間行動に及ぼす影響は顕著で、意味そのものがそもそも個人個人のパーソナリティや経験・記憶に根ざしたものであることを考えると、人間の内部に構築される環境のイメージや意味づけといった内的・心理的な環境と外部の物理的環境との相互の関係を捉える必要があるのである。」

長澤泰・伊藤俊介・岡本和彦：建築地理学^{1,3)}、p52,2007.05 より引用

e)「このような脱皮を実現するには、「まえがき」でも述べたように、これまでの建築計画学の研究者が、ある水準の質を保ちつつも量的な充足を実現するという目前にある明瞭な目標の達成を優先しなければならない状況で、気にはなるがひとまず棚上げにせざるを得なかった事柄を、丹念に棚卸しをして、あらためて考えてみるのが有効であることを発見したのである。棚上げにしていた問題とは例えば、集合住宅計画では居住者が「住みやすい住環境」だけではなく「住み心地のよい住環境」のあり方の探求、施設計画では利用者の「使いやすい施設環境」だけでなく、「使い心地のよい施設環境」のあり方を求めていくことであると考え。」

長澤泰・伊藤俊介・岡本和彦：建築地理学^{1,3)}、p70,2007.05 より引用

f)「吉武泰水は、建築計画の調査分析の段階を観察・考察・省察・洞察という語で簡潔に言い切っている。また門内輝行は、「驚くべき事実を観察により発見するみずみずしい感性」と「断片的・部分的な情報から全体性を推測する鋭い洞察力」が、建築計画の研究者には必要であると述べている。これらを合わせると、今後、建築地理学ではさまざまな側面からの観察で得た断片的・部分的情報から全体性を考察・省察し、推論して、鋭い洞察をすることが求められているといえよう。」

長澤泰・伊藤俊介・岡本和彦：建築地理学^{1,3)}、p71,2007.05 より引用

g) 「社会問題の一定の解決や複雑化に伴い、研究の前提となる課題（実目的）が必ずしも所与ではなくなった。これは計画学を妥当化していた「リアリティ」の喪失を意味する重大な出来事であったと想像される～情報技術がますます進化する中でリアリティの意味も変容しており、それに計画学はどのように応答するのか、という点である。また社会全体と計画学の接続が見出しにくい中で、いかに個別のフィールドに埋没することなく横断的な議論を展開し、研究成果を理論化・共有知化するのかという点である。」

前田昌弘：「再定住社会」のデザインに向けた住宅・地域計画の研究と実践，建築・都市・農村計画研究のカットングエッジ - 若手研究者は研究テーマといかに出会い、発展させてきたか - 日本建築学会編^{1.4)} p6, 2018.09 より引用

h) 「21世紀を迎えて、科学・技術・社会・経済・文化・環境などの発展にともない、建築・都市計画の領域では、安全性、健康性、利便性等の機能・性能にとどまらず、快適性、アメニティ、持続可能性といった意味・価値を充足する必要が生じていること、標準的な解を超える個別的な解が求められていること、都市化・情報化・高齢化・国際化への対応を迫られていることなど、以前は扱っていなかった情報を抽出する新しい調査方法に対するニーズが高まっている。」
日本建築学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法（改訂版）^{1.5)} p14, 2012.05 より引用

じている。また、前田も指摘するように、「社会問題の一定の解決や複雑化に伴い、研究の前提となる課題（実目的）が必ずしも所与」^{g)}ではなくなり、建築計画学の研究そのものの問題意識をどのように捉えるかが問われている。これに関わる内容として門内は、「標準的な解を超える個別的な解が求められている～中略～以前は扱っていなかった情報を抽出する新しい調査方法に対するニーズが高まっている」^{h)}と論じ、複雑化した社会における建築のあり方を把握するための調査手法開発の重要性を指摘している。

1.1.2 保育施設計画・設計の今日的課題

本研究で取り扱う保育施設とは、幼稚園、保育所、認定こども園を指している。ここではまず、本研究で調査・実験対象とする幼稚園の歴史を紐解いていくこととする。

1) 幼稚園の発祥とその空間構成

幼稚園とは「満3歳から小学校就学の始期に達するまでの幼児を対象に「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」施設¹⁾」である。我が国最初の幼稚園とされているのは、東京女子師範学校附属幼稚園（現在のお茶の水女子大学附属幼稚園）であり、「フレーベルの恩物^{注1.1)}、計数、唱歌、説話、遊戯など25の子目が含まれ～中略～わが国幼稚園の範²⁾」となり、この後全国各地で幼稚園が建設されていった。恩物を中心に幼児の教育を行おうとする姿勢は、小学校就学前の準備機関ではないことを物語っている。一方、当時の幼稚園は、上流家庭の子どもが通うものと認識されており、庶民の子どもたちのうち、親が養育できない場合は学齢未満で小学校に通っているものもいた。そこで「貧民力役者等の子どもで父母がその養育を顧みる暇のない者を入れるようにすべきであるとして簡易幼稚園を奨励³⁾」し、幼稚園が普及していった。その後、幼稚園保育及設備規定が公布され「建物は平屋造りとし、保育室、遊戯室、職員室などを備えること、保育室の大きさは幼児4人につき1坪より小さくならないこと、遊園は幼児1人につき1坪より小さくならないこと、恩物、絵画、遊戯道具、楽器、黒板、机、腰掛、時計、寒暖計、暖房器具などを備えること⁴⁾」などが具体的に定められることとなった。このうち唯一の面積基準である1坪の根拠は見当たらない。このことは、昭和31年に制定された幼稚園設置基準⁵⁾も同様であり、学級数に応じて園舎面積と運動場面積を定めているものの、建物と運動場という配置の考え方や、室配置自体も学級を中心としており、幼児が生き生きと過ごすための空間整備というよりは小学校の幼児版といった基準となっている。すなわち、幼稚園の設立当初は、フレーベルの教育方法を実践し、さらに倉橋惣三の主導により幼児の自発的な活動を尊重する流れに至るまで、小学校とは異なった教育・保育の流れを組むことになるが、建築の基準はこうした特性と関わりなく定められていたと思われる。さらに幼稚園設置基準は後の改

i) 「幼稚園は、満3歳から小学校就学の始期に達するまでの幼児を対象に「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」施設である。」

森上史朗・柏女霊峰編：保育用語辞典¹⁶⁾、p18-19,2000.12 より引用

j) 東京女子師範学校附属幼稚園：「1876(明治9)年11月、東京女子師範学校内に設置されたわが国最初の官立幼稚園。～中略～保育科目である物品科・美麗科・知識科の3科には、フレーベルの恩物、計数、唱歌、説話、遊戯など25の子目が含まれた。1878(明治11)年に保育見習生、保姆練習科が置かれ、保育者の養成も開始された。また中村五六、東基吉、和田実、倉橋惣三が主事や関係者となるなど、わが国幼稚園の範として知られた。」

森上史朗・柏女霊峰編：保育用語辞典¹⁶⁾、p360,2000.12 より引用

注1.1) 恩物：「1837年に幼稚園の創始者フレーベルが幼児教育の教材・遊具として考案したGabeの日本語訳。フレーベルは、幼児を神の認識にいたらせるために、神の創った自然の姿を簡易に象徴化したGabeを与えて遊ばせるのがよいとした。日本では、恩物は遊具の名称であると同時に保育内容そのものを指し、フレーベルの二十恩物（第一恩物：6色の毛糸で包んだ珠、第三恩物：立方体、第七恩物：色板など）に対応する「二十遊嬉」（六球法、第一積体法、置板法など）が幼稚園の保育科目となった。恩物による保育は、縦横に線の引かれた「恩物机」に幼児を座らせ、保育者の指示にしたがって机の線に合わせて積み木を組み立てさせるなどの一斉方式が多かった。1890年代までの保育は恩物中心であったが、「幼稚園保育及設備規定」（1899）では「手技」の中に恩物が一括され、大正・昭和期を通じて恩物に対する評価はしだいに低くなっていった。」

森上史朗・柏女霊峰編：保育用語辞典¹⁶⁾、p363,2000.12 より引用

k) 簡易幼稚園の奨励：「明治十五年十二月、文部卿は各府県の学務課長に、文部省直轄の幼稚園は規模が大きすぎるため都会でないに設置しにくいので、もっと簡易な編成の幼稚園を新設し、貧民力役者等の子どもで父母がその養育を顧みる暇のない者を入れるようにすべきであるとして簡易幼稚園を奨励した。～中略～学齢未満の幼児を小学校に就学させることを禁止し、簡易な幼稚園の施設を奨励したが、このことはその後の幼稚園の発達と重要な関連をもっているといえよう。」

文部省：学制百年史¹⁷⁾、1981.9 より引用

1) 幼稚園保育および設備規程：「三十二年六月、～中略～幼稚園保育及設備規程」を公布した。～中略～1) 保育時数は一日五時間以内とすること、2) 保育一人の保育する幼児の数は四〇人以内とすること、3) 一幼稚園の幼児数は一〇〇人以内とし、特別の事情があるときは一五〇人まで増加することができること、4) 保育項目を遊戯・唱歌・談話・手技とすること、5) 建物は平屋造りとし、保育室、遊戯室、職員室などを備えること、6) 保育室の大きさは幼児四人につき一坪より小さくならないこと、7) 遊園は幼児一人につき一坪より小さくならないこと、8) 恩物、絵画、遊戯道具、楽器、黒板、机、腰掛、時計、寒暖計、暖房器具などを備えること、などを規定した。またその中で保育の要旨も制定した。～中略～小学校令施行規則のなかに加えることとなったが、その大綱は変わらなかった。さらに四十四年の一部改正、大正十五年の幼稚園令公布などに際しても、その大綱は変わらず、昭和二十二年の学校教育法の制定まで、わが国の幼稚園のあり方を法制上規定していたのである。」

文部省：学制百年史¹⁷⁾、1981.9 より引用

m) 昭和31年制定 幼稚園設置基準¹⁸⁾ より引用

「第三条 一学級の幼児数は、三十五人以下を原則とする／第四条 学級は、学年の初めの日の前日において同じ年齢にある幼児で編制することを原則とする。／第九条 幼稚園には、次の施設及び設備を備えなければならない。ただし、特別の事情があるときは、保育室と遊戯室及び職員室と保健室とは、それぞれ兼用することができる。職員室、保育室、遊戯室、保健室、便所、飲料水用設備、手洗用設備、足洗用設備
 第十一条 幼稚園には、次の施設及び設備を備えるように努めなければならない。放送聴取設備、映写設備、水遊び場、幼児清浄用設備、給食施設、図書室、会議室
 別表第1（園舎の面積） 1学級 180平方メートル／2学級以上320+100×（学級数-2） 平方メートル
 別表第2（運動場の面積） 2学級以下 330+30×（学級数-1） 平方メートル／3学級以上 400+80×（学級数-3） 平方メートル」

訂により、1学級あたりの人数が40人から35人に引き下げられたこと、原則平屋建てから原則2階建て以下と緩和されるなどの変更点はあったものの、基本となる面積基準は制定時から現在まで全く変わっていない状況である。

2) 保育室の高機能化への未対応

特に保育室空間は変わらないまま、時代が進むとともに子どもの遊びを中心とした多様な保育実践が謳われるようになり、保育室内に各種遊びコーナーを設置する園が常態化してきた。しかしながら、設置基準自体は一斉的な保育を実践していたころと変わらず、子どもの多様な活動を担保するようなものとなっていない。さらに、遊びコーナーの常設化により使用できる空間が狭まっているにも関わらず、多様な保育活動が盛り込まれるようになってきており、保育室の高機能化をどのように解消するかについて放置されている実情にある。

3) 設計者への情報提示不足

保育施設の設計は、当初子どもや保育施設を研究分野とする大学教員が担っていた。近年では、保育施設を専門とする設計事務所や、様々な設計をする中で、保育施設を得意とする設計事務所なども散見されるようになってきた。最近では、これまで住宅を主に扱ってきた若手設計者が大きな建築物を設計するためのステップとして保育施設を設計することが生じており、意欲的なデザインもみられる。しかし、デザインを重視するあまり、保育施設として細やかな設計がされているとはいいがたい建築物も散見される。これは、環境が園児に及ぼす影響について、設計者が正しく理解していない可能性とともに、どのような遊びが展開されているのか把握していないこと、保育方針に合致した環境構成のあり方を理解していないことなども要因として考えられる。そのため、想定すべき具体的な遊びや保育施設計画のあり方について提示する必要性を痛感するのである。

1.1.3 保育施設における平面計画の特徴

わが国における保育施設の平面計画の特徴を整理する。基本的な平面形である片側にテラスや廊下が設けられたプランは省略し、特徴的な事例について扱う。

1) 保育室同士が切り分けられた平面構成

□むさしの幼稚園（図 1.1）：保育エリアと管理エリアが分けられたプラン構成で、保育エリアの端に遊戯室が設置されている。園庭に向かって縁側が設けられているが、保育室間にギャラリーと称する廊下があり、縁側の反対側にも廊下があるなど廊下や縁側で保育室が独立したプランである。また、水場や便所も保育室ごとに設けられている。

□みどりの幼稚園（図 1.2）：プロポーションが異なる多角形の室が連なるように配置され、壁面に大きく開口が開けられていることで中廊下の閉鎖性を解消している。壁柱が空間に色どりを与えるとともに死角を生み出し、多様な居場所を創出している。3・4歳児は異年齢クラスとなっており、室の間に共有スペースが設けられている。

2) ひとつながりの平面構成を有する事例

□ふじようちえん（図 1.3）：リニアな形態を楕円形にひとつながりにした平面形で、中庭と外側の庭に分けられている。上部の屋根もひとつながりとなっており園児が走り回ることができる。樺の木が建物を貫いており、トップライトが設けられるなど屋根部分は立ち寄るためのきっかけが与えられている。保育室はいくつかのエリアに分けられているが、基本的には壁を極力少なくした一室空間となっている。

3) 園児が場所を移動しながら活動が展開する事例

□きたの保育園（図 1.4）：0歳児以外の1～5歳児が異年齢集団で過ごしており、複数のグループに分けられている。保育室はキッチン、食堂、居間、寝室に分けられ、ふすま等で仕切られている。居間は遊戯室等の共有スペースとつながっており、各保育室が独立した家のような形態となっている。

□ささべ認定こども園（図 1.5）：保育棟と管理棟を玄関ホールで分けている。保育棟は遊ぶ場所、寝る場所、食べる場所、身支度する場所に分けられ、園児は活動に応じて場所を移動しながら過ごすプランとなっている。寝る場所は生活リズムを考慮して0・1歳児

と2歳児に分けられ、コット（簡易ベッド）が並べられる最小限の大きさを規定されている。

4) コーナー保育を実施している事例

□認定こども園こどものもり（図 1.6）

幼保一体型施設の先駆けであり、幼稚園部分と保育園部分を明確に分ける必要があった。そのため、ランチルームを中心に幼稚園部分（西側）と保育園部分（東側）が緩やかに分けられている。不整形な敷地に寄り添うように建物が配置されており、南側に園庭、遊戯室は敷地の端に配置されている。保育室は仕切りが少なく、コーナー保育のための環境が整備されている。

□新宿せいが保育園（図 1.7）

大きな一室空間の中に可動家具で遊び内容に応じたゾーンと呼ばれる空間を複数つくり出している。異年齢保育を実施しており1階に0・1歳児、2階に2歳児と3～5歳児の3つの集団に分かれている。ゾーンはその時々での遊びの様子によって臨機応変に変更でき、隣接するゾーンに遊びが広がることを意図している。

5) 夜間保育のための室を分けている事例

□どろんこ保育園（図 1.8）：繁華街にあり、夜間保育を実施している。保育室は通常の間で過ごす園児と夜間に過ごす園児で、それぞれ専用の保育室が設けられている。1・2階が保育室、3階がホールと学童保育室が設置され、上階に行くほどセットバックした階段状の形態となっている。

6) 地域住民の利用を想定した計画事例

□まちの保育園小竹向原（図 1.9）：保育施設は園児たちの安全性の観点から、地域から隔離された施設となりやすい。それを払しょくしたのがこの事例であり、保育所の中にベーカリーカフェが一体的に計画されている。カフェは通路で保育室と区切りながらも、保育園の日常を感じ取れる配置となっており、保育施設のまちに対する開き方が検討されている。

以上、施主との協働で園児の活動を具体的にイメージし、それに適した空間整備を目指した、多様な建築形態が実現している。ただし、特に遊び場所やコーナーの計画に着目すると、建築の表現を重視し、大まかな器をつくることに留まっていると思われる事例もある。

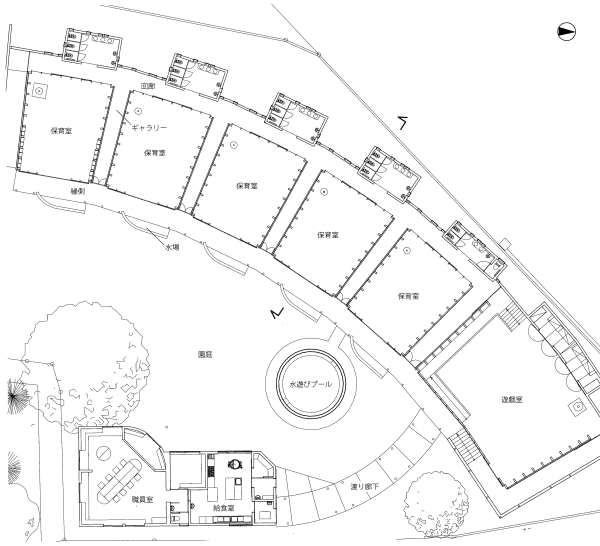


図 1.1 むさしの幼稚園 平面図
山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設^{1.9)} p39 より引用

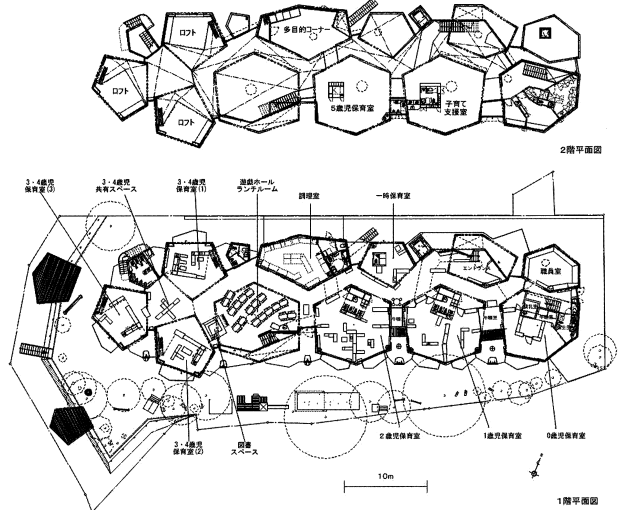


図 1.2 みどりの保育園 平面図
日本建築学会編：こどもの環境づくり事典^{1.10)} p185 より引用

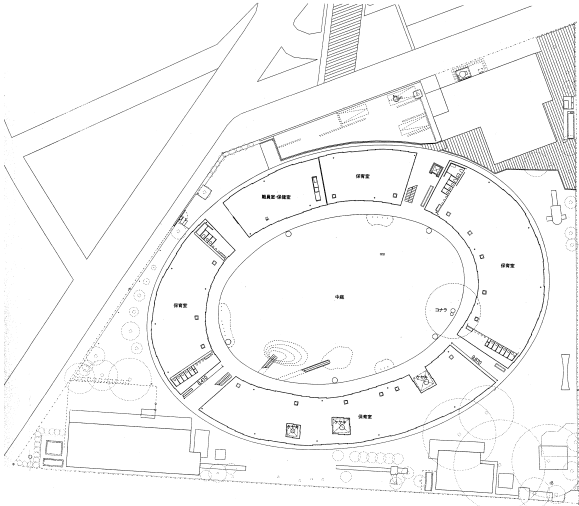


図 1.3 ふじようちえん 平面図
新建築 2007年5月号^{1.11)} p114 より引用

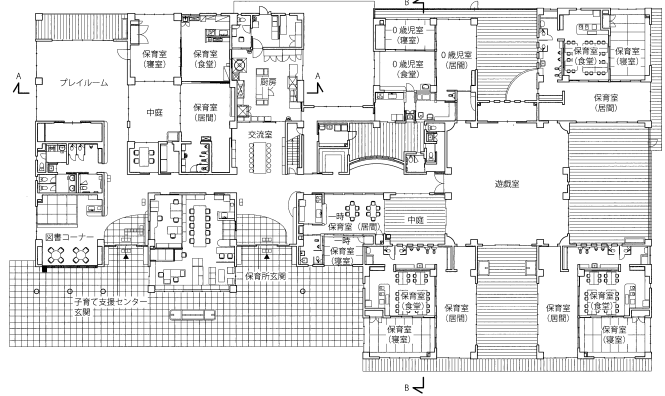


図 1.4 きたの保育園 平面図
山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設^{1.9)} p51 より引用

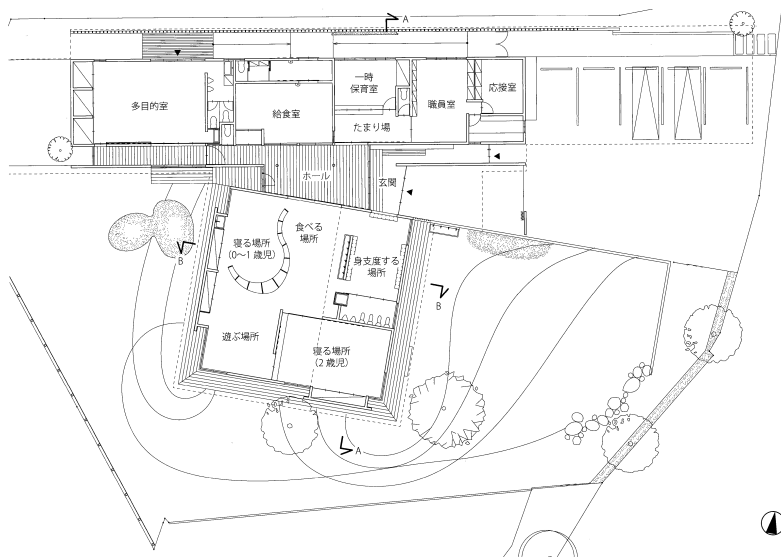


図 1.5 ささば認定こども園 平面図 山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設^{1.9)} p45 より引用

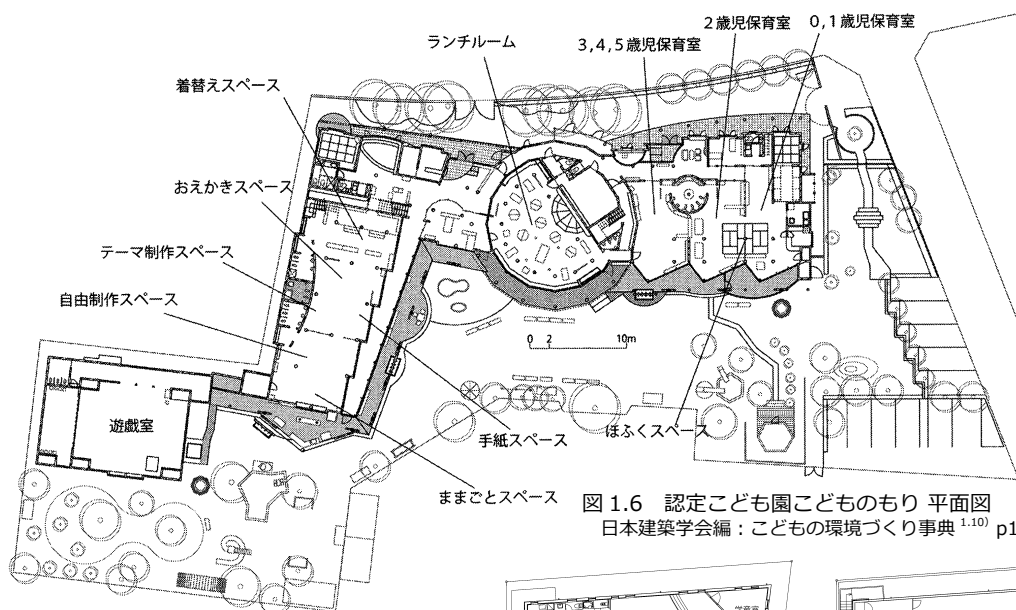


図 1.6 認定こども園こどものもり 平面図
日本建築学会編：こどもの環境づくり事典^{1.10)} p155 より引用

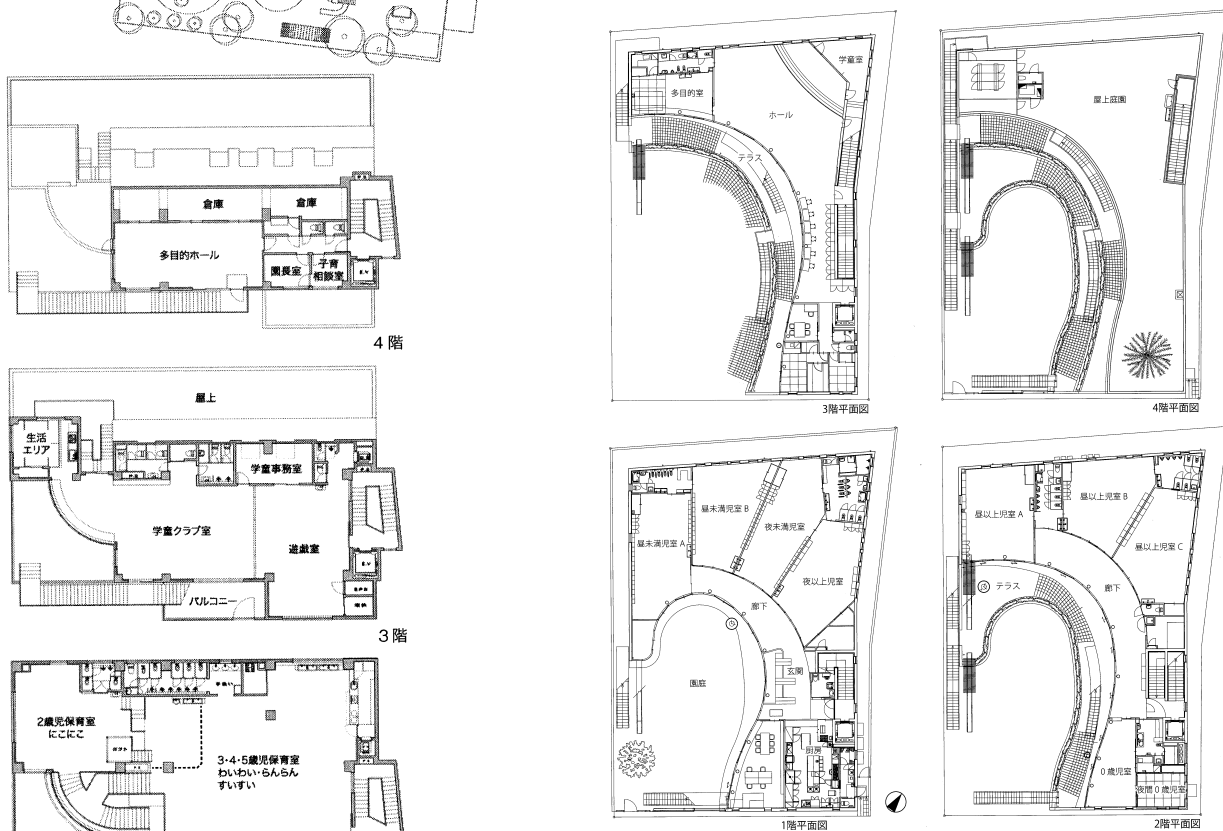


図 1.8 だろんこ保育園 平面図
山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設^{1.9)} p47 より引用

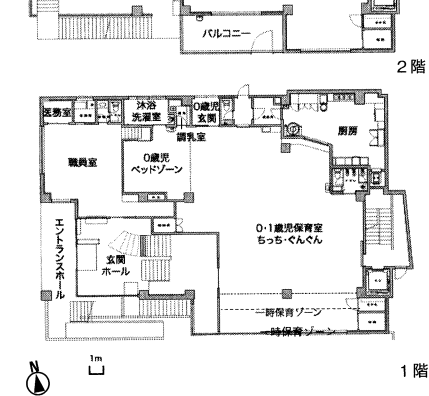


図 1.7 新宿せいが保育園 平面図
日本建築学会編：こどもの環境づくり事典^{1.10)} p171 より引用

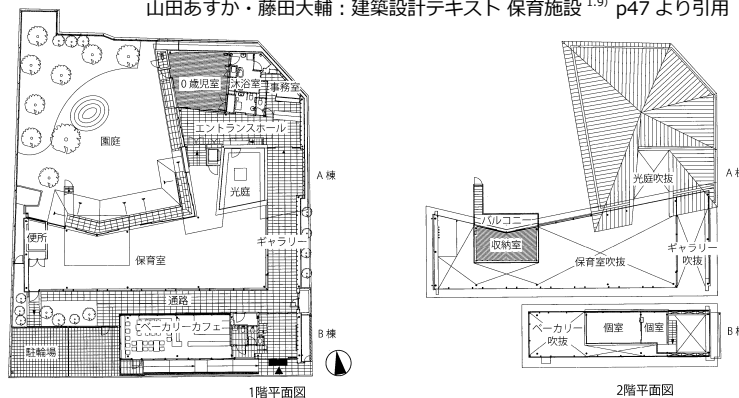


図 1.9 まちの保育園 小竹向原 平面図
山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設^{1.9)} p19 より引用

1.1.4 国が定めている施策の概要

ここでは現在提示されている幼稚園整備のための教育要領および整備指針を整理する。

平成 29 年に改訂された幼稚園教育要領の前文では、「遊びを生み出すために必要な環境」ⁿ⁾を整えることを具体的に示しており、第 1 章では幼稚園教育は「環境を通して行う」^{o)}ことを基本とし、「幼児の主体的な活動が確保されるよう一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的な環境を構成しなければならない」^{p)}と明記されるなど、幼児一人ひとりの教育を重視する姿勢を打ち出している。これは改訂前から示されていた事柄ではあるが、幼稚園教育として着目されがちなクラス集団のための保育環境整備ではなく、幼児一人ひとりに着目した個別の遊び環境を計画する重要性を示している。

平成 30 年に改訂された幼稚園施設整備指針では、幼児の主体的な活動を確保するため「幼児の遊びの場を十分に確保すること、小グループや一人一人の特性に応じた活動を可能にする多目的な空間を計画すること～中略～弾力的で多目的な変化のある空間を計画」できる空間を例として挙げている^{q)}。また、幼児の多様な活動に即するため、「様々なコーナーを形成できる面積、形状」や「家具や、パーティション等を簡単に収納」することが有効であると示している^{r)}。この整備指針の文面は、主に保育室内の整備のみを念頭において書かれている。また、幼稚園設置基準は、1.1.2 で述べたとおり、クラス数を下回らないように保育室を整備することが明文化されており、年齢別のクラス単位運営を想定したものにとどまっている。以上を鑑みると、様々な要求を詰め込んで、保育室内の環境を多様にするには限度があるため、園児の遊びの実情に即した環境セッティングのパラダイムシフトが必要と考えられる。

n) 「幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な環境を整え、一人一人の資質・能力を育てていくことは、教職員をはじめとする幼稚園関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から幼児や幼稚園に関わる全ての大人に期待される役割である。」幼稚園教育要領（平成 29 年改訂）¹¹²⁾ 前文より引用

o) 「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」幼稚園教育要領（平成 29 年改訂）¹¹²⁾ 第 1 章総則、第 1 幼稚園教育の基本 より引用

p) 「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」幼稚園教育要領（平成 29 年改訂）¹¹²⁾ 第 1 章総則、第 1 幼稚園教育の基本 より引用

q) 「自発的で創造的な活動を促す計画 (1) 幼児の主体的な活動を確保し、幼児期にふさわしい発達を促すことのできる施設として計画することが重要である。その際、幼児の遊びの場を十分に確保すること、小グループや一人一人の特性に応じた活動を可能にする多目的な空間を計画すること、保育室と遊戯室や図書スペース等の連携に配慮することも有効である。また、各種視聴覚機器等の教材を必要に応じて活用できるように計画することも有効である。(2) 幼児の多様な活動に即して、幼児の豊かな創造性を発揮したり、幼児期にふさわしい生活を展開したりすることのできる施設として計画することが重要である。その際、様々なコーナーを設定したり、家具の配置を工夫できる弾力的で多目的な変化のある空間を計画したりすることも有効である。」幼稚園施設整備指針（平成 30 年改訂）¹¹³⁾ 第 2 節第 1 より引用

r) 「保育空間 (2) 面積、形状等 ② 幼児が様々な体験を行うことができるように、活動の内容や方法等に応じて様々なコーナーを形成できる面積、形状とすることが重要である。また、家具や、パーティション等を簡単に収納することが可能な計画とすることが望ましい。④ 保育室の一部に、畳やカーペット等を採用したり、ソファやベンチ等を設置したりすることも有効である。」幼稚園施設整備指針（平成 30 年改訂）¹¹³⁾ 第 3 章園舎計画 第 2 より引用

1.1.5 保育施設における幼稚園の位置づけ

1) 保育所・認定こども園・幼稚園の園児割合（表 1.1）

表 1.1 は保育所、認定こども園、幼稚園に通う園児数の現況を整理したものである。施設により受け入れを開始する年齢・月齢は異なるが、対象となる園児の年齢は、保育所・認定こども園は0～5歳、幼稚園は3～5歳である。0歳は保育所12.9%、認定こども園1.9%、推計未就園児85.2%で施設に通っている園児割合は15%程度である。1歳になると、保育所36.7%、認定こども園5.5%、推計未就園児57.9%で4割強の子どもたちが施設に通っている。2歳も同様の状況であるが、約半数の子どもたちが施設に通っている。3歳では保育所42.7%、認定こども園11.8%、幼稚園36.7%、推計未就園児8.9%である。未就園児の割合がぐっと少なくなり、保育所と幼稚園は4割前後の子どもが通っている。この状況は4歳も同様であるが、保育所よりも幼稚園の園児割合が若干高くなっている。5歳では保育所40.7%、認定こども園12.8%、幼稚園44.6%、推計未就園児1.9%であり、幼稚園の園児割合が最も高くなっている。すなわち、近年の待機児童が常態化している状況を受けて、保育所および認定こども園の整備が着目されているが、3歳児以上が4割前後通っている実情を踏まえると幼稚園の環境整備も重要であることが分かる。

2) 事業内容と設備・面積等の差異（表 1.2）

表 1.2 は、保育所、認定こども園、幼稚園の差異について整理したものである。設置の目的としては、保育所：保育に欠ける乳幼児の保育、認定こども園：教育・保育と保護者への子育て支援、幼稚園：教育であり、根拠法令が近年整備された認定こども園は子育て支援が明文化されている。対象児は保育所：保育に欠ける0～5歳児、認定こども園：0～5歳児、幼稚園：満3歳～5歳児であるが、

表 1.1 保育所・認定こども園・幼稚園の園児割合（%）（平成 29 年度）

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
保育所	12.9	36.7	41.8	42.7	42.3	40.7
認定こども園	1.9	5.5	6.6	11.8	12.1	12.8
幼稚園	-	-	-	36.7	42.8	44.6
推計未就園児	85.2	57.9	51.6	8.9	2.7	1.9
合計（万人）	100.2	96.0	97.4	101.1	101.7	104.5

注）保育所は地方裁量型認定こども園、保育所型認定こども園、特定地域型保育事業を含む。幼稚園は特別支援学校幼稚部、幼稚園型認定こども園を含む。なお数値は次の調査による。

保育所：平成 29 年待機児童数調査
幼稚園：平成 29 年度学校基本調査
認定こども園：平成 29 年度認定こども園に関する状況調査

保育所等における保育の質の確保・向上に関する基礎資料^{1,14)}「保育園・幼稚園・幼保連携型認定こども園の年齢別利用者数及び割合」（厚生労働省：平成 30 年 5 月）より作成

近年では子育て支援として2歳児を受け入れている幼稚園もある。所要室が大きく異なる部分は、保育所・認定こども園では調理室が必須なことである。また幼稚園は原則遊戯室が必要であるが、保育所・認定こども園では、整備すべき保育空間として「保育室または遊戯室」と書かれており、必ずしも遊戯室を必要としない。面積の考え方にも差があり、保育所・認定こども園は一人当たりの面積が示されているが、幼稚園は学級数に応じて面積が定められている。このことは屋外遊技場・運動場も同様であり、保育所は2歳児以上で3.3㎡/人、幼稚園は学級数に応じて面積が定められている。認定こども園は両者の基準であるので、どちらか大きい方の面積となる。また幼稚園では園舎の面積が定められており、具体的な保育室、遊戯室等の面積が定められていない。このことは、園舎面積が基準以上であれば、幼稚園では屋内空間構成や面積構成が弾力的に設定できるとも解釈できる。

表 1.2 保育所・認定こども園・幼稚園における事業内容と設備・面積等の違い

		認可保育所	認定こども園	幼稚園
事業内容	所管	厚生労働省	文部科学省・厚生労働省	文部科学省
	根拠法令	児童福祉法	就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律	学校教育法に基づく学校
	目的	保育に欠ける乳幼児を保育する	小学校就学前の子どもに対する教育・保育並びに保護者に対する子育て支援	幼児を教育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する
	設置者	地方公共団体、社会福祉法人等で設置に当たっては知事の許可が必要。近年、社会福祉法人以外の企業、学校法人等が設置することも認められるようになった。	1. 幼保連携型（認可保育所と認可幼稚園が連携して運営） 2. 幼稚園型（認可幼稚園が長時間保育・子育て支援等の保育園の機能も備える） 3. 保育所型（認可保育所が保育に欠ける子ども以外の子どもも受け入れる） 4. 地方裁量型（上記以外）	国、地方公共団体、学校法人等。設置に当たっては、市町村立幼稚園の場合は都道府県教育委員会、私立幼稚園の場合は知事の許可が各々必要。例外規定により、個人立も認められていたが、近年、学校法人以外の企業、社会福祉法人等が設置することも認められるように。
	設置・運営の基準	児童福祉施設最低基準（省令）	各県で定める認可基準	幼稚園設置基準（省令）
	対象児	保育に欠ける乳児・幼児・児童（一般的には0歳～5歳の乳幼児が対象）	保育に欠ける子どもも受け入れて、教育・保育を一体的に行う。すべての子育て家庭を対象に子育てで不安に対応した相談等を提供。	満3歳から小学校就学の始期に達するまでの幼児。近年一部の園では満3歳の誕生日の前日から入園している。また、子育て支援として2歳児保育を実施する園もある。
	1日の教育・保育時間	8時間（原則）で延長保育もある。夜間保育を実施する園もある。	原則、4時間（短時間）および8時間（長時間）。延長保育もある。	4時間（標準）。概ね公立園ではこの基準どおり運営。多くの私立園では少子化対策として預かり保育が実施され、長時間保育を実施している。
	年間の教育・保育日数	規定なし。ただし設置の目的から長期休みは設けず、日曜、祝祭日以外の休みは原則していない様子。	入所児童に応じて施設で決定。	39週以上。概ね夏休み・冬休み等の長期休みがあるが、その期間中も預かり保育等として保育をする園もある。
設備・面積等	一学級当たり幼児数・教員（保育士）当たり幼児数	一学級当たり乳幼児数・学級編制基準なし。一保育士当たりの乳幼児数は乳児3人、1歳以上3歳未満児6人、3歳以上4歳未満児20人、4歳以上児30人。	0歳から2歳児は保育所と同様の配置が望ましい。3歳から5歳児は概ね子ども20人から35人に1人。	一学級当たり幼児数35人以下（原則）。実際には3歳児等は20人以下の場合が多く、複数担任を実施している園もある。
	所要室等	保育室または遊戯室、乳児室またはほふく室、便所、調理室、医務室		職員室、保健室、保育室、遊戯室、便所、飲料水設備、手洗い、足洗い用設備
	乳児室またはほふく室面積	0・1歳児 乳児室 1.65㎡/人以上 ほふく室 3.3㎡/人以上		-
	保育室または遊戯室面積	2歳児以上 1.98㎡/人以上		保育室の数は学級数以上
	屋外遊技場・運動場	2歳児以上 3.3㎡/人以上（代替場所も可の緩和措置あり）	2歳児：保育所と同等の基準 3歳児以上：幼稚園・保育所両方の基準	2学級以下：330+100×（学級数-1）㎡ 3学級以上：400+80×（学級数-3）㎡
	園舎	-		1学級：180㎡ 2学級以上：320+100×（学級数-2）㎡
その他	最低基準を満たさない等の理由の他、休日・夜間保育等、保護者の様々なニーズに対応するために意図的に認可を受けない施設もある。	認定施設以外は「認定こども園」と表示できない	設置基準を満たし認可を受けた施設以外は「幼稚園」と表示できない。	

保育所と幼稚園と認定こども園との比較表¹⁾¹⁵⁾（奈良県橿原市）、事業内容と施設設置基準の違い（建築設計テキスト保育施設¹⁾⁹⁾ p25）をもとに作成

1.2 本研究の目的

1) 前節で示した背景の整理

本研究の目的に関わる背景について以下の通り整理する。

- ・ 建築計画学が扱う研究は、個人的特性の把握から空間の質的向上を目指す必要があり、断片的・部分的情報から全体のあり方を考察する必要がある
- ・ 現在の建築に求められる課題を把握するための、調査・実験手法の開発が重要である
- ・ 幼稚園の面積基準は制定時から現在まで変化がないが、保育室は高機能化しているため、その解消が課題である
- ・ 幼稚園設置基準は、年齢別のクラス単位運営を想定したものにとどまっている
- ・ 他の保育施設に比べて、幼稚園は屋内空間構成や面積構成が弾力的に設定できると解釈できる
- ・ 想定すべき具体的な遊びや保育施設計画のあり方について提示する必要がある

すなわち、保育施設の建築計画を考える上では、園児一人ひとりの個性を把握して、個別解から空間の質的向上を目指す必要があり、そのための研究的蓄積および調査・実験手法の開発が急務である。また、建築計画学および幼稚園を取り巻く現状を鑑みると、クラス単位を中心とした幼稚園計画の考え方が、クラス単位の活動のみを重視した設計に留まらせているが、一方で幼稚園設置基準をみると空間構成を弾力化できる可能性があるため、園児一人ひとりの活動実態から環境の整備手法を考察する必要がある。

2) 本研究の目的

幼稚園教育要領でも明文化されているとおり、幼児の主体的な活動を誘発する空間を計画するためには、園児一人ひとりの行動実態や心理的評価を把握することが幼稚園の建築計画を考える第一段階であると思われる。

次の段階は、園児一人ひとりを扱う行動実態や心理的評価の把握手法のあり方について検討することである。建築計画学の基本は平面図等の図面に行動を記録し、セッティングされた環境と人間の応答関係を考察するもので、一般的には5分または10分程度の時間断面で活動を区切り、平面図上にプロットすることで、全体の活動

がどのように推移しているか、もしくは場所やその他ソフト面の影響がどのように働いているのか見定める方法がとられている。この調査でも園児一人ひとりに着目することはできるが、細やかな行動の軌跡や行動選択に至った経緯などについては記録・分析することが難しい。そこで、本研究では時間的経過を丁寧に観察しながら、環境の中で人間がどのようにふるまい、行為を選択し、また環境に働きかけて過ごしているかについて取り扱うこととしたい。また、園児は、言語・文字表現能力に個人差があるため、心理的評価を研究として扱うことが難しい。園児の主体的な評価を担保しながら、園児にも可能な実験手法を模索・試行・評価する必要がある。

第三段階は、第二段階が解決できたとして、その結果、すなわち園児一人ひとりを調査・実験で対象とした知見の取り扱いである。従来のプロトタイプの提案を目指すのではなく、個人的特性をどのように包括し、また活動を誘発しながら空間の多様性を担保することができるのかについて論じる必要がある。その際、環境決定論的立場ではなく、蓋然論的立場から環境セッティングのあり方を検討していきたい。

以上の論考を踏まえて、本研究は次のステップを踏むこととする。まず園児一人ひとりの過ごし方について各室・空間別に時間的特性を把握し、保育施設計画の基本的課題について考察する。次にその課題をもとに把握すべき保育活動を見定め、その保育活動からみた各室・空間と環境要素の構成について考究することで、園児一人ひとりの主体的な活動を誘発するような保育施設計画について論考する。最後に、各部空間・要素に対する心理的評価を抽出し、研究で扱うことができる行動・心理の範囲の差異について論考する。以上の分析から、保育室機能の解体と再構築、保育施設で想定すべき基本的遊びと整備すべき環境、園児一人ひとりの個性からみた環境要素の配置などについて考察する。その上で、行動的側面と心理的側面から保育施設の環境を総合的に評価し、環境整備に関わる知見を提示することを目的としている。またこの知見は、園児一人ひとりの遊び・生活実態を対象としているため、幼稚園のみならず、保育所や認定こども園などの保育施設全般、もしくは子どもが遊びを展開する場所を計画する上でも有用な知見になりうると考えられる。

参考文献

- 1.1) J.ランゲ(著)・今井ゆりか(訳)・高橋鷹志(監訳):建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割, 鹿島出版会,1992.08
- 1.2) 日本建築学会編:よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門, 技法堂出版,2000.05
- 1.3) 長澤泰・岡本和彦・伊藤俊介:建築地理学—新しい建築計画の試み, 東京大学出版会,2007.05
- 1.4) 前田昌弘:「再定住社会」のデザインに向けた住宅・地域計画の研究と実践, 建築・都市・農村計画研究のカッティングエッジ-若手研究者は研究テーマといかに出会い、発展させてきたか-, 日本建築学会,2018.09
- 1.5) 日本建築学会編:建築・都市計画のための調査・分析方法(改訂版), 井上書院,2012.05
- 1.6) 森上史朗・柏女霊峰編:保育用語辞典, ミネルヴァ書房,2000.12
- 1.7) 文部省:学制百年史,1981.9
- 1.8) 文部省:幼稚園設置基準,1956.12(昭和31年12月)
- 1.9) 山田あすか・藤田大輔:建築設計テキスト保育施設, 彰国社,2017.04
- 1.10) 日本建築学会編:こどもの環境づくり事典, 青弓社,2014.09
- 1.11) 新建築 2007年5月号, 新建築社,2007.05
- 1.12) 文部科学省:幼稚園教育要領,2017.03
- 1.13) 幼稚園施設整備指針,2018.3
- 1.14) 厚生労働省:保育所等における保育の質の確保・向上に関する基礎資料,2018.05
- 1.15) 奈良県橿原市:保育所と幼稚園と認定こども園との比較表,2008.08

第2章 研究の位置づけと方法

- 2.1 既往研究の整理と本研究の位置づけ
- 2.2 本研究の調査・実験方法
- 2.3 本研究の構成

第2章 研究の位置づけと方法

2.1 既往研究の整理と本研究の位置づけ

2.1.1 既往研究の整理

近年、保育施設および幼児に関する研究は数多く行われている。そこで、論文において扱っているテーマ、施設種別、研究手法、研究の視点、主な知見・主張について表2.1～2.4のように整理した。

1) 保育方針と空間特性 (3論文)

主に海外の保育方針から保育空間の特徴を論じている。近年ではモンテッソーリやハンガリーの保育実践を把握し、日本の保育環境整備に活かそうとしている^{2.1-2.2)}。また教育分野では実習生に保育環境を評価させ、一斉保育に適した保育室の机・椅子の整列配置と遊びのため机・椅子が片づけられた保育室について保育方針の意義を読み解こうとしている^{2.3)}。

2) 施設全体のあり方 (3論文)

夜間保育所を対象とした北浦、木下らの一連の研究で、夜間保育所の遊び空間、生活空間、保育形態と平面形態から、総合的に夜間保育所のあり方を考究し、その知見は昼間に行われる保育施設にも適用できると論じている^{2.4-2.6)}。

3) 平面・空間分析 (7論文)

社会的要請に応じた幼保一体化や認定こども園への移行を受けて、幼保連携施設、幼稚園、保育所、認定こども園、幼保一体型施設、複合型保育所などの平面形態や面積把握を扱っている^{2.7-2.13)}。全国規模の現況を扱い施設種別の差異を論点とするもの、資料収集やアンケートからある種の型を提示するものなどがある。

4) 単位空間・面積 (2論文)

近藤・定行による一連の研究で保育所の面積基準を見定めようとしたものである^{2.14-2.15)}。つぶさな行動観察から食事、午睡、移行、遊びに必要な面積を積み上げており、これらの知見や視点が現行の最低基準を見直す手法として有効であると結論付けている。

5) 保育室 (6論文)

保育室内遊びコーナーの活動実態を扱った西本らの一連の研究では、持続的展開と発展的展開に独立したコーナーや起点となる遊びコーナーが重要と論じている^{2.16-2.17,2.21)}。コーナーの型を提示した山田、佐藤らの研究では、10種類の活動空間型を示し、2畳以下の空間がコーナー形成に有効であると論じている^{2.19)}。また、異年

年齢間の交流実態と物理的要因の関係を扱った細谷らの研究では、室間の壁がないこと、室に面したテラス・交流スペースが異年齢交流量に有効であると指摘している^{2.18,2.20)}。

6) 園庭（1論文）

正田・山田による研究で、遊びを基本6種、準基本8種、付加18種に分類し、物的環境要素の連続の仕方により遊び展開に差があることを論じている^{2.22)}。

7) 敷地外空間（6論文）

都心部の保育所や小規模保育拠点、複合型保育所など園庭が充分ではない、もしくは園庭がない施設では敷地外の空間を保育の場所としている。山田らの小規模保育拠点を対象とした一連の研究では、都市環境の利用状況に合わせた公園や移動経路の整備が必要であることを指摘している^{2.23,2.25-2.26)}。太幡・古川らは散歩行動に着目し、保育所の半径700mを保育環境として地域住民に認識してもらう重要性や散歩人数の少なさが散歩を楽しむために重要であると論じている^{2.24)}。松橋・三輪らは施設が保有する屋外環境活動の評価が低いほど園外活動の頻度が高まり、公園と道が多様な体験を積み重ねる地域資源・保育環境であると指摘している^{2.27)}。小池・定行は遊び環境として公園よりも園庭が有効であること、その中間領域の組み合わせが園庭機能の一部を代替できることを指摘している^{2.28)}。

8) 環境行動（7論文）

環境決定論的立場ではなく、環境と人間の相互浸透論的立場からそのあり方を捉える視点は保育施設でも研究がなされている。山田・上野らによる一連の研究は、園児固有の活動場面、行動の反復性などを示し、年齢に応じて活動場面の成立に影響する要素が異なることを指摘している^{2.31-2.33)}。樋沼・山田らは幼保一体型施設の人数規模の変動に着目し、長時間児と短時間児の園環境へのなじみに差があり、環境設定を容易にする動線計画、壁面配置等が重要と指摘している^{2.29)}。吉田・森は幼稚園における遊びのアフォーダンスが教諭と園児でギャップがあることを指摘している^{2.30)}。また、佐藤・高橋らは遊び集合の成立や時間的移行に着目し、形成された遊び集合そのものが要素と認識され遊びが展開することを論じている^{2.34-2.35)}。

9) 環境改善実践 (1 論文)

宮崎・山田らは1園における環境改善を実施し、遊び・食事・着替えを分け、遊びの連続性を意識した仕切りで空間を分けた実践を紹介している^{2.36)}。

10) 心理的評価 (7 論文)

坂戸らによる箱庭手法を用いた一連の研究では幼児を対象としたものも存在する^{2.37-2.38)}。ここでは日本以外の国民性との比較、そもそも創作行為がどのように発達するのかについて着目している。柳沢・岡崎らの居住空間構成法およびその発展である風景構成法では、模型や描画から幼児の精神世界を読み解こうとしている^{2.41-2.43)}。また、早川・橋本らは指示代名詞に関する実験を幼児に実施し、大人との領域の差異について論じている^{2.40)}。また伊藤・山田は成人の記憶に残る保育施設の空間や活動場面として遊びや屋外遊具の多さを指摘し、記憶に残る評価構造が比較的単純であることを示している^{2.39)}。

表 2.1 近年の先行研究整理 その1 (保育方針と空間特性/施設全体のあり方/平面・空間分析)

扱っているテーマ	施設種別	研究手法	研究の視点	主な知見・主張	文献
保育方針と空間特性	保育所	アンケート/行動観察	保育思想と空間特性	モンテッソーリ・ハンガリー思想の空間特性は、我が国の保育指針と共通性がある/思想ごとの空間的特異性として、乳児保育室、保育室の設え、家具などが挙げられる/一般的な園に対しても導入できる工夫を確認	白川 賢津子・定行 まり子: 保育・教育思想に基づく保育施設の空間特性 モンテッソーリ教育とハンガリーの保育実践を対象として,日本建築学会計画系論文集, No.734, pp.877-884, 2017.04
保育方針と空間特性	保育所	アンケート	保育思想と空間特性	生活関連は充足していたが、食育の観点からも重要な台所・配膳台の設置は3割程度である/専用室の設置が少なく子どもの個性や生活のペースを尊重することが困難/モンテッソーリ教育実践園では1人用の机が使用されるなど机の大きさが複数あるが、それ以外の園では比較的大きな机を一種類だけ設置していると推測される	高橋節子・元岡展久: モンテッソーリ保育所における物理的環境 -非モンテッソーリ保育所との比較による検討-, 日本建築学会技術報告集, No.44, pp.207-212, 2014.02
保育方針と空間特性	幼稚園	アンケート	実習生の保育環境評価	保育室の広さは設定保育の空間として適正でも遊び空間としてはやや狭いと評価/机や椅子がない保育室では、子ども相互の遊びが多く、様々な場所で遊んでいる	今川峰子: 幼稚園児の社会的行動に影響する保育空間と保育理念, 人間・環境学会誌, 2巻2号, pp.21-27, 1996
施設全体のあり方	夜間保育所	行動観察/平面分析	設置形態による保育形態と平面計画の実態	夜間専用園は小規模・単独保育だが、昼夜併設園は多様な保育形態をとり施設規模が大きい/夜間保育所の平面は、廊下型、ホール型、階段室型、ビル型、ワンルーム型に分けられる/廊下型・ホール型は複数の室があるが、階段室型は施設規模の小ささ、層化された空間の非融通性によりクラス室しかない	北浦かほる・木下恵津子: 夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 夜間保育所の保育環境整備に向けて(3), 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.37-45, 2004.01
施設全体のあり方	夜間保育所	行動観察	生活空間の在り方	子どもの私的空間を充足させる必要がある/クラス室に行為が重層化し食糧分離がないことから様々な問題が生じている/空間的ゆとりと家庭的雰囲気形成のため専用の食事室と寝室が必要である/発達個人差がある年少児は少人数かつ行為別空間が必要で、空間各部の機能別スペース化、小空間構成が必要である	北浦かほる・木下千絵・萩原美智子・木下恵津子: 保育環境としての子どもの生活空間の検討 夜間保育所の保育環境整備に向けて(2), 日本建築学会計画系論文集, No.568, pp.33-40, 2003.06
施設全体のあり方	夜間保育所	行動観察	遊び空間の在り方	自由遊び空間の機能は、もの・道具の選択可能性、遊び環境セッティング、広がりのある室内空間、動植物・土とのふれあい、遊具・乗り物遊び、走り回れる空間、屋内外の連続性の7つである/活動範囲が狭い年少児は屋上や人工地盤を活用しやすいが、活動範囲が広い年長児は接地した屋外空間が必要	北浦かほる・萩原美智子: 保育環境としての遊び空間のあり方 夜間保育所の保育環境整備に向けて, 日本建築学会計画系論文集, No.563, pp.139-146, 2003.01
平面・空間分析	保育所	アンケート	全国の施設実態把握	全国認可保育所のクラス規模は学年が高くなるにつれて大きくなり、50㎡程度の面積である/0歳児は最低基準を大きく上回り、3歳以上児は最低基準と同程度である/都市化の進んだ地域は敷地面積・屋外遊技場面積が小さい/食糧分離ができていない保育所の一人当たり8㎡弱が保育環境向上にとってひとつの目安/保育所には遊戯室・食事室など様々な室が設けられており、こうした諸室の規定を設けることを検討すべき	小池孝子・近藤ふみ・定行まり子: 保育施設の物理的環境指標に関する考察-全国認可保育所の施設環境実態調査を通して-, 日本建築学会技術報告集, No.48, pp.759-764, 2015.06
平面・空間分析	幼保連携施設	資料収集	保育室群の平面構成	建築的区分方法として、別棟、渡り廊下、階別、空間挿入、境界設定等に分けられ、2~3種類が組みあわせている/新築は空間挿入、既存利用は階別、増築は渡り廊下・別棟がベースとなっている	宮本文人・稲村友子・仲綾子・長瀬有紀子: 幼保連携施設における多様な連携形態と保育室の配置, 日本建築学会計画系論文集, No.679, pp.2035-2042, 2012.09
平面・空間分析	幼稚園・保育所・認定こども園	アンケート	全国の施設概要把握/施設種別の差異	施設規模は、こども園、幼稚園、保育所の順に大きい/クラス数と延床面積は保育所、幼稚園と同程度で、1クラス増えると約100㎡増加する/同年齢が過ぐる空間規模を比較すると保育所と幼稚園で大きな違いはない/担任保育者の人数規模評価は、年齢が大きいクラスでは職員数による影響、年齢の小さいクラスでは園児一人あたりの保育室面積がやや影響する	倉斗綾子・山田あすか・佐藤将之・古賀尊章: 就学前保育施設の施設状況とその評価-全国保育施設アンケート調査より-, 日本建築学会技術報告集, No.31, pp.865-870, 2009.10
平面・空間分析	幼保一体型施設	アンケート/ヒアリング	運営形態の決定要因把握/運営状況と園児混在の実態	私立園は公立園よりも規模が大きい/幼保一体型施設の特長は施設の全体像に対する保育所機能の割合で説明可能/運営パターンと想定する混合保育の実施を見越した計画が必要/活動場所の移動には、園児数増減の大きさ、延長保育室の有無、総クラス数や年齢別クラス数、午睡の有無などが影響している	山田あすか・佐藤栄治・佐藤将之・樋沼綾子: 幼保一体型施設における運営形態, 混合保育, 活動場所の変遷に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.625, pp.543-550, 2008.03
平面・空間分析	幼稚園	ヒアリング	生活習慣行為と空間	分散型出入口は下足箱配置により発生する遊びを制限させることが可能/集中型出入口は多様な行動に向かず、年少に不適/園の保育方針(生活習慣習得、自由遊び、一斉保育)により求められる下足箱、荷物置場、トイレ・手洗い場の位置について提案	宮本文人・中尾友子: 幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間, 日本建築学会計画系論文集, No.611, pp.45-51, 2007.01
平面・空間分析	複合型保育所	アンケート/ヒアリング	施設環境の現状把握	A型(0-5歳)認証保育所は既存建物の改修が多く、園庭がない場合が多い/周辺の公園整備も不十分/認可保育所は併設施設との交流・利用が容易であるが、住宅との複合では落下物の心配があり住民との交流が活発ではない/複合時の保育所設置計画の指針を示すことが必要/保育所以外の施設に対する避難訓練の義務付けが必要	小池孝子・定行まり子: 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.605, pp.47-53, 2006.07
平面・空間分析	保育所	アンケート	園舎の空間配置と親子支援の実態	ホールは行事よりも日常の保育を重視した計画をすべき/食・寝・遊分離の観点からは年齢が高くなるほどテーブル・イスの常設率、遊びコーナーの確保率が高い/親子支援スペースは園児のスペースと共有していても良い	山田恵美・服部孝生: 保育園施設の建築計画の実態と保育室の使われ方に関する調査報告, 日本建築学会技術報告集, No.21, pp.239-242, 2005.06

表 2.2 近年の先行研究整理 その2 (単位空間・面積/保育室/園庭/敷地外空間)

扱っているテーマ	施設種別	研究手法	研究の視点	主な知見・主張	文献
単位空間・面積	保育所	行動観察	行為に必要な面積	0歳児保育室に必要な面積は、単位空間モデルから考えると一人当たりで、食事：1.68㎡・午睡：1.23㎡・移行：1.20㎡、合計約4.11㎡以上の広さが必要/遊びのスペースを考慮すると、0歳児保育室はさらに広い面積が必要	近藤ふみ・定行まり子：保育所における0歳児の食事・午睡・あそびの行為と面積について、日本建築学会計画系論文集, No.653, pp.1647-1654, 2010.07
単位空間・面積	保育所	行動観察	食寝空間の面積基準	単位空間モデルから一人当たりの面積は、食事：1.03㎡、午睡：1.40㎡、合計：2.43㎡以上必要/食事と午睡の面積に着目することは現行の最低基準を見直す手法として有効	近藤ふみ・定行まり子：保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について、日本建築学会計画系論文集, No.645, pp.2371-2377, 2009.11
保育室	幼稚園・保育所	行動観察	遊びを促す保育室コーナーの設定	年齢が高くなるにつれ集中して1つの遊びに取り組む、または複数の遊びを関連させている/持続的展開には独立したコーナーを設ける/特に3歳児室で重要な複合的展開は玩具の種類を考慮/発展的展開は起点となる遊びを中心にコーナー設定	西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.319-327, 2014.02
保育室	幼稚園・保育所	行動観察	保育室コーナーの利用特性と時間的变化	全年齢に共通してみられる遊びは制作遊びで、3歳児はままごと、5歳児は構築・運動遊びが多い/コーナーは専用の場所として機能するが、徐々に兼用的に変化し長いスパンでは多様化する/コーナー以外の場所にも遊びが広がっており、固定的なコーナーの利用経験が影響	西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1257-1264, 2013.06
保育室	保育所	行動観察	異年齢交流の実態と物理的要因の関係	玩具の種類・数の充実が異年齢交流にプラスに働く/収納の位置が園児の行動に影響/異年齢交流量に働く行為は造形、模倣、構成、ふれあい、飼育観察で、特にふれあいは室に面したテラスや交流スペースが有効/コーナー保育を取り入れている園ではL型、O型が効いており、二型はあまり影響しない	細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育室の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, No.639, pp.1029-1035, 2009.05
保育室	幼保一体型施設	行動観察	遊びに必要な空間の規模や型	活動空間型は囲み、凹、平行、L、直線、凸、島、オープン、伸張、複合の10種に類型化できる/設えられたコーナーと実際に使われた空間にずれが生じている場合もある/コーナーづくりは単純な面積だけではなく、子どもが設えとの距離感を保って活動していることを考慮/6人までの集団および畳2畳より一回り小さい空間があれば十分で、遊びによってはさらに小さい空間が好まれる	山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.637, pp.549-557, 2009.03
保育室	保育所	行動観察	異年齢交流の実態と物理的要因の関係	共有スペースでは遊びの種類を棲み分けを行うことで遊びの場が広がる/異年齢保育実践には、受け入れの設置、収納重視、家具による遊びコーナー設置、玩具の充実が重要/室間の壁をつくらぬ計画がクラス間交流に有効	細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.634, pp.2565-2572, 2008.12
保育室	幼稚園・保育所	行動観察	保育室コーナーの利用特性と保育者の意図	子どもの遊び状況によってコーナー間の関係が変化/同じコーナーでも年齢により保育者の意図が異なる/コーナー設定は年間プログラムよりも実際の子どもの活動を反映した月間・週間の保育プログラムに基づく	西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.601, pp.47-55, 2006.03
園庭	幼稚園・保育所	行動観察	一般的な園庭環境と遊び実態	遊びは3人以下の集団が多く、6人集団まではほとんどの園で行われている/遊びは基本6種、準基本8種、付加18種に分けられ、遊び行為は施設の種類により大きく異なる/物的環境要素の連続の仕方により遊び展開に差が生じている	正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりと子どもの遊び様態についての研究, 日本建築学会計画系論文集, No.714, pp.1765-1773, 2015.08
敷地外空間	小規模保育拠点・認可保育所	行動観察/保育者のキャプション評価	外出保育の実態と都市環境評価	専用の屋外スペースがない園は外出が日常化(週5日以上)/都市環境が保育の場として機能/公園が外出先であるが園児の年齢により使い分けている/都市環境を利用する福祉事業所の外出傾向に合わせて公園等の整備方針を固めると良い	山田あすか：東京都内の種別が異なる小規模保育拠点における都市環境の利用・評価に関する研究 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1069-1078, 2016.05
敷地外空間	保育所	行動観察	散歩の実態からみた保育環境	人数に対応した滞留スペースの確保、途中休憩のための公園、交通安全性、障害物の撤去等の対策がなされたルートを最低1つ以上確保/保育所の半径700mは保育環境として地域の人々に意識されることが重要/散歩を楽しむものにするためには散歩の人数を極力少なくすることが肝要	太幡英亮・古川智之・恒川和久・生田京子・谷口元：保育園児の散歩行動と街路環境の関係-名古屋認可保育所での散歩行動観察を通じて-, 日本建築学会計画系論文集, No.689, pp.1533-1542, 2013.07
敷地外空間	小規模保育拠点	行動観察/保育者のキャプション評価	外出保育の実態と都市環境評価	年齢に適した保育室の面積/複数保育室や仕切り方が変化する空間/保育人数が少なさに対応できる柔軟性のある空間的しかけ/拠点の認定状況に応じた公園等の整備配慮	小林陽・山田あすか：東京都家庭福祉員制度での拠点内の環境づくりと都市環境の利用・評価に関する研究 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その1-, 日本建築学会計画系論文集, No.681, pp.2507-2516, 2012.11

表 2.3 近年の先行研究整理 その3 (敷地外空間つづき/環境行動/環境改善実践)

扱っているテーマ	施設種別	研究手法	研究の視点	主な知見・主張	文献
敷地外空間	小規模保育拠点	行動観察/ 保育者の キャプション 評価	保育場所としての都市環境の意義	小規模保育拠点を推進する場合、行政も都市空間を整備する必要がある/外出保育では移動場面より多くの事柄が意識される/安全性と保育資源としての価値は環境条件や人員配置などに影響される/拠点外の都市空間が保育の場として重要な役割を担っている	山田あすか：拠点外空間での保育に着目した小規模保育拠点運営の実態と保育者による都市環境評価 京都・昼間里親と大阪・保育所分園制度を対象として、日本建築学会計画系論文集, No.658, pp.2789-2798, 2010.12
敷地外空間	自治体認定型保育施設	アンケート	保育環境としての地域資源	敷地内外環境として、認可保育所はそのほとんどが園庭を有している(9.9㎡/人)が、ビルの一角に併設される横浜保育室の園庭保有率は3割弱(2.7㎡/人)である/施設が保有する屋外活動環境の評価が低くなるほど園外活動を行う頻度が高い/地域資源のうち公園と道の利用が顕著で、特に道では多様な体験を積み重ねる保育環境として認識されている/園外活動の場として選択される公園は経路の安全性が非常に重要視される	松橋圭子・三輪律江・田中稲子・谷口新・大原一興・藤岡泰寛：保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究-横浜市を対象としたアンケート調査より-, 日本建築学会計画系論文集, No.651, pp.1017-1024, 2010.05
敷地外空間	複合型保育所	行動観察	都心部における屋外保育空間の確保	園庭は公園等よりも多様で創造的・発展的な遊びが行われている/良好な環境の公園・多様で安全な経路・占有的に利用できる中間領域の組み合わせは園庭機能の一部を代替できる	小池孝子・定行まり子：都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.628, pp.1197-1204, 2008.06
環境行動	幼保一体型施設	ヒアリング/行動観察	活動実態からみた園児の環境適応	人数規模の変動に応じて段階的に活動場所移動が起こる/生活のめりはりと遊び連続性を担保するためには生活の拠点に近接して余裕空間があることが望まれる/午睡場所と送迎時の引き渡し場所・短時間児降園後の活動場所を離すことが必要/長時間児は比較的容易に園生活になじむが、短時間児は時間が必要/環境設定を容易にするような動線計画、壁面・窓面配置が求められる	樋沼綾子・山田あすか・上野淳：幼保一体型施設における活動場面展開の実態と園児のなじみの過程, 日本建築学会計画系論文集, No.638, pp.771-779, 2009.04
環境行動	幼稚園	行動観察	3歳と5歳の遊び方の比較	3歳児は発話や行為に限られた協働を実践しており、そのほとんどが模倣遊びである/5歳児は空間と物体を巧みに活用し自主創造的に遊びを展開している/教諭が意図的に遊び構築に活用できる構築環境のアフォーダンスと園児が遊びを瞬時に理解し共有できるアフォーダンスにギャップがあるデザインとなっている	吉田祥子・森保：園児の協働による遊びから見た遊び環境と自主創造的遊びに関する研究 札幌市の市立幼稚園の3歳児と5歳児の比較, 日本建築学会計画系論文集, No.609, pp.25-32, 2006.11
環境行動	保育所	行動観察	行動の反復性	クラスによって居場所になりやすい場所がある/3歳児は居場所の反復性が弱く場所に対する嗜好性形成の過渡期と評価できる/園庭よりも園舎内の居場所の反復性が高い	山田あすか・上野淳：保育所における園児の居場所の反復性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.602, pp.35-42, 2006.04
環境行動	保育所	行動観察	園児固有の活動場面の抽出	活動場面の成立に影響する要素は、0歳はもの・保育士、3歳は場所・もの・ほかの園児・行為、5歳児はそれぞれの要素をバランスよく意識している/0歳クラスは滞在型活動が主だが、年齢段階が上がるにつれて次第に移動型活動が増える/3歳クラスは、安定した居場所を拠点としながら様々な要素を活動に取り込み、場所を大きく使っている/5歳クラスは場所によって活動内容を変えるなどメリハリのある活動展開である/滞在型では身を寄せる対象である保育士・場所、移動型では友だち・行為がより重要となる	山田あすか・上野淳・登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究(その2), 日本建築学会計画系論文集, No.587, pp.49-56, 2005.01
環境行動	保育所	行動観察	成長・発達に応じた環境との関わり方	0~2歳は設けられた場所を居場所とし、年齢段階が上がるにつれてその影響は弱まり、4~5歳は居場所が点在する/滞在型活動が展開しやすい場所、移動型活動が展開しやすい場所がある	山田あすか・上野淳・登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究(その1), 日本建築学会計画系論文集, No.580, pp.57-64, 2004.06
環境行動	保育所	行動観察	遊び集合の時間的移行	遊びの場の成立には視覚・聴覚を伴った関係が関わっている/見えない場合も相手を認識することで集団を持続している/様々な環境を経験し遊びが移行することが知性・創造性獲得のきっかけ	佐藤将之・西出和彦・高橋鷹志：遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 園児の社会的獲得と空間との相互関係に関する研究 その2, 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.29-35, 2004.01
環境行動	幼稚園・保育所	行動観察	集合が形成される際の他者との関係構築	人が通る場所、建築的仕掛けなどの空間要素を選択して遊び集合が形成されるが、それらの集合自体が要素と認識され展開している/他者との関係を構築することで物理的環境との関係が進展しさらに新しい行為が発生している	佐藤将之・高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 園児の社会的獲得と空間との相互関係に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, No.562, pp.151-156, 2002.12
環境改善実践	保育所	アクションリサーチ	環境改善前後の使い方と評価	活動の混在・活動と場の未対応を課題として認識し、遊び、食事、着替えの3空間に分ける改善を実施/遊びでは遊びの連続性を意識して可変性の高い仕切りで空間を分節	宮崎文夏・山田あすか・青木隆太郎・金子亜里紗・高瀬敦・八角隆介：H保育園での活動実態と環境づくりの効果の検証 1歳児室を対象として、日本建築学会技術報告集, No.56, pp.313-316, 2018.02

表 2.4 近年の先行研究整理 その4 (心理的評価)

扱っているテーマ	施設種別	研究手法	研究の視点	主な知見・主張	文献
心理的評価	-	箱庭手法	表現の背後にある心情の起源	ブラジルでは攻撃性を表す表現が高い頻度で見られる／日本では情緒的な晴朗・明亮さ、穏やかさ、非自己顕示欲的な表現の好みがある／箱庭には外界からの圧力などの社会的・文化的な側面が表れている／箱庭の分析により個人の外部世界に対する基本的な在り方、日本人の世界観、社会関係にみられる特徴を再考するための新たな視点を与える	坂戸省三・東野Adriana・河内あゆ：ブラジルと日本の幼児の箱庭制作に見る文化的差異の起源,日本建築学会計画系論文集, No.750, pp.1551-1561,2018.08
心理的評価	保育所	箱庭手法	創作行為の発達過程と性差	箱庭創作行為の発達過程は、羅列・混沌の段階と構造化の段階に分けられる／構造化された箱庭の男女差は顕著であり、男児はレール等から町並みをつくる多元性、女児は中心性を持つ一元性の空間イメージを有する	坂戸省三・河内あゆ・東野Adriana：保育園の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源,日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1227-1237, 2016.05
心理的評価	幼稚園・保育所	アンケート・ヒアリング	記憶に残る就学前保育施設の全体像	記憶に残る場面は「遊び」が過半を占めている／記憶に残る場面の「場所」は屋外の遊具が多い／記憶に残る場面の評価構造は場所、行為を中心とした単純な図式である	伊藤美春・山田あすか：就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.695, pp.79-87,2014.01
心理的評価	-	指示代名詞	幼児の心理的領域の形状把握	幼児はいずれの方向でもコレ領域、アレ領域が示され、領域分節がされている／男女に領域形状の差はない／立位の性差として男は横方向に広がる三角形、女は前と斜め前に675mm、横方向は225mmと狭い／学年が上がるほどコレ領域が狭くなっているが、年中でコレ領域とアレ領域の分節がなされている／大人と比較すると横方向のコレ領域が小さく認識されている	早川亜希・橋本雅好・佐藤将之：幼児の指示代名詞による領域分節に関する実験的研究,日本建築学会計画系論文集, No.669, pp.2101-2107, 2011.11
心理的評価	-	風景構成法	描画された風景の枠づけと川の間わり	枠に対する川は10種類に類型／川および空間構成に関するおおまかな発達的変容を把握／年中組で見られた川は風景の構成以前の表現であるスクリブル(なぐりがき)、円、大きな四角、水平の複数線を抽出	柳沢和彦・岡崎基幸・高橋ありす：風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察 幼稚園児から大学生までの作品を通して,日本建築学会計画系論文集, No.546, pp.297-304,2001.08
心理的評価	-	居住空間構成法／描画	模型と描画の関係	描画における空間関係は、円による包含、並べ描き、反復の構造化前、内外要素区別、要素間相互の関連付けの構造化に分けられる／居住空間構成法の作品群は、原初的、場の発生、囲いと場の共存、壁による全体統括に大別できる	柳沢和彦・岡崎基幸・菊池憲一・難波美絵：幼稚園児の居住空間構成法と描画に見る図式の研究,日本建築学会計画系論文集, No.519, pp.309-316,1999.05
心理的評価	-	居住空間構成法	被験者の潜在的な図式の解明	製作された作品における構造化の有無とその特徴を考察／作品群は原初的、場の発生、囲いと場の共存、壁による全体統合の4段階に大別／幼稚園児は知的障害児よりも人形を多く使用し、特に女児に顕著である／原初段階は意味のある場を持たないので人形が非常に少なく、場の発生段階移行は人形数が増加し、被験者自身の人形も置かれる／制作そのものが物語性を有する人形遊びの例もあり、日常生活行動の文脈が垣間見える	岡崎基幸・柳沢和彦・難波美絵：居住空間構成法と幼稚園児,日本建築学会計画系論文集, No.518, pp.313-320,1999.04

2.1.2 本研究の位置づけ

1) 行動的側面からみたアプローチの特徴

本研究は、表 2.1～2.4 で示した分類のうち、主にこどもの遊び環境に対する評価について環境行動的観点から論じようとするものである。環境行動の既往研究は保育所を対象とするものが過半を占めるが、各保育施設の設置基準等から設計の自由度が比較的高いと思われる幼稚園を対象とした。また、園児の遊びに関わる環境のあり方を中心に論じるため、午睡がなくまとまった自由保育時間を確保しやすい幼稚園が研究対象として適切であると判断した。園児の遊び行動を対象とした研究は多くみられるが、保育室のコーナー配置や異年齢交流の実態把握から室内環境構成を対象とするものにとどまっている。また環境行動の視点から園児の居場所を見出そうとする研究もあるが、学年差を中心に扱っており園児一人ひとりの遊び実態からその個人的特性を見出す研究とはなっていないと思われる。そこで、行動的側面からみた本研究の独自性は次のとおりである。

- ・これまで明らかにされてこなかった園児一人ひとりの詳細な過ごし方を把握し、保育施設計画の課題を導き出そうとしている点。
- ・園児一人ひとりの遊び実態から、設計時に想定すべき基本的遊びとそれに関わる環境要素・空間構成を導き出そうとしている点。
- ・得られた知見を総合的に考察し、今後の保育施設空間で重要と思われる空間特性を抽出しようとしている点。

2) 心理的側面からみたアプローチの特徴

幼児に対する心理的評価は建築計画学の研究全体を見ても扱われることが少ない。このことは、発達途上にある幼児を心理的評価の研究対象として扱う困難さや、文字や言語表現に個人差が大きいことなど、多くの理由が考えられる。そのため、幼児を対象とした既往研究においても模型や箱庭を使用した実験、指示代名詞を扱う実験、成長後に子ども時代を振り返る研究にとどまっている。

こうした状況を鑑み、試行的に幼児の心理的評価を扱う研究を行うこととした。行動観察で得られた知見と比較するため、環境要素・空間に対する園児の心理的評価を明らかにする実験を試みることにした。そこで、心理的側面からみた本研究の独自性は次のとおりである。

- ・これまで実現できなかった園児の主体的な環境評価手法を開発しようとしている点。
- ・得られた知見から園児が好む各部空間・要素の傾向や個別性を明らかにしようとしている点。
- ・行動面からは把握できない心理的評価が現れる各部空間・要素を明らかにしようとしている点。

3) 行動的側面および心理的側面からみたアプローチの特徴

前述した通り、まとまった論文としては行動面と心理面の双方から環境評価を行っている研究は見当たらず、このこと自体が本研究の独自性となる。

2.2 本研究の調査・実験方法

本研究で行った調査・実験は次のとおりである。なお、2) および3)の詳細は各章で論じている。

1) 文献調査・資料収集

特色ある物的環境を有する幼稚園事例を調査対象とするため、文部科学省から全国の幼稚園に関する基礎的データと図面情報を入手し、さらに地方自治体、各自治体の幼稚園協会等から施設環境に関する情報を収集した^{2.44)}。その後、近年の建築雑誌や関連書籍、建築設計資料集成等に掲載された幼稚園の中からモデル的事例を選定し、候補となる幼稚園の現地訪問調査を行った。図面を入手できなかった事例については、実測調査を行い平面図を作成した。

2.44) 長倉康彦・上野淳・井上寿・仙田満・藤田大輔・茂木弥生子・山崎俊裕：公立学校建築物の標準面積（幼稚園）に関する調査研究報告書, 1998.7

2) 行動観察調査

予備調査として幼稚園各室・空間で観察された園児の遊び・生活活動の具体的内容や集団形成状況を登園から降園まで15分ごとに平面図に記録・分析し、調査対象の基本的活動実態と空間の対応関係を把握した。

本調査では、調査員1人が調査対象園児1人を登園から降園まで追跡し、観察されたすべての行為を調査シートに記録した。この際、場面展開に関わるきっかけや他園児・教諭からの声掛け、園内放送等についてもその都度記録した。

3) 心理的評価実験

園児の主体的な評価を把握したいと考え、園児自身が環境を評価できる手法に着目した。そこで、撮影方法を習得できれば実験可能である簡易カメラを実験道具に用いることとした。実験では各部空間・要素に対する嗜好を把握することが重要であると考え、園児一人ひとりに簡易カメラ1台を手渡し、「自分の好きな場所」を撮影してもらった。なお、実験時に園児の注意力が散漫になるのを避けるため、撮影対象を各部空間・要素に限定し、人の活動風景などは含めないよう指示した。撮影に際しては簡易カメラの撮影方法を調査員が事前に教え、数枚の撮影練習後、園児1人に調査員1人が同行して撮影を実施し、撮影のたびに撮影対象の名称と撮影理由を記録した。

2.3 本研究の構成

本論文は6章で構成されている(図2.1)。

第1章では、保育施設を取り巻く状況を把握・整理し、本研究の目的を述べる。

第2章では、保育施設に関わる既往研究を整理し、本研究の位置づけ、調査・実験方法の概要、および本研究の構成を示す。ここでは行動および心理的側面からアプローチすることの研究的独自性と今日的意義について論じる。

第3章では、各室・空間における園児の滞在時間とその特性を明らかにすることを目的として、園児一人ひとりの登園から降園までの全ての活動を追跡して記録する行動観察調査を行い、詳細な活動実態を把握する。その上で、園児の個別的要求が抽出されると思われる自由保育に着目し、そこで活用されている環境要素について明らかにし、自由保育で整備すべき各室・空間について論考する。

第4章は、自由保育で必要な環境構成・要素を検討するため、行動観察調査で得られたデータについて改めて詳細な分析を行う。得られた結果から、保育施設の設計時に想定すべき基本的遊びを抽出し、その遊びに応じた環境要素や空間構成のあり方について論じる。次に、園児一人ひとりの遊び要求を満たすための各室・空間計画の留意点について示す。また、これらの知見を組み合わせることで各室・空間の関係性を整理し、遊びの動きに応じた環境構成手法について考察する。

第5章は、ヒアリングを併用した園児に対する写真投影法実験を試行・実施し、園児一人ひとりの環境評価を抽出する。まず施設別、学年別、性別にどのような撮影傾向にあるのか分析する。次に、撮影された写真から園児一人ひとりの撮影傾向を把握する。そして写真投影法を用いた実験で新たに抽出された結果を示し、環境要素を生活領域の概念からとらえる。

第6章は、総括として各章で得られた結果をまとめ、その結果から保育施設に求められる環境整備の試論を導き出す。また、本研究で取り扱った行動・心理的側面からの知見とその範囲について明らかにするとともに、今後の課題を整理する。

第1章 研究の背景と目的

本研究の背景
 建築計画学研究的今日の課題
 保育施設計画・設計の今日の課題
 保育施設における平面計画の特徴
 国が定めている施策の概要
 保育施設における幼稚園の位置づけ
 本研究の目的

保育施設を取り巻く状況の把握／論点の提示

第2章 研究の位置づけと方法

既往研究の整理と本研究の位置づけ
 既往研究の整理
 本研究の位置づけ
 本研究の調査・実験方法
 本研究の構成

本研究の独自性／行動・心理的側面双方からアプローチすることを決定

--- 行動的側面からのアプローチ ---

--- 心理的側面からのアプローチ ---

第3章 各室・空間における園児の滞在時間とその特性

保育活動時間の特性
 園別・学年別保育活動時間
 各室・空間の滞在時間
 保育活動別各室・空間別滞在時間
 園別各室・空間別滞在時間
 学年別各室・空間別滞在時間
 保育活動における集団形成単位
 各室・空間別集団形成単位
 自由保育における学年別の滞在场所と空間特性

園児の詳細な活動実態を把握／自由保育で活用される保育室以外の場所の必要性

第4章 園児一人ひとりの遊び行為と各室・空間の関わり

調査対象園の空間的特徴と遊び行為の関係
 園別にみた各室・空間の特徴と遊び行為の関係
 属性別に見た遊び行為と場所の特性
 遊び行為に関わる各室・空間と特徴的な環境要素
 自由保育における園児一人ひとりの遊び行為実態とその特徴
 園児の興味・関心対象が存在する生活領域の特徴

設計時に想定すべき遊びの提示／遊びの動きに応じた環境要素整備の提示

第5章 各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価

園児の好きな各部空間・要素と特徴
 実験対象施設別にみた撮影対象と特徴
 学年別・性別にみた撮影対象と特徴
 園児の撮影傾向と特徴
 写真投影法で明らかになった園児の興味・関心対象と特徴

園児の環境に対する認識・評価の傾向／生活領域と抽出した環境要素

第6章 総括

各章のまとめ
 保育施設に求められる環境整備の試論
 保育室機能の解体と再構築
 保育施設で想定すべき基本的遊びと整備すべき環境
 園児一人ひとりの個性からみた環境要素の配置
 本研究で取り扱った行動・心理の範囲
 今後の課題

図 2.1 本研究のフロー

参考文献

- 2.1) 白川 賀津子・定行 まり子：保育・教育思想に基づく保育施設の空間特性 モンテッソーリ教育とハンガリーの保育実践を対象として, 日本建築学会計画系論文集, No.734, pp.877-884, 2017.04
- 2.2) 高橋節子・元岡展久：モンテッソーリ保育所における物理的環境 - 非モンテッソーリ保育所との比較による検討 -, 日本建築学会技術報告集, No.44, pp.207-212, 2014.02
- 2.3) 今川峰子：幼稚園児の社会的行動に影響する保育空間と保育理念, 人間・環境学会誌, 2 巻 2 号, pp.21-27, 1996
- 2.4) 北浦かほる・木下恵津子：夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 夜間保育所の保育環境整備に向けて (3), 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.37-45, 2004.01
- 2.5) 北浦かほる・木下千絵・萩原美智子・木下恵津子：保育環境としての子どもの生活空間の検討 夜間保育所の保育環境整備に向けて (2), 日本建築学会計画系論文集, No.568, pp.33-40, 2003.06
- 2.6) 北浦かほる・萩原美智子：保育環境としての遊び空間のあり方 夜間保育所の保育環境整備に向けて, 日本建築学会計画系論文集, No.563, pp.139-146, 2003.01
- 2.7) 小池孝子・近藤ふみ・定行まり子：保育施設の物理的環境指標に関する考察 - 全国認可保育所の施設環境実態調査を通して -, 日本建築学会技術報告集, No.48, pp.759-764, 2015.06
- 2.8) 宮本文人・稲村友子・仲綾子・長瀬有紀子：幼保連携施設における多様な連携形態と保育室の配置, 日本建築学会計画系論文集, No.679, pp.2035-2042, 2012.09
- 2.9) 倉斗綾子・山田あすか・佐藤将之・古賀誉章：就学前保育施設の施設状況とその評価 - 全国保育施設アンケート調査より -, 日本建築学会技術報告集, No.31, pp.865-870, 2009.10
- 2.10) 山田あすか・佐藤栄治・佐藤将之・樋沼綾子：幼保一体型施設における運営様態, 混合保育, 活動場所の変遷に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.625, pp.543-550, 2008.03
- 2.11) 宮本文人・中尾友子：幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間, 日本建築学会計画系論文集, No.611, pp.45-51, 2007.01
- 2.12) 小池孝子・定行まり子：東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.605, pp.47-53, 2006.07
- 2.13) 山田恵美・服部岑生：保育園施設の建築計画の実態と保育室の使われ方に関する調査報告, 日本建築学会技術報告集, No.21, pp.239-242, 2005.06
- 2.14) 近藤ふみ・定行まり子：保育所における0歳児の食事・午睡・あそびの行為と面積について, 日本建築学会計画系論文集, No.653, pp.1647-1654, 2010.07
- 2.15) 近藤ふみ・定行まり子：保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について, 日本建築学会計画系論文集, No.645, pp.2371-2377, 2009.11
- 2.16) 西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.319-327, 2014.02
- 2.17) 西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1257-1264, 2013.06
- 2.18) 細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, No.639, pp.1029-1035, 2009.05
- 2.19) 山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.637, pp.549-557, 2009.03
- 2.20) 細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.634, pp.2565-2572, 2008.12
- 2.21) 西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.601, pp.47-55, 2006.03
- 2.22) 正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究, 日本建築学会計画系論文集, No.714, pp.1765-1773, 2015.08

- 2.23) 山田あすか：東京都内の種別が異なる小規模保育拠点における都市環境の利用・評価に関する研究 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1069-1078, 2016.05
- 2.24) 太幡英亮・古川智之・恒川和久・生田京子・谷口元：保育園児の散歩行動と街路環境の関係 - 名古屋市認可保育所での散歩行動観察を通じて -, 日本建築学会計画系論文集, No.689, pp.1533-1542, 2013.07
- 2.25) 小林陽・山田あすか：東京都家庭福祉員制度での拠点内の環境づくりと都市環境の利用・評価に関する研究 - 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その1 -, 日本建築学会計画系論文集, No.681, pp.2507-2516, 2012.11
- 2.26) 山田あすか：拠点外空間での保育に着目した小規模保育拠点運営の実態と保育者による都市環境評価 京都・屋間里親と大阪・保育所分園制度を対象として, 日本建築学会計画系論文集, No.658, pp.2789-2798, 2010.12
- 2.27) 松橋圭子・三輪律江・田中稲子・谷口新・大原一興・藤岡泰寛：保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究 - 横浜市を対象としたアンケート調査より -, 日本建築学会計画系論文集, No.651, pp.1017-1024, 2010.05
- 2.28) 小池孝子・定行まり子：都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.628, pp.1197-1204, 2008.06
- 2.29) 樋沼綾子・山田あすか・上野淳：幼保一体型施設における活動場面展開の実態と園児のなじみの過程, 日本建築学会計画系論文集, No.638, pp.771-779, 2009.04
- 2.30) 吉田祥子・森傑：園児の協働による遊びから見た遊び環境と自主創造的遊びに関する研究 札幌市の市立幼稚園の三歳児と五歳児の比較, 日本建築学会計画系論文集, No.609, pp.25-32, 2006.11
- 2.31) 山田あすか・上野淳：保育所における園児の居場所の反復性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.602, pp.35-42, 2006.04
- 2.32) 山田あすか・上野淳・登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集, No.587, pp.49-56, 2005.01
- 2.33) 山田あすか・上野淳・登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その1), 日本建築学会計画系論文集, No.580, pp.57-64, 2004.06
- 2.34) 佐藤将之・西出和彦・高橋鷹志：遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その2, 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.29-35, 2004.01
- 2.35) 佐藤将之・高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, No.562, pp.151-156, 2002.12
- 2.36) 宮崎文夏・山田あすか・青木隆太郎・金子亜里砂・高瀬敦・八角隆介：H保育園での活動実態と環境づくりの効果の検証 1歳児室を対象として, 日本建築学会技術報告集, No.56, pp.313-316, 2018.02
- 2.37) 坂戸省三・東野 Adriana・河内あゆ：ブラジルと日本の幼児の箱庭制作に見る文化的差異の起源, 日本建築学会計画系論文集, No.750, pp.1551-1561, 2018.08
- 2.38) 坂戸省三・河内あゆ・東野 Adriana：保育園児の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源, 日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1227-1237, 2016.05
- 2.39) 伊藤美春・山田あすか：就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.695, pp.79-87, 2014.01
- 2.40) 早川亜希・橋本雅好・佐藤将之：幼児の指示代名詞による領域分節に関する実験的研究, 日本建築学会計画系論文集, No.669, pp.2101-2107, 2011.11
- 2.41) 柳沢和彦・岡崎甚幸・高橋ありす：風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察 幼稚園児から大学生までの作品を通して, 日本建築学会計画系論文集, No.546, pp.297-304, 2001.08
- 2.42) 柳沢和彦・岡崎甚幸・菊池憲一・難波美絵：幼稚園児の居住空間構成法と描画に見る図式の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.519, pp.309-316, 1999.05
- 2.43) 岡崎甚幸・柳沢和彦・難波美絵：居住空間構成法と幼稚園児, 日本建築学会計画系論文集, No.518, pp.313-320, 1999.04
- 2.44) 長倉康彦・上野淳・井上寿・仙田満・藤田大輔・茂木弥生子・山崎俊裕：公立学校建物の標準面積(幼稚園)に関する調査研究報告書, 1998.7

第3章

各室・空間における園児の滞在時間とその特性

- 3.1 はじめに
- 3.2 保育活動時間の特性
- 3.3 各室・空間の滞在時間
- 3.4 保育活動における集団形成単位
- 3.5 自由保育における学年別の滞在場所と空間特性
- 3.6 まとめ

第3章 各室・空間における園児の滞在時間とその特性

3.1 はじめに

3.1.1 本章の背景と目的

幼児期の遊びをとおした学習・体験活動は、園児の将来の人格形成に様々な影響を与えると考えられ、これらの活動拠点となる保育環境のあり方は今日重要なテーマである。園児を対象とした保育施設には幼稚園と保育所の二つが主なものとして挙げられ、幼稚園は教育施設、保育所は福祉施設として位置づけられている。両者は準拠法令や対象児の年齢構成、保育時間、施設基準等が異なることから、本来、それぞれ固有の建築計画的課題が存在すると考えられる。

幼児の保育施設に関わる近年の既往研究としては、北浦かほるらによる夜間保育所の環境整備に関する研究^{3.1-3.3)}、佐藤将之らによる幼児の社会性獲得に関する研究^{3.4-3.5)}、山田あすからによる幼児固有の活動場面に関する研究^{3.6-3.7)}等があるが、幼稚園の建築計画に関わる各室・空間特性と保育活動の関係を論じた研究報告は少ない状況にある。

そこで本研究では、幼稚園で行われる具体的な保育活動内容、学年や各室・空間別にみた幼児の滞在行动や滞在時間の特性、集団形成単位等の実態を明らかにし、幼稚園各室・空間に関わる建築計画上の課題を整理・抽出するため、特色ある保育環境を有する幼稚園を調査対象に取り上げ、以下の調査を行った。

3.1.2 調査概要

調査対象園の選定にあたっては、神奈川県、東京都、千葉県、岐阜県の4県に立地する公立・私立幼稚園の中で特に豊かな屋外環境を有する園や屋内空間に特色のある園を取り上げることとし、文部科学省、神奈川県下自治体幼稚園担当部局、横浜市幼稚園協会等から施設環境に関する情報を収集するとともに、近年建築雑誌や資料集成等に掲載された幼稚園の中からモデル的事例を選定し、候補となる調査対象園の現地訪問調査を行った後、敷地面積・延床面積・園児数・クラス数、配置・平面等が異なる7園を選定した(表3.1及び図3.1)。調査では各園の保育活動概要を把握するため、予備調査において幼稚園各室・空間で観察される幼児の遊び・学習活動の具体的内容や集団形成状況を登園から降園まで15分ごとに平面図に記録した。本調査のデータ記録・採取は、調査員1人が調査対象園児1人を登園から降園まで追跡し、観察されたすべての保育活

3.1) 北浦かほる, 萩原美智子: 保育環境としての遊び空間のあり方 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて - 日本建築学会計画系論文集 No.563, pp139-146, 2003.1

3.2) 北浦かほる, 木下千絵, 萩原美智子, 木下恵津子: 保育環境としての子どもの生活空間の検討 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (2)- 日本建築学会計画系論文集 No.568, pp33-40, 2003.6

3.3) 北浦かほる, 木下恵津子: 夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (3)- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp37-45, 2004.1

3.4) 佐藤将之, 高橋鷹志: 園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その1- 日本建築学会計画系論文集 No.562, pp151-156, 2002.12

3.5) 佐藤将之, 西出和彦, 高橋鷹志: 遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その2- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp29-35, 2004.1

3.6) 山田あすか, 上野淳, 登張絵夢: 保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その1)- 日本建築学会計画系論文集 No.580, pp57-64, 2004.6

3.7) 山田あすか, 上野淳, 登張絵夢: 園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その2)- 日本建築学会計画系論文集 No.587, pp49-56, 2005.1

動（行為発生時刻、行為内容、行為発生場所、所属する集団形成単位）を調査シートに記入する方法とした。調査日は予備調査結果を踏まえて年間・月間の保育計画と内容を幼稚園側に事前にヒアリングし、典型的な保育活動が行われる日時かつ晴れか曇りの日を設定した（表 3.2）。追跡対象園児はクラス担当教員に観察対象として最も適当と思われる園児を各クラス 1 名以上依頼した。調査対象延べ園児数は 56 名、園別・学年別内訳は表 3.1 に示すとおりである。調査で得られた園児 1 人ひとりのデータは一分単位で行為発生時刻、行為内容、行為発生場所、所属する集団形成単位別に分類・整理した。なお調査対象園の都合により 1 名しか得られなかった一部のデータについては、集計・分析過程において予備調査で得られた園全体の活動実態と比較検討し、個人差の影響が少ないことを確認した。

表 3.1 調査対象幼稚園の概要

園名	所在地	敷地面積	延床面積	幼児数	面幼積 (㎡/人 当り)	積幼積 (㎡/人 当り)	学年別クラス数		調査対象幼児数 (人)		特色ある各室・空間											保育活動の特色					
							年 少	年 中	年 長	計	年 少	年 中	年 長	計	屋外					屋内							
															敷 地 高 低 差 の 有 無	遊 具 ス レ ッ ク	ヤ ギ 小 屋	ナ イ ト 遊 び コ ー	ナ イ ト 外 工 作 コ ー	テ ラ ス テ ッ キ	体 育 館		調 理 室	視 聴 覚 室	ナ イ ト コ ン コ ー	デ ン キ バ	
Ay	神奈川県横浜市	1515㎡	424㎡	153人	9.9	2.8	1	3	2	6	4	4	4	12	○	○											屋内外の素材（動植物や草花、絵本、粘土等）を利用した保育活動。絵画・造形表現を重視。
li	神奈川県横浜市	10000㎡	1095㎡	220人	45.5	5.0	1	4	4	9	4	3	5	12		○	○	○									動物の世話、畑づくり等、園の自然環境を生かしたカリキュラム。広い敷地を活用した屋外の保育活動を重視。
Ka	神奈川県横浜市	3238㎡	1118㎡	286人	11.3	3.9	3	4	4	11	4	4	4	12	○		○	○	○								動物の世話や畑づくり等、園や近隣の自然環境を生かしたカリキュラム。手作業（工作・土遊び等）や屋外の保育活動を重視。
To	東京都葛飾区	902㎡	498㎡	102人	8.8	4.9	1	1	1	3	1	1	1	3						○						○	仏教保育が中心で、自然とのふれあいや幼児自身の体験を重視した保育活動。隣接する寺の境内とは仕切りがなく、保育活動時に利用。
Ke	千葉県船橋市	6639㎡	1880㎡	309人	21.5	6.1	2	4	3	9	3	2	1	6		○				○	○	○	○			○	年少：学年全体の大集団保育、年中：学級単位の設定保育、年長：培った知識・経験を統合した保育活動が中心。音楽・体育教育を重視。
lb	岐阜県揖斐川町	5056㎡	1088㎡	252人	20.1	4.3	3	3	3	9	1	2	4	7		○						○				○	年少：園生活・環境への慣れ、年中：教材・教具を用いた多様な遊び・学習、年長：考える力の涵養を重視。
Yu	岐阜県岐阜市	2625㎡	1040㎡	55人	47.7	18.9	1	1	1	3	-	2	2	4						○		○					幼児の自主性を重視し、幼児の意見を取り込んだ少人数保育を実施。週に一度は隣接する公園で登園から降園まで動的な保育活動。
							17	18	21	56																	

表 3.2 調査対象幼稚園の調査実施日

園名	行動追跡調査実施日
Ay	1997.02.18/1997.02.20/1997.02.21/1997.03.03/1997.03.07
li	1997.02.24/1997.02.25/1997.03.04/1997.03.06/1997.03.14
lb	2000.12.16/2002.01.09
Ka	1996.12.10/1996.12.11/1996.12.12/1996.12.13/1996.12.16
Ke	1997.12.02/1997.12.03/1997.12.05
To	1997.12.12
Yu	2002.01.17

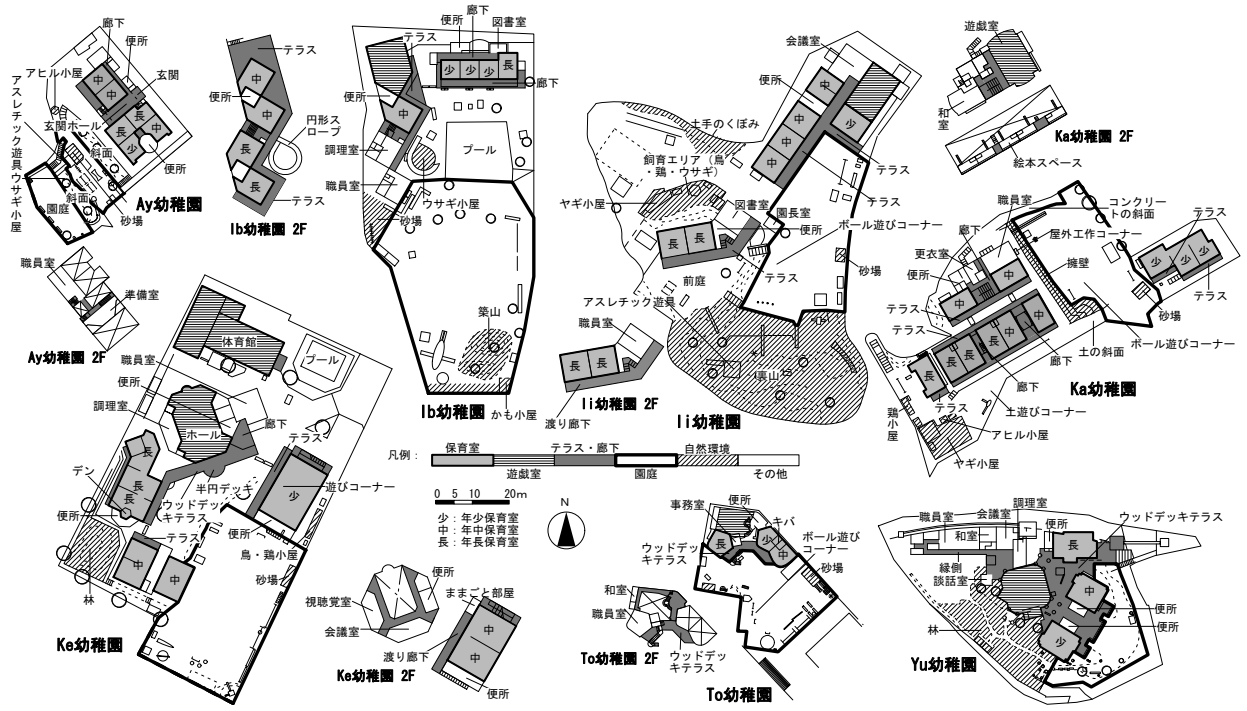


図 3.1 調査対象幼稚園の配置図・平面図

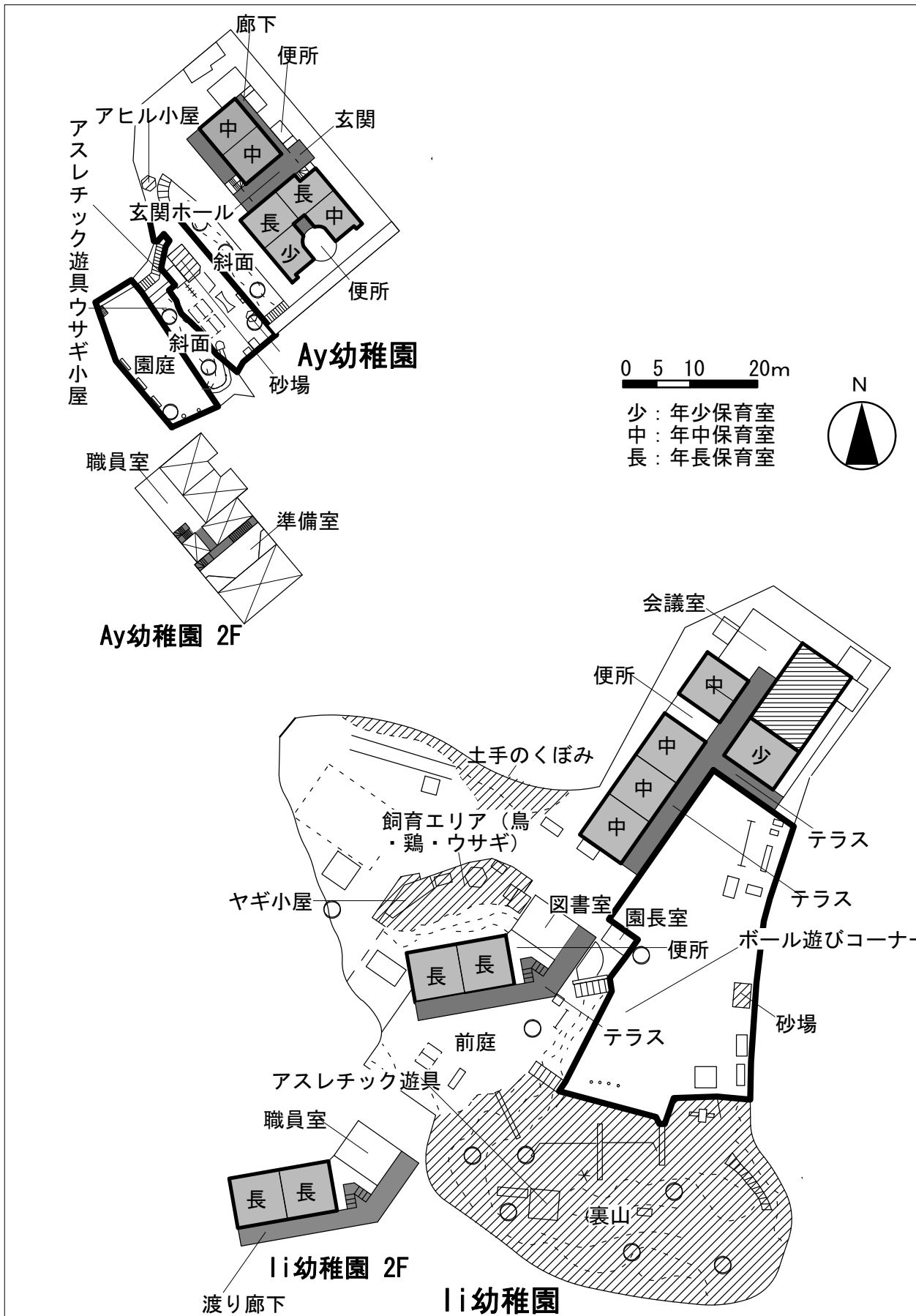


図 3.1a 調査対象幼稚園の配置図・平面図（拡大）Ay 幼稚園・Ii 幼稚園

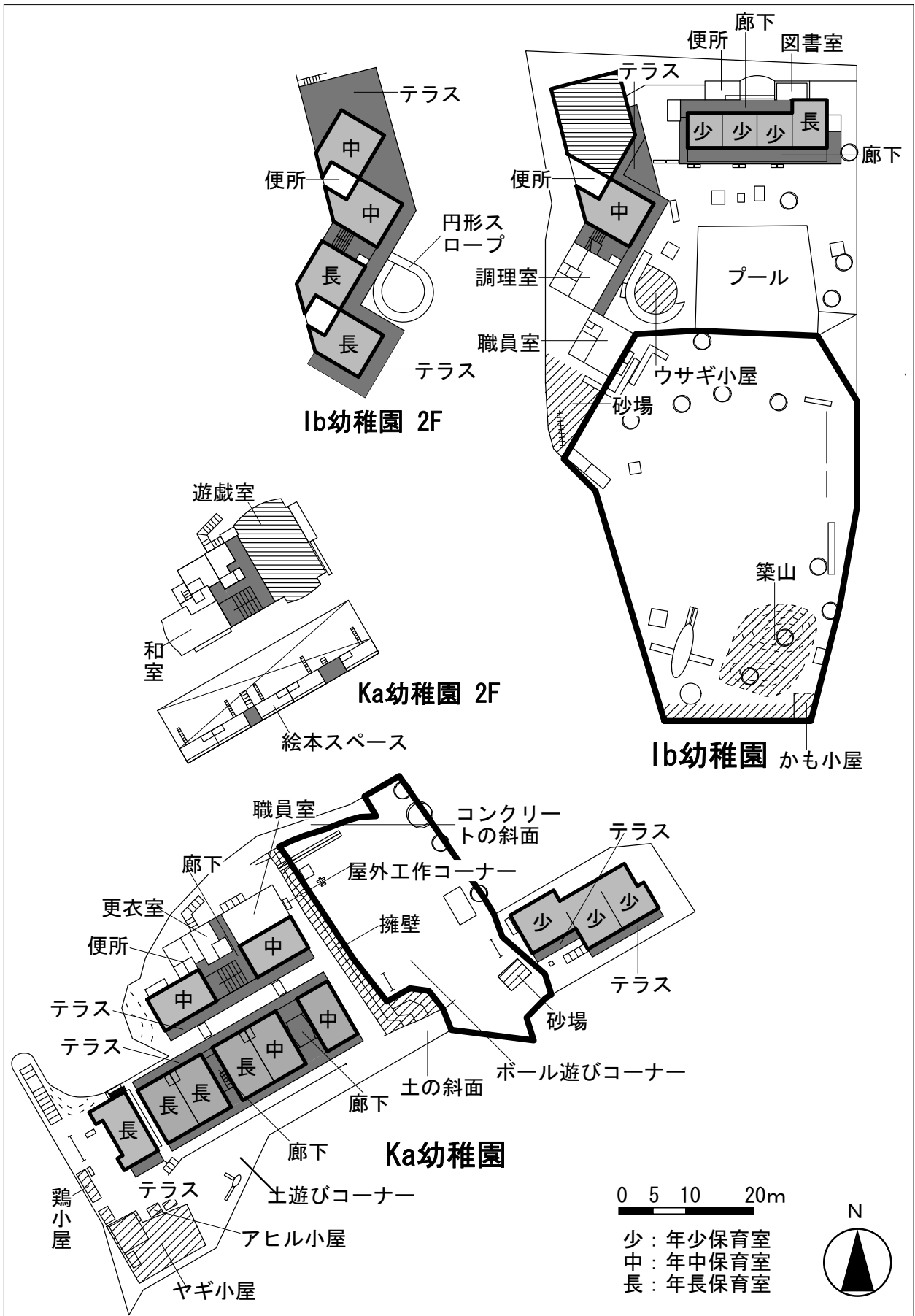


図 3.1b 調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Ib 幼稚園・Ka 幼稚園

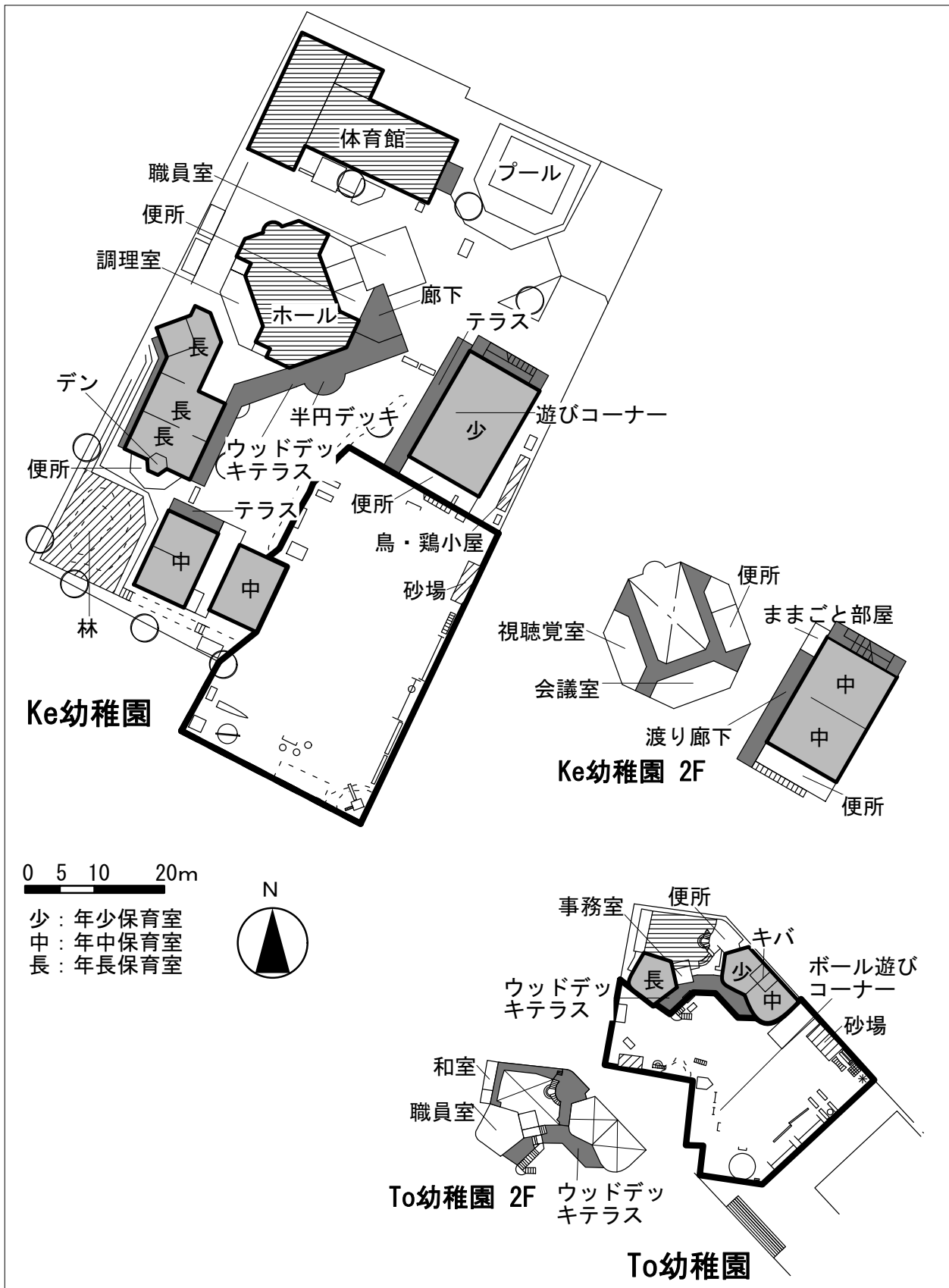


図 3.1c 調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Ke 幼稚園・To 幼稚園

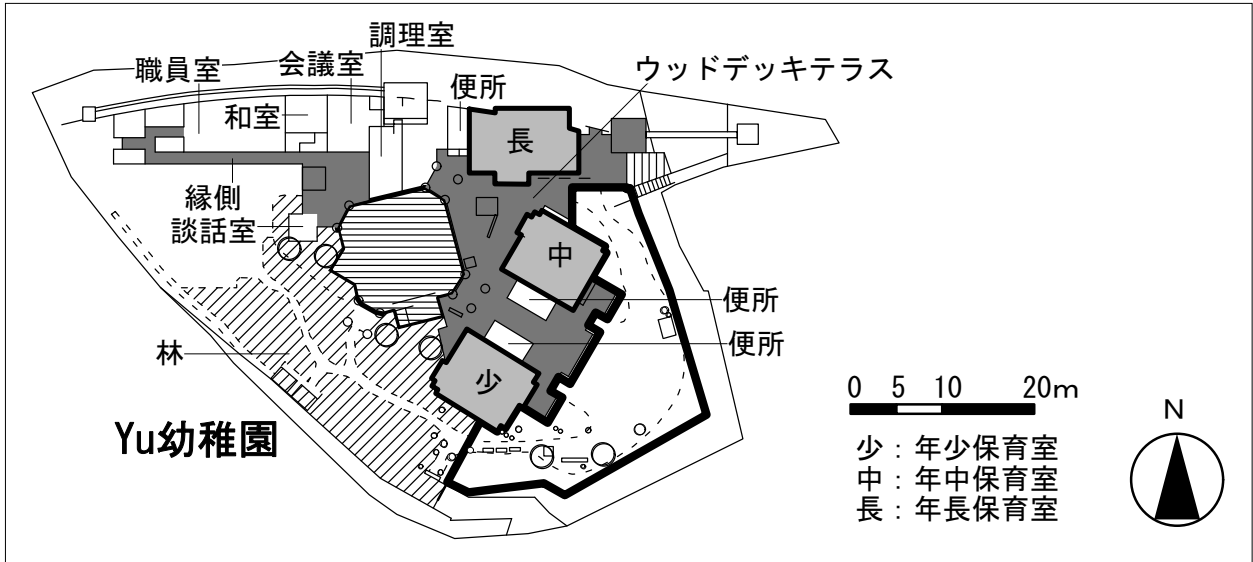


図 3.1d 調査対象幼稚園の配置図・平面図（拡大） Yu 幼稚園

3.2 保育活動時間の特性

3.2.1 保育活動の分類

表 3.3 は調査対象園において観察された各種保育活動の特徴を既往研究^{3.8)}と予備調査の結果を基に分類・整理したものである。ここでは保育活動時の園児の滞在場所・行為の決定に教員が強く関わるか否かを判断基準として、園児が滞在場所・行為を主体的に決定している状況を[自由保育]、教員が滞在場所・行為を決定している状況を[プログラム保育]に大別し、[プログラム保育]については、さらに行為の具体的内容をもとに[設定保育]、[待機・準備]、[ホームルーム(以下HR)]、[昼食]の4つに分類した^{注3.1)}。[自由保育]は個々の園児が滞在場所・行為を自由に選択できる保育活動であり、静的なものから動的なものまで多様な行為がある。一方、[設定保育]はクラス、複数クラス、学年単位で教員が課題を設定して行なわれる保育活動であり、[自由保育]同様幅広い行為がある。[待機・準備]は次の保育活動の準備や片付け、用便、整列等である。[HR]は連絡事項やうた、読み聞かせ等であり、通常午前と午後の二回行われている。[昼食]は昼食時間そのものであり、準備や片付けは含まれない。

図 3.2 は保育活動の分類に基づいて、調査対象幼児(年中児)が所属するクラスの典型的な1日の保育活動の流れと活動内容・場所を一例として示したものである。調査対象園の保育活動(自由保育、待機・準備、設定保育、HR、昼食)の時間配分や具体的な活動内容は園により顕著な差がみられる。

注 3.1) 小川は、文献 3.8) において保育所における生活行為を自由遊び、課題保育、食事、着替え、食事準備、食事片付け、午睡準備、午睡片付けに分類しているが、本研究では小川の分類する生活行為の中で自由遊びを自由保育、課題保育を設定保育、食事を昼食に対応させ、幼稚園特有のホームルームを独立した活動とした。また、小川の分類する保育所での着替え、食事準備・片付けの生活行為は幼稚園における待機・準備活動とした。

表 3.3 保育活動の分類

保育活動	行為の具体例	特徴	
自由保育	絵本読み、お絵かき、コマ回し、ままごと、積み木、工作、乗り物遊び、砂遊び、落ち葉遊び、固定遊具遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、なわとび	幼児が場所・行為を選択できる活動。動きが少なく静的なものから、体を大きく動かす動的なものがある。	
プログラム保育	設定保育	教員が課題を設定するクラス単位以上の活動。比較的静的なものから、体を大きく動かす動的なものがある。	
	待機・準備	活動の準備、片付け	活動の転換に伴う準備や片付け。昼食前後の準備・片付けも含む。
		手洗い、用便、歯磨き	教員の指示により手洗い・用便を行なうもの。
		着替え	全員一斉に着替える場合と、汚れ等により各自が適宜着替える場合がある。
	待機、整列	活動場所が変化する際の待機・整列。	
ホームルーム	出席確認、連絡事項	連絡事項や出席確認。	
	うた	活動の転換時に園児の注意を引く場合と、1日の締めくくりとして行なわれる場合がある。	
	園本読み聞かせ、紙芝居読み聞かせ	絵本や紙芝居の読み聞かせ。	
昼食	昼食	昼食。片付けや準備は含まない。	

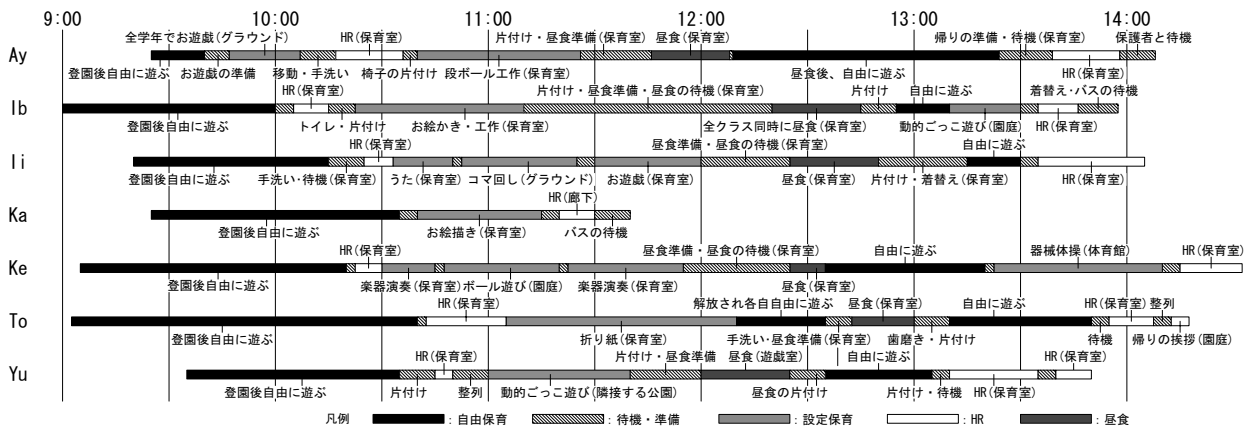


図 3.2 調査対象幼稚園の典型的な保育活動の流れ (年中児)

3.2.2 園別・学年別保育活動時間

図 3.3 は調査対象園の 1 日の保育活動時間割合を示したものである。母数の平均延べ時間は調査対象園児の 1 日の合計観察時間を園別に平均化したものである。保育活動時間割合は全体では自由保育 42%、設定保育 20%、待機・準備 20%、HR 9%、昼食 9% で、自由保育は 1 日の約 4 割強を占めている。また Ka・To・Yu の 3 園は自由保育が他 4 園より相対的に高くいずれも 5 割以上である。自由保育時間割合は園により差がみられるが、これらは個々の幼稚園の教育理念・方針等にも影響されていると考えられる。

図 3.4 は学年別保育活動時間割合を示したものである。年少の自由保育時間割合は年中・年長より 1 割程度高く、設定保育は 1 割程度低いことから、年少では特に自由保育のための時間と空間の確保が重要であるといえよう。

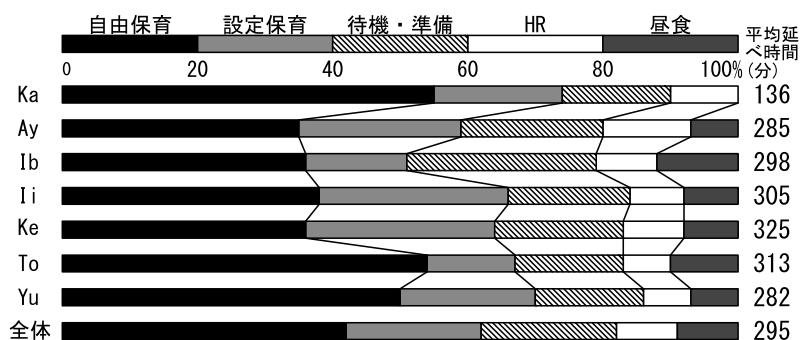


図 3.3 園別保育活動時間

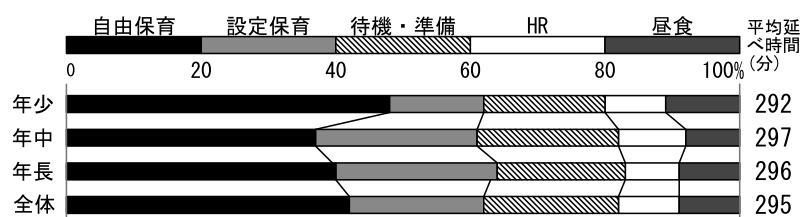


図 3.4 学年別保育活動時間

3.3 各室・空間の滞在時間

3.3.1 各室・空間の分類

ここでは、幼稚園各室・空間における保育活動時間の特性を把握するため、幼稚園で保有する典型的な各室・空間を〔保育室〕、〔遊戯室〕、〔テラス・廊下〕、〔園庭〕、〔固定遊具〕、〔自然環境〕、〔その他〕の7つに分類した(表3.4)。

3.3.2 保育活動別各室・空間別滞在時間

図3.5は保育活動別にみた幼稚園各室・空間の滞在時間割合を示したものである。全体で見ると保育室60%、遊戯室8%、テラス・廊下6%、園庭11%、固定遊具4%、自然環境4%、その他7%、また保育活動別にみると設定保育、HR、昼食での保育室の滞在時間割合は7割以上で、保育活動は主に保育室を中心に展開されていることがわかる。自由保育では固定遊具・自然環境、昼食では遊戯室の滞在時間が他の保育活動より高くなっているが、この理由としては固定遊具・自然環境が自由保育での遊び活動を想定したしつらえになっていること、遊戯室がランチルームとして利用されていること等が挙げられる。

表3.4 各室・空間の分類

各室・空間	具体例
保育室	保育室
遊戯室	遊戯室、体育館
テラス・廊下	昇降口、階段、廊下、テラス
園庭	グラウンド
固定遊具	すべり台、鉄棒、複合遊具
自然環境	砂場、飼育小屋、林、森
その他	図書室、便所、調理室、管理諸室(教材・器具庫、職員室…)など

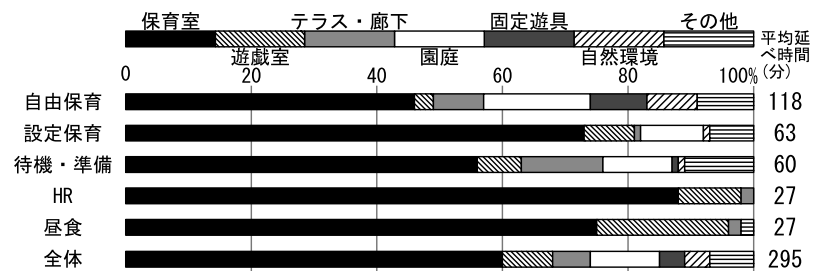


図3.5 保育活動別各室・空間別の滞在時間

3.3.3 園別各室・空間別滞在時間

図 3.6 は自由保育時の各室・空間別の滞在時間割合を示したものである。保育室内の遊びコーナーが充実している Ib・Ke(写真 3.1)・Yu の 3 園では保育室が 6 割以上であるが、土遊びコーナー・ヤギ飼育小屋等の特色ある自然環境・要素を有する Ka・Ii(写真 3.2) では保育室が 1～2 割程度と少なく、自然環境は約 2 割で相対的に高くなっている。Ka・Ii では園が保有する豊かな自然環境の魅力により、幼児の屋外遊び活動が誘発・活性化されていると考えられる。またボール遊びコーナー等の屋外遊び専用空間が設定されている Ka・Ii・To(写真 3.3) の 3 園では園庭が 3 割弱で他園より高くなっている。Ka(写真 3.4) ではその他の空間(屋外工作コーナー)が 3 割弱で他園より高くなっているのが特徴的である。Yu の遊戯室は約 2 割で他園と比べて高くなっている。この理由の一つとしては図 3.7 に示すように Yu の保育室と遊戯室周りの空間がウッドデッキテラスを介して回遊できるようになっていることが挙げられる。この園では特にウッドデッキテラス・遊戯室が遊びの拠点として機能しているとみることができる。

図 3.8 はプログラム保育時の各室・空間の滞在時間割合を示したものである。保育室は全体で約 7 割であるが園別にみると 5 割～9 割の幅がある。器械体操設備のある体育館を有する Ke(写真 3.5) や食事空間としても利用される遊戯室を有する Ke・Yu では、遊戯室の滞在時間割合が他の園より高く保育室は低くなっている。近隣に畑を有する Ay や公園を有する Yu(写真 3.6) では、その他の空間が 1 割以上みられる。



写真 3.1 Ke 年少保育室の遊びコーナー



写真 3.2 Ii 土手のくぼみ



写真 3.3 To サッカーコーナー



写真 3.4 Ka 工作コーナー

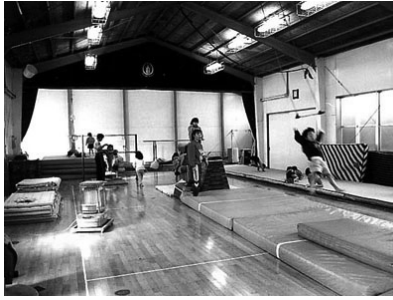


写真 3.5 Ke 機械体操設備のある体育館



写真 3.6 Yu 敷地に隣接した公園

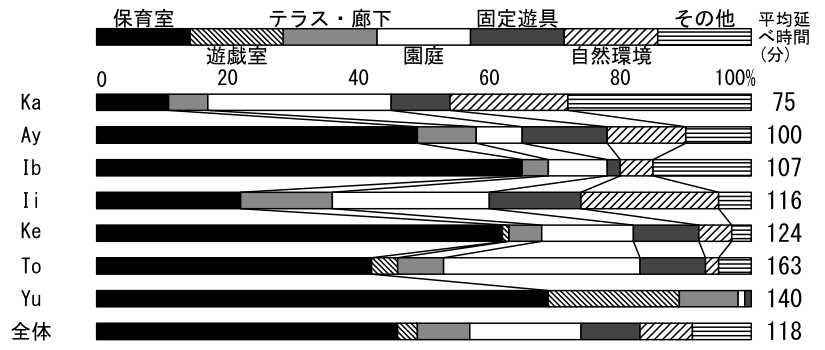


図 3.6 自由保育における園別各室・空間別の滞在時間

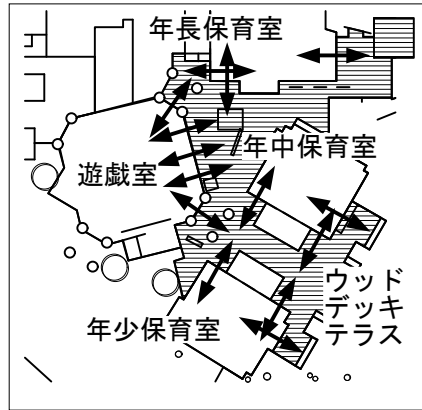


図 3.7 Yu 回遊ができる各室・空間の配置

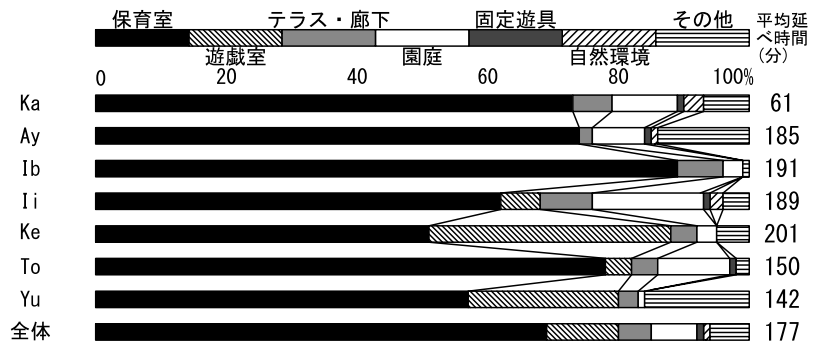


図 3.8 プログラム保育における園別各室・空間別の滞在時間

3.3.4 学年別各室・空間別滞在時間

図 3.9 は自由保育における学年別各室・空間別の滞在時間割合を示したものである。保育室は年少・年中に比べて年長の方が約 2 割高く、園庭は年長より年少・年中の方が約 1 割高くなっている。図 3.10 は同じくプログラム保育の滞在時間割合を示したものである。保育室は年長より年少・年中の方が約 1 割高く、遊戯室では年少・年中よりも年長が約 1 割高くなっている。

自由保育とプログラム保育それぞれの滞在時間の特性から、保育室はいずれの保育活動においても重要な活動拠点であるといえる。そして遊戯室は年長のプログラム保育利用、園庭は年少・年中の自由保育利用を前提とした配置を考慮する必要があるといえよう。

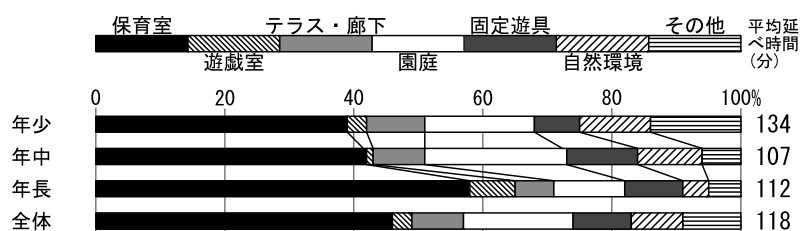


図 3.9 自由保育における学年別各室・空間別の滞在時間

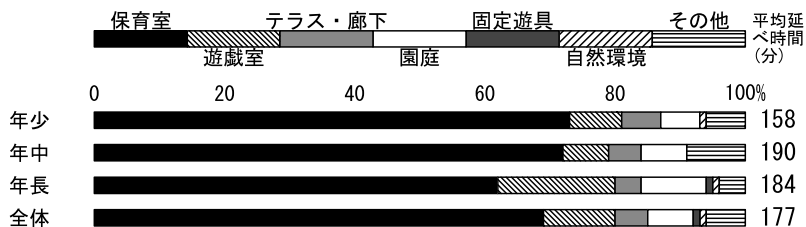


図 3.10 プログラム保育における学年別各室・空間別の滞在時間

3.4 保育活動における集団形成単位

3.4.1 集団形成単位の分類

自由保育及びプログラム保育活動における集団形成単位は、各室・空間の大きさを規定する重要な指標である。ここでは保育活動で観察された幼児の集団形成単位を自由保育とプログラム保育に分けて分析を行なった。自由保育の集団形成単位は[1人]、[2人]、[3人]、[4人]、[5人]、[6～10人]、[11人以上]の7項目、プログラム保育は[クラス]、[複数クラス]、[学年]、[全学年]、[その他]の5項目にそれぞれ分類した(表3.5)。

表3.5 プログラム保育における集団形成単位の分類

集団形成単位	定義
クラス	クラス全員で行なう活動
複数クラス	複数のクラス形成で行なう活動。異学年の形成も含む
学年単位	学年全体で行なう活動
全学年	全学年で行なう活動
その他	バス別の集団形成等、上記以外のもの

3.4.2 各室・空間別集団形成単位

図 3.11 は自由保育における各室・空間別の集団形成単位時間割合を示したものである。テラス・廊下や固定遊具では 2 人以下の小集団、遊戯室や園庭では特に 6 人以上の中・大集団が形成されている。

図 3.12 は同じくプログラム保育の状況を示したものである。クラス単位の活動はどの室・空間においても最も高く、特に保育室は 99% がクラス単位である。遊戯室は複数クラス・学年単位、園庭は全学年単位の活動がそれぞれ約 2 割程度みられる。遊戯室と園庭は自由保育・プログラム保育の両方において中集団・大集団の利用がみられ、集団形成単位に対応する空間規模の設定が重要であると考えられる。

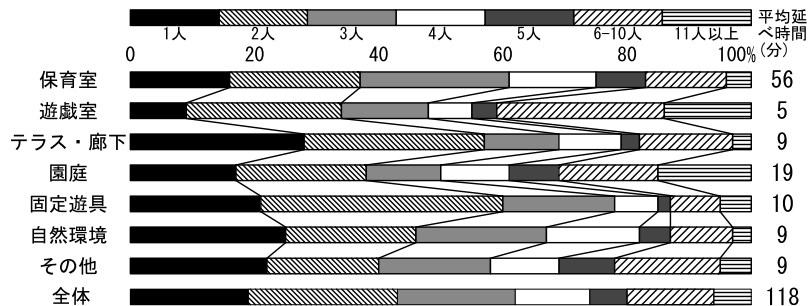


図 3.11 自由保育における各室・空間別の集団形成単位

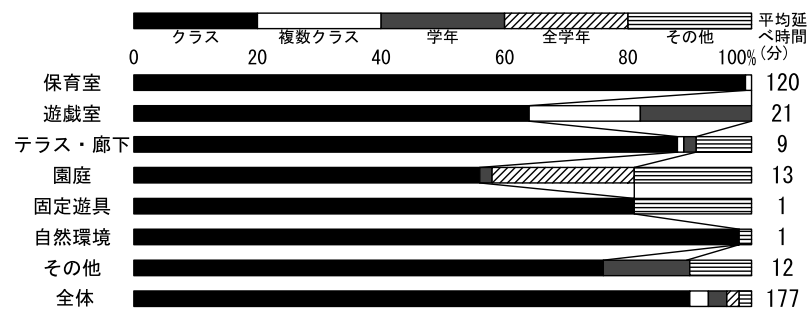


図 3.12 プログラム保育における各室・空間別の集団形成単位

3.5 自由保育における学年別の滞在場所と空間特性

図 3.13 は自由保育における3園 (Yu、Ay、Ka) の学年別の滞在場所と空間特性の関係を示したものである。以下、園別にこれらの関係について述べる。



写真 3.7 Yu 年中保育室内の様子

Yu 幼稚園：年中・年長は遊びコーナーを有する保育室 (写真 3.7) を中心に遊戯室やウッドデッキテラスに滞在しているが、園庭の滞在時間割合は極めて少ない状況にある。この理由としては多様な遊びが可能な保育室内のコーナーやウッドデッキテラス等、空間・場そのものが有する魅力が園児を引き付け、結果的に屋外の空間の一つである園庭の利用が少なくなったと考えられる。保育活動の領域を学年別にみると遊戯室は主に年長、ウッドデッキテラスは年中の領域として機能しており、この園では自由保育において学年による空間利用の棲み分けがなされていると考えられる。

Ay 幼稚園：年少・年中・年長はそれぞれ保育室を中心に滞在しており、特に砂場、遊具庭、グラウンドでは全学年の滞在がみられる。この園の敷地内には高低差があり、園舎は敷地内の最も低い場所、遊具庭やグラウンドは園舎より高い場所に位置する。このことから幼児の滞在時間割合は高い場所になるほど減少していることがわかる。学年別にみるとアスレチック遊具は年中、玄関ホール・園舎周辺は年長の滞在が多く、特に玄関ホールは年長保育室と空間的に連続している (写真 3.8) ことが年長の滞在行动を誘発していると考えられる。



写真 3.8 Ay 玄関ホールと年長保育室

Ka 幼稚園：年少・年中・年長のいずれも保育室の滞在は極めて少なくグラウンドの滞在が多くなっている。この園も敷地内に高低差がありグラウンドは敷地の中で低い場所に位置している。ここでの屋外遊び行動は敷地の空間特性に強く影響されていると考えられる。学年別に滞在場所と時間の関係をみると年少は保育室前庭、年中は屋外工作コーナーと擁壁、年長は保育室裏庭が多くなっており、自由保育における幼児の滞在行动は保育活動の拠点となる各学年保育室近傍に生じることが読み取れる。なお年少保育室から離れた位置にある年中・年長保育室前庭でも年少の滞在がみられるが、ここでは土遊びコーナー等の魅力ある屋外空間・要素が年少児の行動領域を広げていると考えられる。

自由保育における幼児の滞在場所と空間特性の関係は、図 3.14 に示すように、高低差のある敷地内のグラウンド (Ka)、各園の特徴

的なしつらえがある擁壁、土遊びコーナー、砂場、屋外工作コーナー (Ka、Ay)、保育室と近接・連続性のあるウッドデッキテラス、玄関ホール、遊戯室 (Yu、Ay) 等にまとめられる。

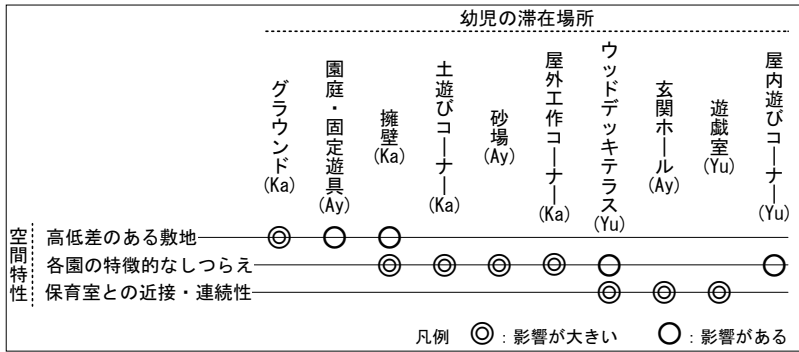


図 3.14 幼児の滞在行动を誘発する場所と空間特性

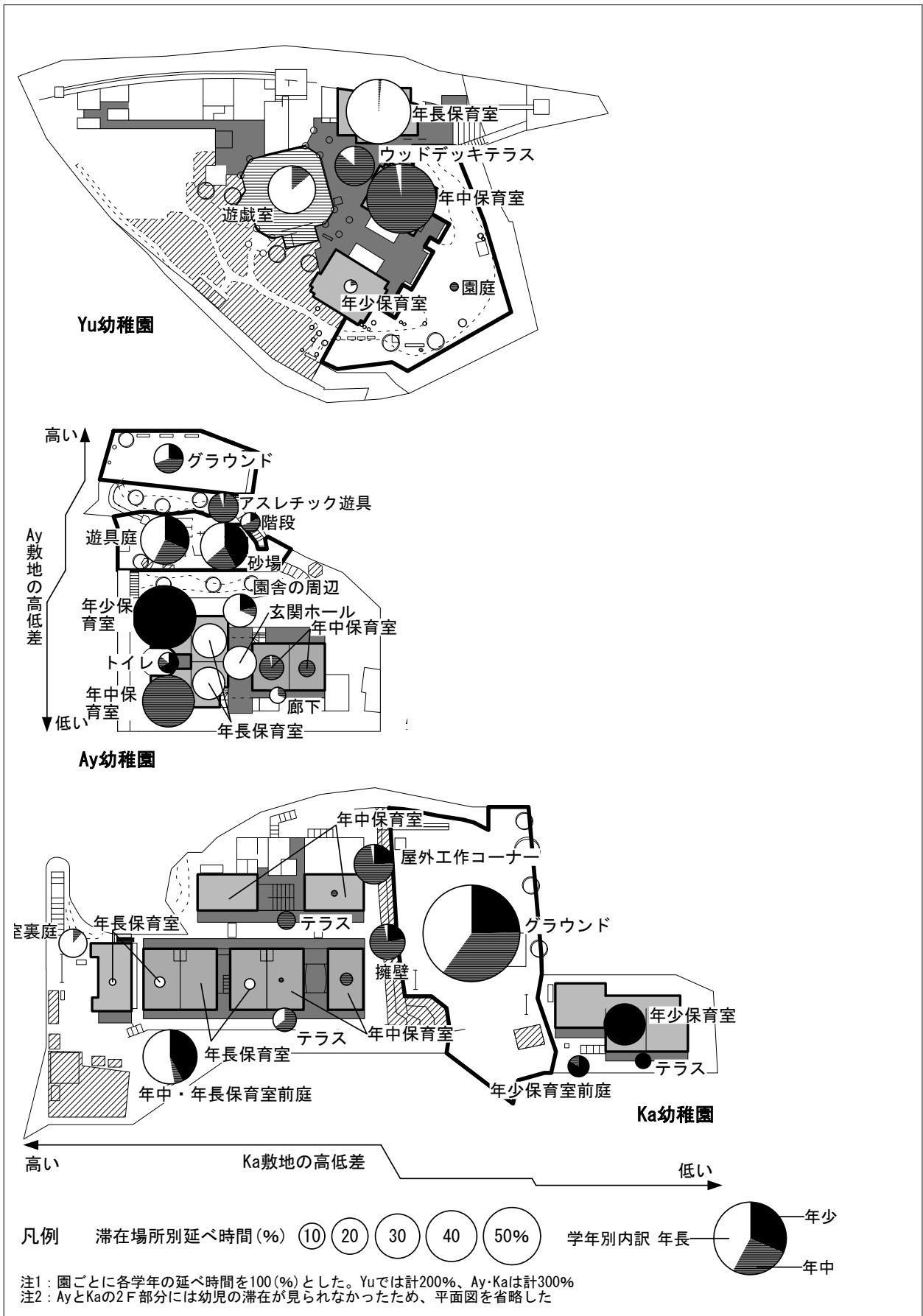


図 3.13 自由保育における学年別の滞在場所と空間特性 (Yu・Ay・Ka 幼稚園)

3.6 まとめ

本章では、幼稚園各室・空間における保育活動の時間的特性と建築計画的課題を明らかにすることを目的として、特色ある保育環境を有する7幼稚園を調査対象に選定し、園児の行動観察調査結果から、以下の知見を得た。

1) 幼児の1日の保育活動時間に占める自由保育の割合は、園・学年により差がみられるが全体では概ね4割強である。学年別にみた場合、年少は年中・年長より自由保育活動の時間と空間の確保が重要な課題である。

2) 保育活動は自由保育、プログラム保育ともに保育室が拠点となる。この他屋内では魅力的な遊びコーナー、食事機能を有する遊戯室、屋外では固定遊具、土遊びができる自然環境・飼育小屋、ボール遊び・工作コーナー、回遊性のあるウッドデッキテラス、近隣の畑・公園等の機能が大きな役割を有している。

3) 年長は保育室と遊戯室、年少・年中は保育室と園庭が保育活動の拠点となり、これら諸室相互の関係に十分配慮する必要がある。

4) 保育活動における集団形成単位は、テラス・廊下や固定遊具では小集団、遊戯室や園庭では中・大集団が形成され、これらの集団形成単位に対応した空間規模の設定が重要である。

5) 自由保育における幼児の滞在場所・時間は、特に高低差のある敷地や魅力的なしつらえ、保育室との近接・連続性等の空間特性に影響される。

以上を総括し、各室・空間別に保育活動時間の特性をダイアグラムとしてまとめると図3.15のように示される。保育室は学年を問わず全ての保育活動において必要不可欠な空間機能であるが、保育室以外の各室・空間機能を整備・充実することにより保育室の相対的役割・機能は軽減すると考えられ、このことは特に自由保育において考慮すべき点となる。すなわちプログラム保育に特化した保育室以外に、自由保育で多様な活動が展開できる魅力的な各種内外空間をしつらえることが建築計画上の課題といえよう。

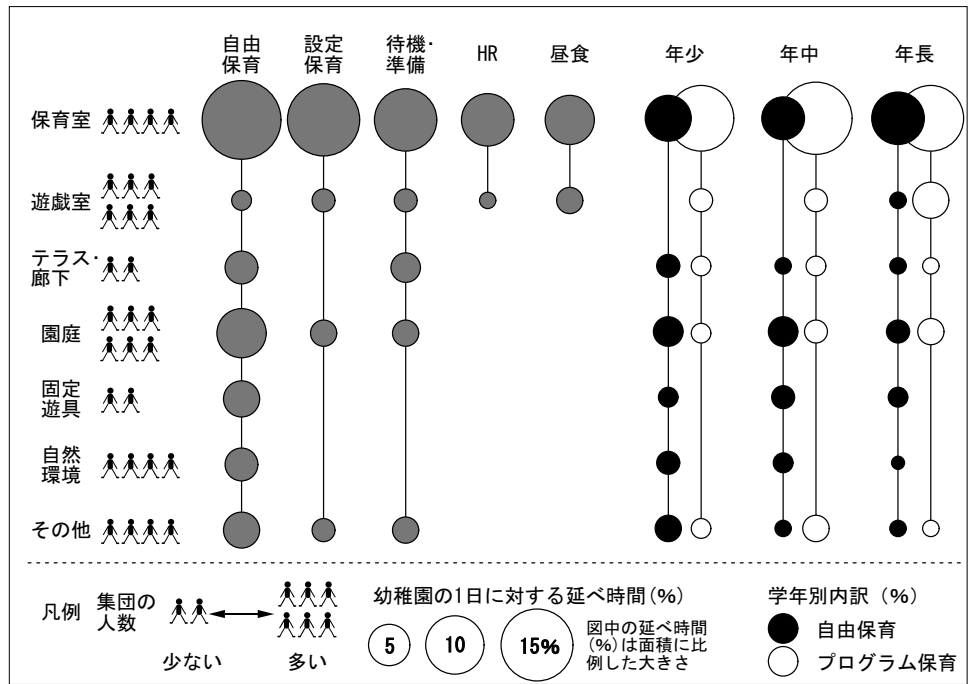


図 3.15 各室・空間別にみた保育活動時間の特性

参考文献

- 3.1) 北浦かほる, 萩原美智子: 保育環境としての遊び空間のあり方 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて - 日本建築学会計画系論文集 No.563, pp139-146, 2003.1
- 3.2) 北浦かほる, 木下千絵, 萩原美智子, 木下恵津子: 保育環境としての子どもの生活空間の検討 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (2)- 日本建築学会計画系論文集 No.568, pp33-40, 2003.6
- 3.3) 北浦かほる, 木下恵津子: 夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (3)- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp37-45, 2004.1
- 3.4) 佐藤将之, 高橋鷹志: 園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その 1- 日本建築学会計画系論文集 No.562, pp151-156, 2002.12
- 3.5) 佐藤将之, 西出和彦, 高橋鷹志: 遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その 2- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp29-35, 2004.1
- 3.6) 山田あすか, 上野淳, 登張絵夢: 保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その 1)- 日本建築学会計画系論文集 No.580, pp57-64, 2004.6
- 3.7) 山田あすか, 上野淳, 登張絵夢: 園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その 2)- 日本建築学会計画系論文集 No.587, pp49-56, 2005.1
- 3.8) 小川信子: 子どもの生活と保育施設 彰国社 2004.7

第4章

園児一人ひとりの遊び行為と各室・空間の関わり

- 4.1 はじめに
- 4.2 調査対象園の空間的特徴と遊び行為の関係
- 4.3 遊び行為に関わる各室・空間と特徴的な環境要素
- 4.4 自由保育における園児一人ひとりの遊び行為実態とその特徴
- 4.5 園児の興味・関心対象が存在する生活領域の特徴
- 4.6 まとめ

第4章 園児一人ひとりの遊び行為と各室・空間の関わり

4.1 はじめに

4.1.1 本章の背景と目的

第3章では、各室・空間における保育活動の時間的特性について、自由保育の割合が全体では概ね4割強である重要な保育活動であること、自由保育で多様な活動が展開できる魅力的な各種内外空間をしつらえることが建築計画上の課題であると論じた。

自由保育活動は遊びを通じた活動が中心であるため、遊び実態の分析から空間のあり方を扱っている既往研究を整理すると、西本雅人らによる保育室の遊びコーナー特性に関する研究^{4.1-4.3)}、細谷俊子らによる異年齢交流の遊び実態に関する研究^{4.4-4.5)}、山田恵美らによる遊びコーナーの型に関する研究^{4.6)}、正田博之らによる遊び実態からみた園庭のあり方に関する研究^{4.7)}が挙げられる。これらは室内もしくは園庭のみが対象で、屋内外を含めた園全体のあり方について扱っていない。また、遊び集団全体から遊び活動実態を把握しようとしており、園児一人ひとりの詳細な遊び実態について扱っていない。

そこで本章では、3章で扱ったデータをより詳細に分析することを試み、園児一人ひとりの遊び実態から各室・空間と環境要素の関わりを明らかにすることを目的とした。

4.1.2 分析方法の概要

調査対象園および調査方法は第3章と同様である。調査対象園の配置図・平面図を図4.1に再掲する。園児一人ひとりの滞在場所について、その選択要因を詳細に把握したいと考え、自由保育で観察された全ての活動場所を再分析し、遊びの成立に関わっていると思われる各園の特徴的な環境要素を抽出した(表4.1)。そこで、園児一人ひとりの遊び行為を読み解く際は、各室・空間別の活動実態に加え、その内訳として特徴的な環境要素滞在の有無についても分析している。

4.1) 西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.601, pp.47-55, 2006.03

4.2) 西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1257-1264, 2013.06

4.3) 西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.319-327, 2014.02

4.4) 細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.634, pp.2565-2572, 2008.12

4.5) 細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, No.639, pp.1029-1035, 2009.05

4.6) 山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.637, pp.549-557, 2009.03

4.7) 正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究, 日本建築学会計画系論文集, No.714, pp.1765-1773, 2015.08

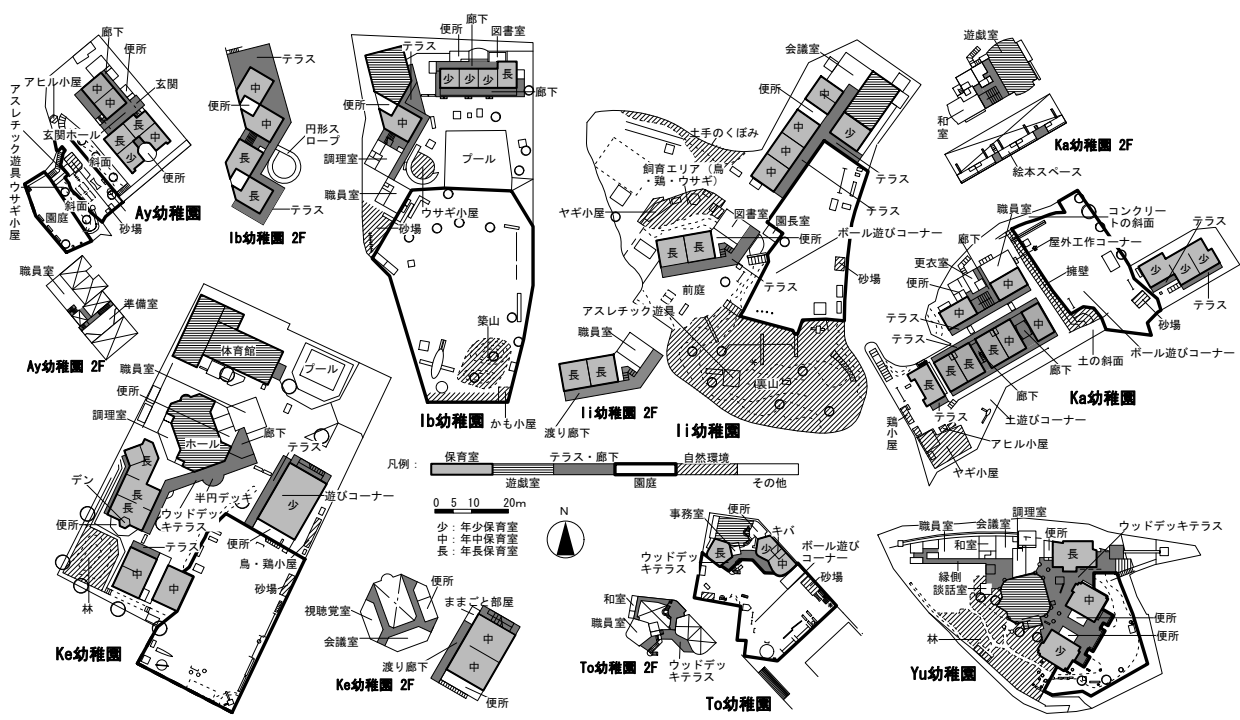


図 4.1 調査対象園の配置図・平面図 (再掲)

表 4.1 遊びが観察された各園の特徴的な環境要素

	Ay	li	Ib	Ka	Ke	To	Yu
保育室	-	-	パソコンコーナー 絨毯	-	ままごとコーナー ブロックコーナー 楽器コーナー 円形の穴 段ボール製の拠点	-	ままごとコーナー
遊戯室	-	-	-	-	-	-	-
テラス・廊下	トイレ前スペース	-	-	木製デッキ	-	ウッドデッキテラス	ウッドデッキテラス
園庭	砂場のすぐ外	-	前庭	砂場のすぐ外	-	サッカーコーナー 砂場のすぐ外	-
自然環境	砂場 土の斜面 飼育小屋	土手のくぼみ 裏山 樹木 飼育小屋	樹木 築山 畑 砂場	砂場 土手 樹木 飼育小屋	裏の林 水たまり	水たまり 飼育小屋	-
固定遊具	アスレチック遊具	アスレチック遊具 タイヤブランコ ロープウェイ 屋根付きベンチ	アスレチック遊具	タイヤブランコ ウッドデッキテラス	室内すべり台 アスレチック遊具	キバ	-
その他	水道 製作した拠点 階段 園外の畑	水道 段ボール製の隠れ家	水道 裏庭	擁壁 水道 屋外工作コーナー 屋外のテーブル 園外の畑	裏の通り 舟	ベンチ 屋外のテーブル 釜	-

4.2 調査対象園の空間的特徴と遊び行為の関係

4.2.1 遊び行為の分類

保育施設における園児の遊び場所を計画する場合、広い範囲を動き回る遊びや、ある場所に留まって落ち着いて展開される遊びなどがみられ、性格の異なる遊びそれぞれの邪魔にならないよう領域を切り分ける必要がある。そのため、遊びの性質を評価する場合、園児の発達段階における遊びの意味づけや社会性との関わりといった観点よりは、園児の身体の動きに着目する必要があると考えた。そこで、表4.2のとおり、本研究で観察された遊び行為について動的・中間的・静的遊びに分類した。ここでは遊びにおける身体の動きに着目し、身体の動きが活発であるものを「動的遊び」、あまり動きがないものを「静的遊び」とし、その中間あるいは、状況により動的もしくは静的な活動になるものを「中間的遊び」と分類した。その結果、動的遊びは19種類、中間的遊びは12種類、静的遊びは13種類で合計44種類となった。

表4.2 観察された遊びの分類

動的遊び	中間的遊び	静的遊び
固定遊具／じゃれ／コマ遊び／動のごっこ遊び／鬼ごっこ／ボール遊び／探検／踊り／長なわとび／ちゃんばら／走る／フラフープ／玉転がし／なわとび／ひも遊び／乗り物遊び／わたる／水たまりに入る／登る	砂遊び／玩具遊び／ブロック遊び／紙飛行機／うた／楽器遊び／色水遊び／動物／カード遊び／氷集め／木の実拾い／虫	話／工作／見る／ままごと／お絵かき／絵本読み／粘土／パソコン／あやとり／折り紙／隠れる／料理／毛糸

4.2.2 園別にみた各室・空間の特徴と遊び行為の関係

1) Ay 幼稚園

表 4.3 は Ay における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

固定遊具、じゃれ、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、踊り、ちゃんばら、フラフープ、ひも遊びなどが主に観察された遊びである。固定遊具のうち 78 分中 33 分がアスレチック遊具である。またアスレチック遊具では踊りも 13 分中 11 分と大部分を占めている。ボール遊びは園庭(写真 4.1)、フラフープは遊戯室が中心となっているが、比較的様々な場所で動的遊びが見られることが特徴である。

□中間的遊び

主に観察された遊びは、砂遊び、ブロック遊び、楽器遊び、虫収集などである。砂遊びは自然環境を中心に、園庭、固定遊具、その他の様々な場所で行われている。具体的には、砂場、砂場のすぐ外の滞在割合が高く、砂場のある遊具庭(写真 4.2) から距離が離れた園舎周りにある水道(写真 4.3)、階段まで活動範囲が広がっている。ブロック遊びは保育室と遊戯室、楽器遊びは保育室のピアノを使用している。虫収集はすべて園外の畑でみられたものである。

□静的遊び

話、工作、見る、ままごと、お絵かき、絵本読み(写真 4.4)、粘土(写真 4.5)、あやとり、折り紙などの遊びがみられる。見るは特に屋内でみられ、トイレ前スペースでは他クラスの様子を眺めている様子であった。ままごとは園児がクラスで制作した拠点を中心に活動しており、保育室(写真 4.6)や遊戯室まで遊びの領域が広がっている。持ち運べる素材のあやとりは、保育室だけではなく、遊戯室やテラス・廊下でもみられる。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

クラス全員で制作した園舎すぐ外の拠点(写真 4.7)では、ままごと遊びが行われている。観察した年長女兒は、うろうろした際に制作した拠点を覗き、鬼ごっこを保育室～遊戯室でした後、製作した拠点で行われていたままごと遊びに加わっている。また、ままごと遊びの中でピクニックに向く流れとなり、遊戯室や保育室に出



写真 4.1 最上部のグラウンド (園庭)



写真 4.2 敷地中段にある遊具庭



写真 4.3 園舎周りにある水道



写真 4.4 テーブルについて絵本読み



写真 4.5 テーブルで粘土遊び



写真 4.6 保育室（年少クラス）



写真 4.7 クラス全員で製作した拠点



写真 4.8 砂場とアスレチック遊具



写真 4.9 土の斜面を走っている園児

向いた後、自分が所属する保育室でままごと遊びが行われるようになっていく（図 4.2）。

遊具庭にあるアスレチック遊具（写真 4.8）は、砂場から梯子を使って上がるようになっている。観察した年中男児は、アスレチック遊具自体で遊び、園児や教諭と話をしてから、上部で踊る姿がみられた。また、踊りに飽きた後は、遊具自体で遊んだり、そこで話をするなど、居場所としてアスレチック遊具が機能している。ホームルームの時間が近づいて保育室に戻る際には、砂場や園庭、すべり台などに働きかけるなど、すぐに保育室に戻るのではなく遠回りかつ寄り道している姿がみられた（図 4.3）。

砂遊びの場所をみると、観察した年中男児は、砂場内よりも、砂場のすぐ外側、園庭、登り棒などの場所を選択している（図 4.4）。また砂遊びの最中にも登り棒でくるくる回るなど、他の遊びを短時間行っている姿がみられた。

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.5）

年少は、保育室 59.1%、テラス・廊下 4.6%、園庭 11.4%、自然環境 13.9%、固定遊具 4.9%、その他 6.0%の滞在割合で遊戯室の滞在はみられなかった。複数の場所でみられる遊びは、工作（保育室・テラス・廊下・その他）、砂遊び（園庭・自然環境・その他）、動的ごっこ遊び（保育室・園庭）である。

年中は、保育室 55.2%、遊戯室 0.2%、テラス・廊下 1.7%、園庭 9.6%、自然環境 4.8%、固定遊具 20.4%、その他 8.2%である。複数の場所でみられる遊びは、ちゃんばら（保育室・園庭・固定遊具）、鬼ごっこ（園庭・固定遊具）、砂遊び（園庭・自然環境・固定遊具・その他）、工作（保育室・その他）である。

年長は、保育室 32.5%、遊戯室 15.3%、テラス・廊下 4.0%、園庭 5.8%、自然環境 13.3%、固定遊具 15.3%、その他 14.0%で、保育室に隣接する遊戯室は年長が占有している状況にある。複数の場所でみられる遊びは、フラフープ（保育室・遊戯室・テラス・廊下）、鬼ごっこ（保育室・遊戯室）、走る（遊戯室・その他／写真 4.9）、砂遊び（園庭・自然環境・固定遊具・その他）、ままごと（保育室・遊戯室・その他）、あやとり（保育室・遊戯室）である。

Ay年中男児	13:00	13:15
うんてい	アスレチック遊具で遊ぶ	トイレに向かう前に固定遊具で遊ぶ
アスレチック遊具		
階段		
砂場のすぐ外側	砂遊び	集めた砂で砂遊び
砂場	砂遊び	
砂道具倉庫	砂遊び道具を探す	
園庭		
登り棒	スコップを持って動き回り砂を集める	スコップで砂を集める
鉄棒		一くると回る
集団人数(人):園児	2 2 1 1 1 7 7 7 1 1 5 1 1 1 1 4 9	1 1 1 4 4 4 1 1
集団人数(人):教諭		2 2 2
行為	話 話 固定遊具 固定遊具 移動 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び 砂遊び じゃれ じゃれ 砂遊び 砂遊び 固定遊具 固定遊具	

図 4.4 遊具庭の様々な場所で行われる砂遊び (Ay 年中男児)

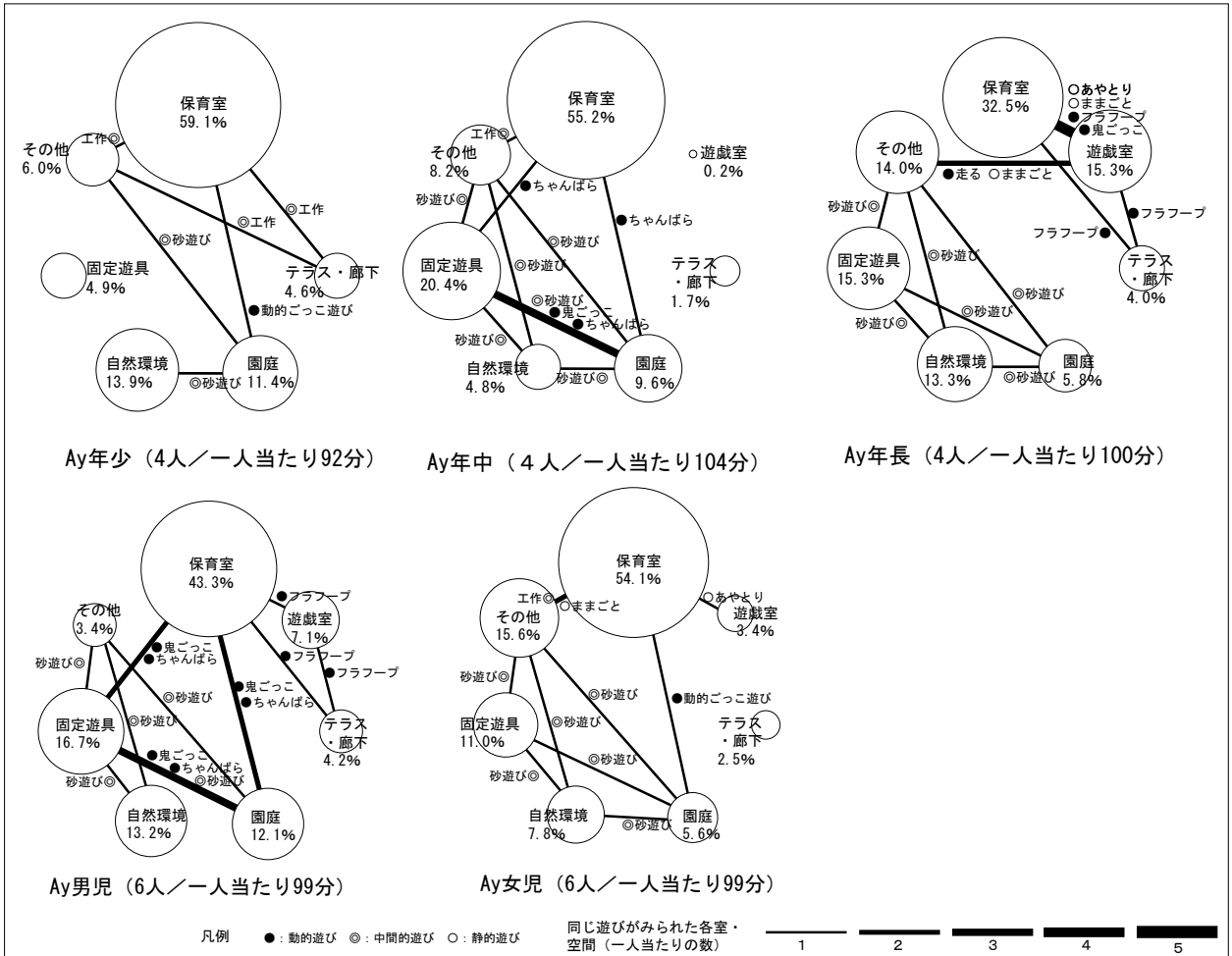


図 4.5 Ay における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び

2) Ii 幼稚園

表 4.4 は Ii における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

固定遊具、じゃれ、コマ遊び、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、探検、長なわとび、ひも遊びなどが観察されている。コマ遊びは園庭を中心にその他、テラス・廊下、固定遊具などでもみられる。屋根付きベンチ（写真 4.10）や段ボール製の隠れ家などでも行われている。鬼ごっこは幅員が広いテラス・廊下が多く、それ以外の場所でもみられる。探検は全て裏山で観察されている。

□中間的遊び

砂遊び、色水遊びが主な遊びとして挙げられる。砂遊びは自然環境を中心に遊戯室以外の場所で見られる。土手のくぼみ（写真 4.11）を中心に、裏山、樹木、水道、屋根付きベンチなど特徴的な環境要素の存在が行為を発生させている。色水遊びは年少 1 名のみ観察されたが、保育室前のテラス（写真 4.12）が人工芝仕上げとなっており、水をこぼしても問題ないしつらえが遊び場所として選択されていると解釈できる。

□静的遊び

主な遊びは、話、工作、見る、お絵かき、毛糸などである。工作、お絵かきは保育室内で行われている。毛糸も保育室が中心であるが、テラス・廊下（写真 4.13）でもみられる。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態（図 4.6）

年少保育室のすぐ外に設置された段ボール製の隠れ家は、年少児が占有する場所となっている。観察した年少男児は隠れ家自体で遊んでいた。また、アヒル・ヤギ・チャボなどたくさんの動物が居る飼育小屋では、様々な種類の動物を見て回る姿がみられた。土手のくぼみでは土団子づくりが中心となっているが、そのための土の掘りだし・水くみなどの行為も見られる。つくった土団子は取っておくために自分の下駄箱に隠す姿もみられる。また、この園児ではないが白砂をまぶすために様々な場所を行き来する姿もある（写真 4.14）。



写真 4.10 屋根付きベンチ



写真 4.11 土手のくぼみ



写真 4.12 人工芝が敷かれたテラス



写真 4.13 幅員の広いテラス



写真 4.14 土団子に白砂をまぶす場所

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.7）

年少は、保育室 14.9%、テラス・廊下 19.5%、園庭 13.5%、自然環境 25.5%、固定遊具 22.2%、その他 4.6%である。複数の場所でみられる遊びは、走る（保育室・園庭・自然環境）、動のごっこ遊び（保育室・園庭）、ひも遊び（保育室・テラス・廊下）、砂遊び（保育室・園庭・自然環境・固定遊具・その他）、色水遊び（保育室・テラス・廊下）、あやとり（テラス・廊下・その他）である。

年中は、保育室 18.7%、テラス・廊下 4.3%、園庭 41.7%、自然環境 25.7%、固定遊具 8.3%、その他 1.3%である。複数の場所でみられる遊びは、砂遊び（テラス・廊下・園庭・自然環境・その他）、コマ遊び（テラス・廊下・園庭）である。

年長は、保育室 8.4%、テラス・廊下 4.4%、園庭 53.4%、自然環境 15.2%、固定遊具 14.8%、その他 3.8%である。複数の場所でみられる遊びは、砂遊び（テラス・廊下・園庭・自然環境・固定遊具）、コマ遊び（園庭・その他）である。

以上、他の園よりも屋外環境の滞在割合が高く、特に園庭は学年が上がるにつれて滞在割合が高くなっている。また自然環境は年少・年中の滞在割合が高い。なお、他学年が通り抜けることがない年少保育室前のテラスは年少の滞在割合が高くなっていることがわかる。また、年少児は他学年よりも動的遊びが複数の場所でみられることがわかる。

□性別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.7）

男児は、保育室 13.2%、テラス・廊下 5.3%、園庭 43.1%、自然環境 16.6%、固定遊具 16.4%、その他 5.3%である。複数の場所でみられる遊びは、動のごっこ遊び、長なわとび、砂遊び、コマ遊びである。

女児は、保育室 13.1%、テラス・廊下 15.0%、園庭 27.6%、自然環境 25.5%、固定遊具 16.7%、その他 2.2%である。複数の場所でみられる遊びは、鬼ごっこ、砂遊び、色水遊びである。

以上、男児と女児の滞在傾向は似ているが、園庭は男児の滞在割合が高く、テラス・廊下、自然環境は女児の滞在割合が高いことがわかる。

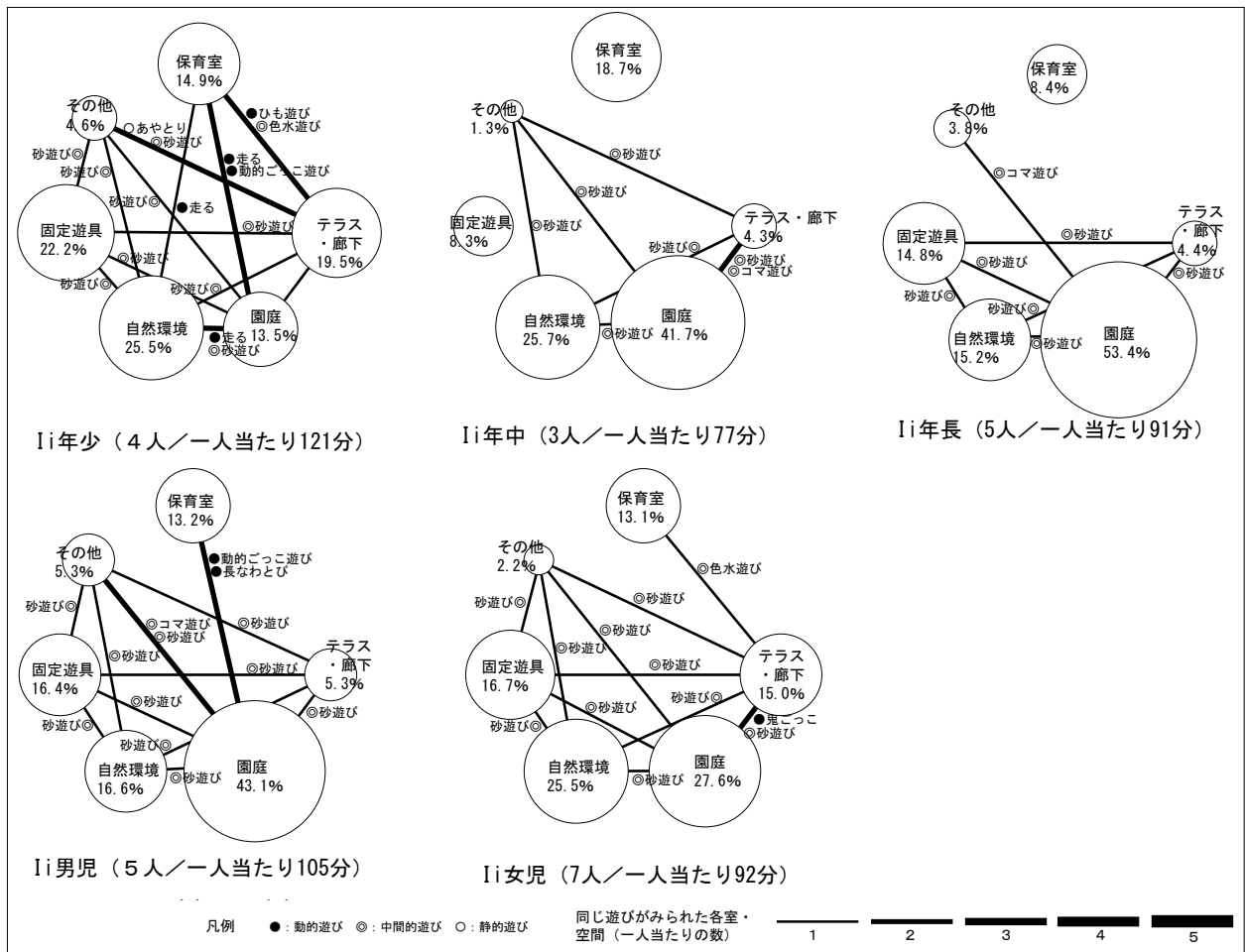


図4.7 Iiにおける学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び

3) Ib 幼稚園

表 4.5 は Ib における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

固定遊具、じゃれ、コマ遊び、なわとびなどが主な遊びである。固定遊具では 17 分中 10 分をアスレチック遊具が占めている。コマ遊びは保育室内のみで行われていることが他園と異なっている点である。

□中間的遊び

主な遊びは、砂遊び、ブロック遊び、カード遊びなどが挙げられる。砂遊びは自然環境を中心に園庭、固定遊具、その他でみられ、その大半が前庭、砂場、樹木、水道などの特徴的な環境要素で観察されている。ブロック遊びは保育室では絨毯（写真 4.15）、園庭では発泡スチロールの大きなブロックをスペースの広さを活かして遊んでいる。

□静的遊び

話、見る、ままごと、お絵かき、パソコンなどが観察されている。ままごと（図 4.8）は保育室を中心にテラス・廊下でも観察されているが、これは年少保育室の廊下が保育室と一体的になっているためである（写真 4.16・4.17）。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

別棟になっている年少保育室には前庭と園舎裏側の裏庭があり、年少男児は前庭や裏庭にある樹木から落ちた木の実を拾っている姿がみられた。また砂遊びは前庭（写真 4.18）にあるすべり台で発生し、園舎との境界であるテラス前や前庭で拾った木の実を使った砂遊びを展開している（図 4.9）。

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.10）

年少は、保育室 37.5%、テラス・廊下 4.5%、園庭 31.3%、自然環境 5.4%、固定遊具 17.9%、その他 3.6% である。複数の場所でみられる遊びは、乗り物遊び（テラス・廊下・自然環境）、砂遊び（園庭・自然環境・固定遊具・その他）、木の実拾い（園庭・自然環境・その他）、ままごと（保育室・テラス・廊下）である。

年中は、保育室 55.9%、テラス・廊下 2.4%、園庭 11.8%、自



写真 4.15 遊びが行われる絨毯

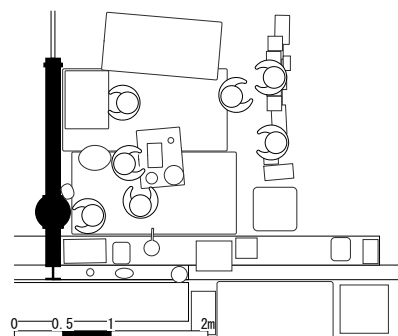


図 4.8 年少保育室のままごと風景



写真 4.16 保育室と一体になった廊下



写真 4.17 行き来が容易な年少保育室



写真 4.18 砂遊びが行われている前庭



写真 4.19 園外の畑



写真 4.20 クラスで飼育しているウサギ



写真 4.21 砂場



写真 4.22 土手と階段

4) Ka 幼稚園

表 4.6 は Ka における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

主に観察された遊びは、固定遊具、じゃれ、コマ遊び、動的ごっこ遊び、探検、踊り、長なわとびなどである。固定遊具のうち 61 分中 29 分がタイヤブランコである。園庭で行われている遊びが多いが、探検はそのほとんどが園外の畑（写真 4.19）で行われている。

□中間的遊び

砂遊び、ブロック遊び、紙飛行機遊び、動物と触れ合う遊び（写真 4.20）などが観察されている。砂遊びは砂場（写真 4.21）、土手（写真 4.22）、屋外のテーブル（写真 4.23）など様々な場所で行われている。紙飛行機は擁壁の上部（写真 4.24）から園庭（写真 4.25）に向かって飛ばしているため、擁壁の滞在がみられる。

□静的遊び

話、工作、見るなどがみられる。特に工作は大半が屋外工作コーナー（写真 4.26）で行われている。この場所は園長が長時間張り付いて竹工作を園児たちにつくっている場所であり、園長がいない時間帯は、子どもたちが竹や段ボール等を使った工作をしている。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

タイヤブランコの滞在時間が長い園児は、低学年の園児にブランコをこいであげたり、タイヤに乗ってぶらぶらするなどそこを居場所としている（図 4.11）。

敷地の端にあり階段そばの土手では、スコップで掘る行為が行われている。

屋外工作コーナーは、竹を使った剣づくりのほか、ピョンピョンがえるを段ボールで製作している。この工作物は他の場所で試して遊んでおり、高低差がある擁壁が選択されている（図 4.12）。

紙飛行機は、保育室外のテラスで紙飛行機を制作し、その後擁壁上部と園庭を行き来している（図 4.13）。この園の敷地の高低差が遊び行為を誘発していると解釈できる。

踊りは、1 人の園児でみられたが、まず教員を含めた複数人で音楽に合わせて踊る行為がきっかけとなっている（図 4.14）。そこから手に棒をもち、砂場から様々な場所に移動して踊っている姿がみ

られる。その中で、長なわとびをしている集団に興味をもち、短時間ではあるが長なわとびに参加している。このように Ka では、同じ場所に長時間張り付いている遊び、ある範囲を行き来する遊び、様々な場所を転々とする遊びが混在している。

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.15）

年少は、保育室 26.3%、園庭 28.9%、その他 32.0%などの滞在割合が高い。年少保育室は園庭と同レベルにあり、園庭より 4 m 上方にある他学年保育室よりも保育室の滞在割合が高くなっている（年少 26.3%、年中 1.9%、年長 3.5%）。複数の場所でみられる遊びは砂遊び（園庭・自然環境・その他）、鬼ごっこ（園庭・固定遊具・その他）である。

年中は、園庭 17.7%、自然環境 22.6%、その他 41.3%であり、屋内・半屋外の滞在割合が低い。他学年よりもその他の滞在割合が高いのは、探検（園外の畑）、紙飛行機（擁壁）、工作（屋外工作コーナー）などの園固有の特徴的な環境要素が影響している。複数の場所でみられる遊びは、紙飛行機（保育室・テラス・廊下・園庭・その他（擁壁））、砂遊び（園庭・自然環境・固定遊具・その他）、動物（自然環境・その他）、鬼ごっこ（園庭・固定遊具）である。

年長は、園庭 35.3%、自然環境 14.7%、固定遊具 20.6%、その他 24.1%の滞在割合である。複数の場所でみられる遊びは、踊り（園庭・自然環境）、動物（自然環境・その他）、砂遊び（自然環境・その他）である。

□性別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.15）

男児は、保育室 13.5%、園庭 12.9%、自然環境 16.5%、その他 44.2%の滞在割合である。複数の場所でみられた遊びは、紙飛行機、砂遊び、鬼ごっこなどである。

女児は、園庭 35.2%、自然環境 11.8%、固定遊具 14.5%、その他 26.6%の滞在割合である。複数の場所でみられた遊びは、砂遊び、鬼ごっこ、動物、踊りなどである。

以上、女児は園庭・固定遊具、男児はその他の滞在割合が高く、学年や性別により遊びの選択場所が異なっている。Ka 幼稚園はその他の滞在割合が他の園よりも高いが、このことは園の特徴的な環境要素の魅力が表出した結果であると推測できる。



写真 4.23 屋外のテーブル



写真 4.24 擁壁の上部（園舎周り）



写真 4.25 グラウンド（園庭）と擁壁



写真 4.26 屋外工作コーナー



写真 4.27 円形の穴（年少保育室）



写真 4.28 段ボール製の拠点



写真 4.29 裏の林に向かう途中に平均台



写真 4.30 探検が行われる裏の林

5) Ke 幼稚園

表 4.7 は Ke における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

主に観察された遊びは、固定遊具、じゃれ、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、探検、ちゃんばら、玉転がしなどである。鬼ごっこは園庭・自然環境を中心に様々な場所で行われており、裏の林でも観察されている。なお、探検は裏の林でのみ観察されている。ちゃんばらは保育室でみられるが、円形の穴（写真 4.27）や段ボール製の拠点（写真 4.28）など保育室空間とは切り替えられた領域でも発生している。

□中間的遊び

砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、楽器遊び、氷集めなどが観察されている。砂遊びは砂場では観察されず、園舎裏の通り道の砂利を集めている。玩具遊びは円形の穴のくぼみを利用したり、室内すべり台に玩具を滑らすなど、様々な場所に働きかけて遊んでいる。ブロック遊びは保育室が中心となっているが、ごく短時間裏の林に設置してあるブロックを使用している姿がみられた。楽器遊びは保育室内の楽器コーナーで行われており、トライアングルを円形の穴や室内すべり台で演奏する姿もあった。

□静的遊び

話、工作、見る、ままごと、お絵かきなどが挙げられる。工作は 17 分中 15 分が年少保育室内の段ボール製の拠点で行われている。ままごとは保育室とその他でみられるが、その他は保育室外に設けられたままごとコーナーである。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

円形の穴では玩具箱に入っている玩具を全て出すと玩具コーナーに様変わりする。観察した年少男児は円形の穴でロボットの玩具で遊んだ後、そこにあったプラスチック製の刀を使用してちゃんばら遊びを展開している。その後は円形の穴や保育室を動き回りながら、ロボット玩具とちゃんばらを繰り返している（図 4.16）。

図 4.17 は、年少女児（写真 4.29）の一連の遊びの流れである。鬼ごっこは様々な場所で行われているが、屋内からテラス、屋外に出るまで続いていることが分かる。裏の林（写真 4.30）では、林

部分や裏道、階段部分など様々な場所を使って探検遊びをしている。

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.18）

年少は、保育室 52.1%、テラス・廊下 3.9%、園庭 8.8%、自然環境 13.3%、固定遊具 16.4%、その他 5.5%である。複数の場所で見られた遊びは、鬼ごっこ（保育室・テラス・廊下・園庭・自然環境・その他）、玩具遊び（保育室・その他）である。

年中は、保育室 37.0%、テラス・廊下 1.9%、園庭 35.8%、固定遊具 10.5%、その他 14.8%である。複数の場所で見られた遊びは、氷集め（保育室・テラス・廊下・その他）で、屋外の水たまりでできた氷を室内まで持ち運んでいる。

年長は、保育室 67.6%、テラス・廊下 9.1%、園庭 10.8%、固定遊具 13.5%である。複数の場所で見られた遊びは観察されなかった。

以上、年少児は保育室が約半分を占めるが、比較的様々な場所で滞在している。なお、自然環境の滞在が観察されたのは年少児のみであった。年中では保育室の滞在割合が少なくなり、園庭やその他が高くなっていく。年長は自由保育に割ける時間が少ないためか、保育室の滞在割合が高くなっている。

□性別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.18）

男児は、保育室 57.7%、テラス・廊下 4.5%、園庭 24.5%、自然環境 5.6%、固定遊具 6.3%、その他 1.4%である。複数の場所で見られた遊びは、年少と同様に鬼ごっこ、玩具遊びである。

女児は、保育室 37.9%、テラス・廊下 2.5%、園庭 8.6%、自然環境 11.5%、固定遊具 23.9%、その他 15.6%である。複数の場所で見られた遊びは、氷集め、ままごとである。

以上、男児は保育室と園庭の滞在割合が高く、女児では自然環境、固定遊具、その他の割合が高くなっている。

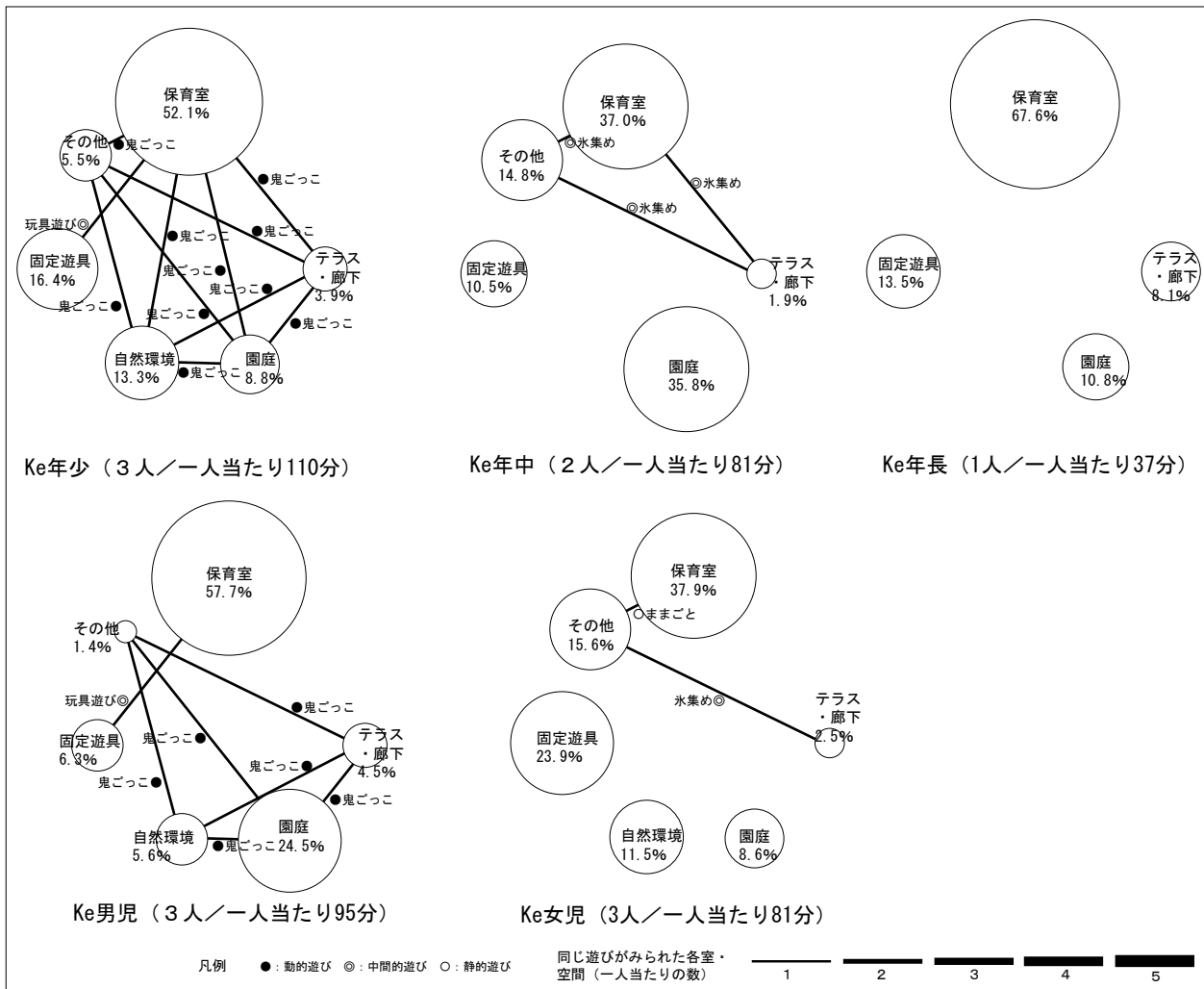


図 4.18 Keにおける学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び



写真 4.31 二段ベッドのようなキバ



写真 4.32 サッカーコーナー



写真 4.33 楽器演奏をしているベンチ



写真 4.34 園庭に設けられた釜

6) To 幼稚園

表 4.8 は To における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

主に観察された遊びは、固定遊具、じゃれ、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、乗り物遊び、水たまりに入るなどである。固定遊具は全園児でみられるが、キバ(写真 4.31) で行為が見られたのはキバが保育室内に設置されている年少、年中のみである。鬼ごっこは遊戯室、園庭を中心に行われており、遊びの中で固定遊具も併用している。様々な場所に働きかけている遊びは、動のごっこ遊び、乗り物遊びなども挙げられる。園庭のボール遊びはゴールのあるサッカーコーナー(写真 4.32)で行われている。

□中間的遊び

玩具遊び、楽器遊び、動物などが主に観察された遊びである。観察された時間はいずれも少ないが、特徴的な遊びとして、玩具をキバに持ち運んで遊ぶ、屋外のベンチを楽器コーナー(写真 4.33)とし教員と一緒に演奏するなどが挙げられる。

□静的遊び

主に観察された遊びは、話、お絵かき、絵本読み、あやとり、折り紙、料理などである。お絵かきは年長女兒のみで見られ、テーブルを使用する他、ベンチや寝転んで遊んでいる。静的遊びは保育室が基本となるが、料理は園庭に設けられた釜周辺を使用している。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

キバは年少保育室と年中保育室の壁際に設置されており、上部に空けられた穴により室間を行き来する姿が見られる(図 4.19)。その一連の遊びでは、ままごと、動のごっこ遊び、固定遊具、玩具遊びなどが展開されている。

園庭には釜(写真 4.34)が設置されており、畑で大根を掘り、取れた野菜を料理する姿がみられる(図 4.20)。また、にわとり小屋では鶏に餌をあげている教員の姿を見て、一連の遊びが終わってから、料理で使わなかった大根の切れ端を鶏にあげるなど、「見る」行為から時間が経過した後に餌やり行為がみられる。これは他の行為でもみられ、ウサギを見た直後に、ウサギの真似をしてピョンピョン跳ね、その後餌やりをする姿がみられた。さらに 10 分ほど経つ

てからピョンピョン跳ねる行為を別の場所で行っている。そのため、行為が発生した要因を明らかにするためには、一連の遊びを継続して観察する重要性が確認できた。

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.21）

年少は、保育室 22.4%、遊戯室 13.3%、テラス・廊下 5.1%、園庭 29.6%、自然環境 14.3%、固定遊具 13.3%、その他 2.0%である。遊戯室の滞在割合が他学年よりも高く、鬼ごっこや飼育されているハムスターと触れ合うなどの行為がみられる。なお、自然環境（飼育小屋）の滞在がみられたのは年少のみである。

年中は、保育室 17.1%、遊戯室 1.4%、テラス・廊下 3.6%、園庭 44.3%、固定遊具 25.7%、その他 7.9%である。複数の場所で活動がみられる遊びは、動のごっこ遊び（保育室・園庭・固定遊具）、鬼ごっこ（園庭・固定遊具・その他）、ボール遊び（保育室・園庭・固定遊具）などが挙げられる。その他の割合が高いのは、屋外のベンチで楽器演奏が行われている姿を周囲から見ていることが起因している。

年長は、保育室 70.2%、テラス・廊下 4.1%、園庭 0.8%、固定遊具 16.5%、その他 8.3%である。保育室では 45 分観察されたお絵かきを中心に静的遊びがみられる。動のごっこ遊び、乗り物遊びなどは保育室および園庭からテラス・廊下（写真 4.35）まで滞在場所が広がっている。

以上、年少はテラス・廊下、その他が若干少ないものの、保育室や園庭を中心に様々な場所で滞在している。年中は園庭や固定遊具の滞在割合が高い。年長は保育室の滞在割合が他よりも高く、固定遊具やその他の滞在もある。

□性別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.21）

男児は上述した年中男児のみであるので割愛する。女兒の滞在割合が男児よりも高いものは、保育室、遊戯室、自然環境などが挙げられる。保育室は年長、それ以外は年少の滞在割合が影響している。



写真 4.35 くつろぐこともできるテラス

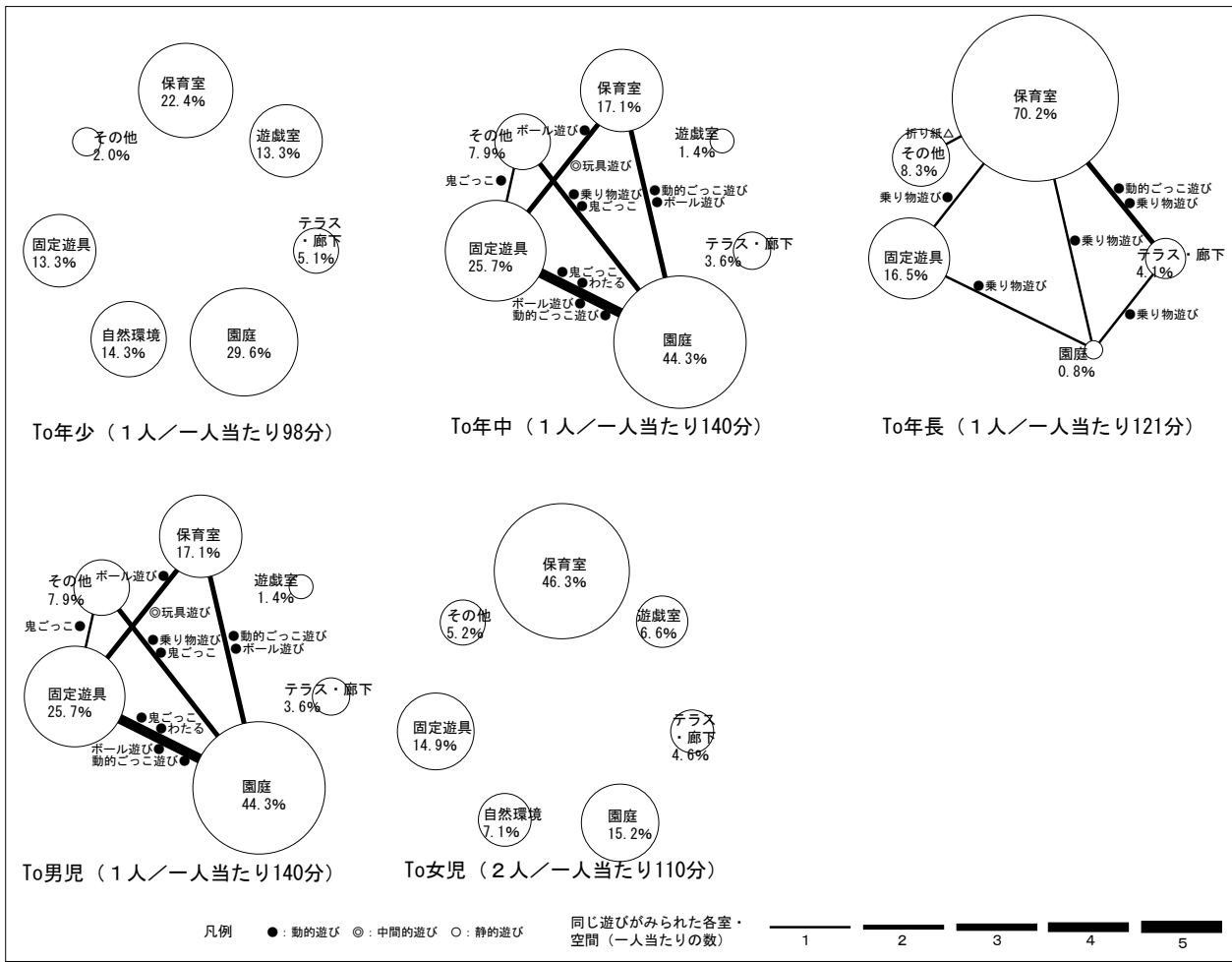


図 4.21 To における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び



写真 4.36 分棟の保育室・遊戯室とテラス



写真 4.37 ままごとコーナー

7) Yu 幼稚園

表 4.9 は Yu における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わりを示したものである。

□動的遊び

主に観察された遊びは、固定遊具、じゃれ、動的ごっこ遊び、鬼ごっこなどである。固定遊具以外は保育室、遊戯室、テラス・廊下で行われている。分棟の保育室・遊戯室がウッドデッキテラスでつながれており（写真 4.36）、遊戯室の滞在割合が高いことが特徴である。

□中間的遊び

楽器遊び、カード遊びなどがみられる。楽器遊びはハーモニカを持ち運び保育室や遊戯室で行われている。

□静的遊び

話、工作、見る、ままごと、絵本読みなどが観察されている。ままごとは大半が保育室内のままごとコーナー（写真 4.37）で行われている。絵本読みもままごとコーナーの滞在割合が高いが、持ち運んでウッドデッキテラスで滞在していることもある。

□特徴的な物的環境要素で観察された遊びの実態

保育室と遊戯室はウッドデッキテラスでつながれており、連続した動的遊びの場となっている（写真 4.38・4.39）。観察した年中男児は、鬼ごっこで様々な場所を走り回り、年少保育室まで入り込んでいる。また、鬼ごっこを中心に様々な遊びをしながら固定遊具で滞在するなど、ウッドデッキテラスにある固定遊具が短時間滞在し、他の行為へと移り変わるきっかけとなっている（図 4.22）。

ままごとコーナーは、ままごとだけが行われるのではなく、途中でお絵かきをする園児がいたり、それを見ている園児などもいる。一通り落ち着くと、再度ままごとに戻っている（図 4.23）。



写真 4.38 花いちもんめ（遊戯室）



写真 4.39 電車ごっこ（テラス・廊下）

□学年別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.24）

年中は、保育室 72.3%、遊戯室 4.0%、テラス・廊下 19.8%、固定遊具 4.0%である。複数の場所で活動がみられる遊びは、鬼ごっこ（保育室・遊戯室・テラス・廊下）、登る（保育室・遊戯室）、ちゃんばら（保育室・テラス・廊下）、絵本読み（保育室・テラス・廊下）である。

年長は、保育室 71.3%、遊戯室 26.0%、テラス・廊下 1.5%、

固定遊具 1.1%である。複数の場所で活動がみられる遊びは、動的ごっこ遊び（保育室・遊戯室・テラス・廊下）、鬼ごっこ（保育室・遊戯室・テラス・廊下）、登る（保育室・遊戯室）、走る（保育室・遊戯室）、楽器遊び（保育室・遊戯室）である。

□性別にみた滞在場所と観察された遊び行為（図 4.24）

男児は、保育室 46.4%、遊戯室 7.1%、テラス・廊下 39.3%、固定遊具 7.1%である。複数の場所で活動がみられる遊びは、鬼ごっこ、ちゃんばらである。

女児は、保育室 77.7%、遊戯室 19.6%、テラス・廊下 1.7%、固定遊具 1.1%である。複数の場所で活動がみられる遊びは、鬼ごっこ、走る、楽器遊びである。

以上、保育室は年中男児の滞在割合が低く、テラス・廊下は年中男児の滞在割合が高く、遊戯室は年長女児の滞在割合が高くなっている。それぞれのテリトリーとして棲み分けていることが分かる。なお、年中の女児は大半の時間を保育室で過ごしている。

表 4.9 Yu における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり

遊びの種類	動的遊び														中間的遊び										静的遊び						合計(分)																				
	遊び行為	固定遊具	じゃれ	コマ遊び	動的ごっこ遊び	鬼ごっこ	ボール遊び	探検	踊り	長なわとび	ちゃんばら	走る	フラフープ	玉転がし	なわとび	ひも遊び	乗り物遊び	わたる	水たまりに入る	登る	砂遊び	玩具遊び	紙飛行機	フロッグ遊び	うた	楽器遊び	色水遊び	動物	カルタ	氷集め		木の突っこ	虫	話	工作	見る	ままごと	お絵かき	絵本読み	粘土	パズル	あやとり	折り紙	隠れる	料理	毛糸					
各室・空間	保育室	○		○	◎						○	・									○													○	◎													319			
	遊戯室	○		●	○																																													76	
	テラス・廊下	○		○	○																																														40
	園庭																																																		
	自然環境																																																		
	固定遊具	○																																																	
その他																																																			
合計(分)	10	27		68	45	1					6	5			3				2		4				5	20		17						69	8	40	68	44									442				
特徴的な環境要素	ままごとコーナー																																	◎	○													113			
	ウッドデッキテラス	○	○		○	○																																											45		
	合計(分)	6	7		11	8	1					2	1									3																											158		

凡例：一人当たりの延べ時間数
 ・：1分未満
 ○：5分未満
 ◎：10分未満
 ●：15分未満
 ■：15分以上

4.2.3 属性別にみた遊び行為と場所の特性

1) 園の空間的特徴と遊び行為の関わり

前節で分析した調査対象園が有する環境別にみた遊び行為の特徴、各園の特徴的な環境で発生した遊びの流れなどを鑑みると、表 4.10 に示した 5 つの特性（専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差）が遊びに影響していると思われる。ここではこの分類をもとに遊び行為と場所の特性について論じる。

まず、遊びと各室・空間の組み合わせが半数以上の園（7 園中 4 園以上）でみられた遊びを保育施設計画時に想定すべき基本的遊びと解釈し、基本的遊びとそれ以外の遊び（特徴的な遊び）に分けて論考することとした。ただし、場所的影響があまりないと思われる遊び（じゃれ、話、見る）については分析から外すこととした。

□基本的遊び（表 4.11）

動的遊びは固定遊具、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、走るの 5 項目、中間的遊びは砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、うた、楽器遊びの 5 項目、静的遊びは工作、ままごと、お絵かき、絵本読みの 4 項目、計 14 項目の遊びを抽出した。

動的遊び：固定遊具（遊び）は固定遊具、ボール遊びは園庭が中心となっている。それ以外の遊びは園庭を中心としながら、保育室やテラス・廊下でもみられる。鬼ごっこはさらに固定遊具で滞在するなど行動範囲が広い遊びとなっている。

中間的遊び：砂遊び以外は保育室が中心となっている。玩具遊び 6 園、楽器遊び 5 園、ブロック遊び・うたが 4 園で観察されている。砂遊びは園庭やその場で活動しており、自然環境や固定遊具でもみられる。

静的遊び：いずれも保育室でみられる。絵本読みが 6 園、お絵かきが 5 園、工作とままごとが 4 園である。

□基本的遊びに関わる空間特性

表 4.12 は、基本的遊びのうち、遊びと各室・空間の組み合わせが 3 園以下であったものについて整理したものである。上記の基本的な組み合わせは最低限度用意すべきもので、遊びの魅力を高めるためには、それに加えて園特有の組み合わせが発生するような配慮が求められる。特に中間的遊びの大半と静的遊びは保育室が中心と

なっているが、保育室でそれらの遊びが行うことができれば十分ということではないことに留意すべきである。また、この表からは各園の遊びの特徴と空間的特徴を読み取ることができる。例えば、Yuでは動的ごっこ遊びが遊戯室とテラス・廊下で行われているが、これは遊戯室の扉が開け放され、ウッドデッキテラスと空間的に連続していることに起因している。砂遊びが盛んなIiではテラス・廊下の下駄箱に土団子を隠すだけでなく、保育室に持ち込む姿もある。

□その他の遊び（表 4.13）

園が保有する環境要素と滞在がみられた各室・空間の関係について、前述した専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差との関係についてみることにする。動的遊びは広いスペースが遊びに関わっている。また、探検・わたるがみられる場所には高低差・段差が存在している。中間的遊びでは、広さのあるスペースに加えて、専用コーナーや高低差・段差が存在している。例えば、紙飛行機は高低差・段差、色水遊びでは専用コーナーとして機能し、他の遊びが入ってこないことなどが挙げられる。静的遊びはテーブル・イスや狭いスペースの存在が遊びを発生させていることが読み取れる。

表 4.10 場所と行為の関係からみた空間の特性

場所×行為	空間の特徴	遊びが観察された具体的な場所	内容
単一目的な場所	専用コーナー	ままごとコーナー／パソコンコーナー／砂場／固定遊具／飼育小屋	環境設定時における場所と行為の関係が1対1のコーナー。
多目的な場所	テーブル・イス	テーブル／イス／ベンチ	道具・素材を他から持ち運ぶか教諭が設置する多目的な場所。遊びにより着座しない場合もある。
	狭いスペース	絨毯／制作した拠点／段ボール製の拠点	少人数利用を想定した2畳以下のスペース。園児が製作に関わる場合もある。
	広いスペース	保育室／ウッドデッキテラス／前庭／グラウンド	家具等の障害物がなく、多人数で動きのある遊びが可能な広いスペース。
	高低差・段差	円形の穴／キバ／擁壁／階段／裏山	高低差・段差のある場所で、起伏のある自然環境も含む。

表 4.11 4園以上で観察された遊びと各室・空間の組み合わせ（基本的遊び）

各室・空間	動的遊び				中間的遊び				静的遊び					
	固定遊具	動的ごっこ遊び	鬼ごっこ	ボール遊び	走る	砂遊び	玩具遊び	ブロック遊び	うた	楽器遊び	工作	ままごと	お絵かき	絵本読み
保育室		◎	◎		◎		●	○	○	◎	○	○	◎	●
遊戯室														
テラス・廊下			◎		○									
園庭		●	◎	◎	◎	◎								
自然環境						○								
固定遊具	■		◎			○								
その他						◎								

凡例 観察された園数 ○ : 4園 ◎ : 5園 ● : 6園 ■ : 全園

表 4.12 基本的遊びのうち3園以下であった遊びと各室・空間の組み合わせ

各室・空間	動的遊び				中間的遊び				静的遊び					
	固定遊具	動的ごっこ遊び	鬼ごっこ	ボール遊び	走る	砂遊び	玩具遊び	ブロック遊び	うた	楽器遊び	工作	ままごと	お絵かき	絵本読み
保育室				Ay To		li								
遊戯室		Yu	Ay To Yu	Ay To Yu			Ay		Yu		Ay			
テラス・廊下		To Yu		Yu		li Ke	li Ke			Ay	li lb		Yu	
園庭						li	li	lb	Ay			li		
自然環境			li Ke	Ay li			Ke							
固定遊具		To		To		Ke To			Ke	Ka	To			
その他	li	Ka	Ka Ke To	Ay Ka					To	Ay Ka	Ay Ke		lb	
専用コーナー	○			○		○		○	○	○	○		○	
テーブル・イス						○				○				
狭いスペース							○	○			○	○		
広いスペース		○	○	○		○	○	○			○			
高低差・段差			○		○	○	○		○					

表 4.13 3園以下で観察された遊びと各室・空間の組み合わせ（その他の遊び）

各室・空間	動的遊び										中間的遊び						静的遊び										
	コマ遊び	探検	踊り	長なわとび	ちゃんばら	フラフープ	玉転がし	なわとび	ひも遊び	乗り物遊び	わたる	水たまりに入る	登る	紙飛行機	色水遊び	動物	カード遊び	氷集め	木の葉拾い	虫	粘土	パズル	あやとり	折り紙	隠れる	料理	毛糸
保育室	lb		Ay li lb	li	Ay Ke Yu	Ay	Ke	Ay To	Ay li	To	Ay	To Yu	Ka	li	Ay Ka	lb Yu	Ke		Ka Ke	Ay	lb	Ay li To	Ay Ke To	Ay			Ay li
遊戯室						Ay		Yu				To Yu			To							Ay		Ay			
テラス・廊下	li				Yu	Ay			Ay li	lb To			Ka	li	Ka		Ke	lb				Ay li					li
園庭	li Ka		Ay Ka Ke	li Ka	Ay			Ay li lb		Ka To	li To	Ay Ke To	Ka					lb Ke							Ke	To	
自然環境		li Ke	Ka		Ay lb					lb	Ke	Ay li Ke			li Ka To			lb							Ke		
固定遊具	li		Ay		Ay			lb	To	To															Ka		
その他	li	Ka				Ay			Ay To	Ay Ka	Ka	Ay Ka To	Ka	li	Ka		Ke	lb	Ay				li	To			
観察された園数	2	3	5	2	4	1	1	5	2	4	5	4	6	1	1	4	2	1	2	3	1	1	3	3	3	1	2
専用コーナー															○	○				○		○					
テーブル・イス												○									○		○			○	○
狭いスペース																						○		○			
広いスペース	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	○				○	○							
高低差・段差		○											○		○												

2) 遊びの流れからみた環境要素の配置計画

□遊びの切り替わりを想定した空間的余地(図4.25)

Ay年長女兒は、製作した拠点をちょっと覗く行為から、鬼ごっこをした後、ままごとに加わっている(図4.2)。また、様々なところで一人で踊っているKa年長女兒は、長なわとびが行われているジャングルジム横に通りかかり、長なわとびを見てから、踊りに戻り、再度長なわとびを見てから、少しだけ参加している(図4.14)。また、To年少女兒は、飼育小屋のウサギを見てから、ウサギの真似をしてピョンピョン飛び跳ねて、餌をあげる姿がみられた(図4.20)。すなわち、ある行為が行われる場合は、いきなり行為が変わるのではなく、他のことをするなど、ひと呼吸おいてから変化しており、遊びと遊びが切り替わる際の身を寄せる場所や他事ができる空間的余地を残す必要があると思われる。

□拠点とその周りの環境への働きかけ(図4.26)

Ay年長女兒は、ままごとの流れで、ピクニックと称して他の場所に出かけていくこととなり、遊戯室や保育室にでかけている。日常的に滞在している園舎周りに拠点があることで、拠点で遊ぶ行為、拠点から出かけていく行為が発生している(図4.2)。Ii年少男兒は、土手のくぼみを中心に土団子づくりを行っている。その際、ジャングルジムや前庭、水道など他の場所にも働きかけ、保育室前のテラスにある自分の靴箱につくった団子を隠している(図4.6)。Ka年中男兒は、屋外工作コーナーで工作(ピョンピョンガエル)をし、擁壁の段差を活かしてピョンピョンガエルを試している(図4.12)。Ke年少男兒は、円形の穴に設置された玩具の中から、ロボット玩具とプラスチックの刀を手にとって遊んでいる。ロボット玩具は円形の穴の中で遊んでいるが、刀はちゃんばらをするために保育室内を動き回っている。遊び素材が集約してある拠点と周囲の広い場所の存在が行動の鍵となっている(図4.16)。To年中男兒は、年少の保育室まで入り込んでいる。これは年少・年中保育室の両者にキバがあり、上部の壁に穴が開けられていることで、動のごっこ遊びや玩具遊びなどを隣の保育室で行っている(図4.19)。以上、拠点をつくるだけではなく、その周りに働きかけたい環境が必要で、広いスペース・高低差・段差などで拠点を取り巻く環境を変化させること、複数の環境要素の配置、通り抜けたくなるような空間的仕掛けなどの工夫が必要である。

□環境要素の近接配置による領域の拡がり（図 4.27）

Ay 年中男児は、遊具庭の様々な場所で砂遊びを行っている。砂場よりもむしろ砂場のすぐ外側や園庭、登り棒などで砂遊びをしており、様々な環境要素が密集した環境が、場所の移動を容易にしていると解釈できる（図 4.4）。Ay 年中男児は、アスレチック遊具で遊んだ後、保育室に戻る際に、少し遠回りをして様々な環境要素に働きかけながら移動している（図 4.3）。Ib 年少女児は、前庭の樹木で木の実拾いをしていたが、一緒に遊んでいた仲間が裏庭に木の実拾いにいったので一緒について行き、木の実を収集している。このように木の実拾いができる場所が一つではなく、複数あることで遊びの領域が広がっている。また、その後の砂遊びにも木の実を使用している（図 4.9）。以上、環境要素の近接配置により、遊び領域の拡がり、移動しながらの立ち寄りといった行為が発生している。

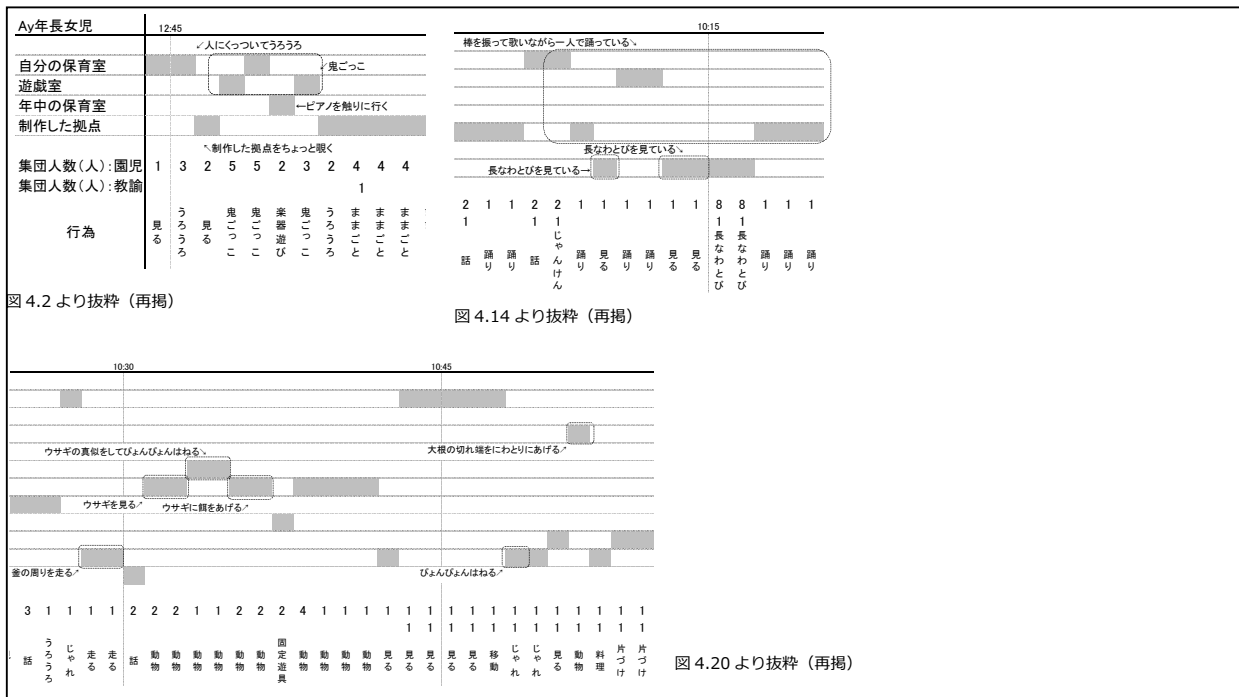


図 4.25 遊びの切り替わりに関わる活動実態（抜粋）

3) 複数の各室・空間で観察された遊びの特徴

表 4.14 は、異なった空間的特徴を持つ各園において、学年・性別にみた複数の各室・空間で行われる遊びのタイプを分類してみたものである。

□各室・空間完結型 (図 4.28)

複数の各室・空間で行われる遊びが存在しないかごく少ないタイプである。保育室で多くの時間を過ごしているタイプ (Ib 年長、Ke 年長、Ib 男児)、屋外で過ごしているタイプ (Ka 年長)、バランスよく様々な各室・空間で過ごしているタイプ (Ke 年中、To 年少、Ke 女児、To 女児) などが挙げられる。自由保育の時間が一時間未満である Ib 年長、Ka 年長、Ke 年長、Ib 男児のうち3つは保育室の滞在割合が高くなっている。Ka 年長は時間は短いながらも屋外で過ごしているが、逆に屋内・半屋外の滞在割合が低いことがわかる。

表 4.14 学年・性別にみた複数の各室・空間で行われる遊びのタイプ分類

	遊びと滞在場所の型	学年							性別			
		Ib年中	Ib年長	Ka年長	Ke年中	Ke年長	To年少	Ib男児	Ke女児	To女児		
動き	少ない	各室・空間完結型							Ib男児 Ke女児 To女児			
	↑	屋内・半屋外完結型							Yu男児 Yu女児			
	↓	保育室中心型							Ay女児 Ib女児 Ke男児			
	多い	屋外連携型							Ii女児 Ka女児			
		Ay年中	Ay年長	Ii年少	Ib年少	Ka年中	Ke年少	To年中	Ay男児	Ii男児	Ka男児	To男児

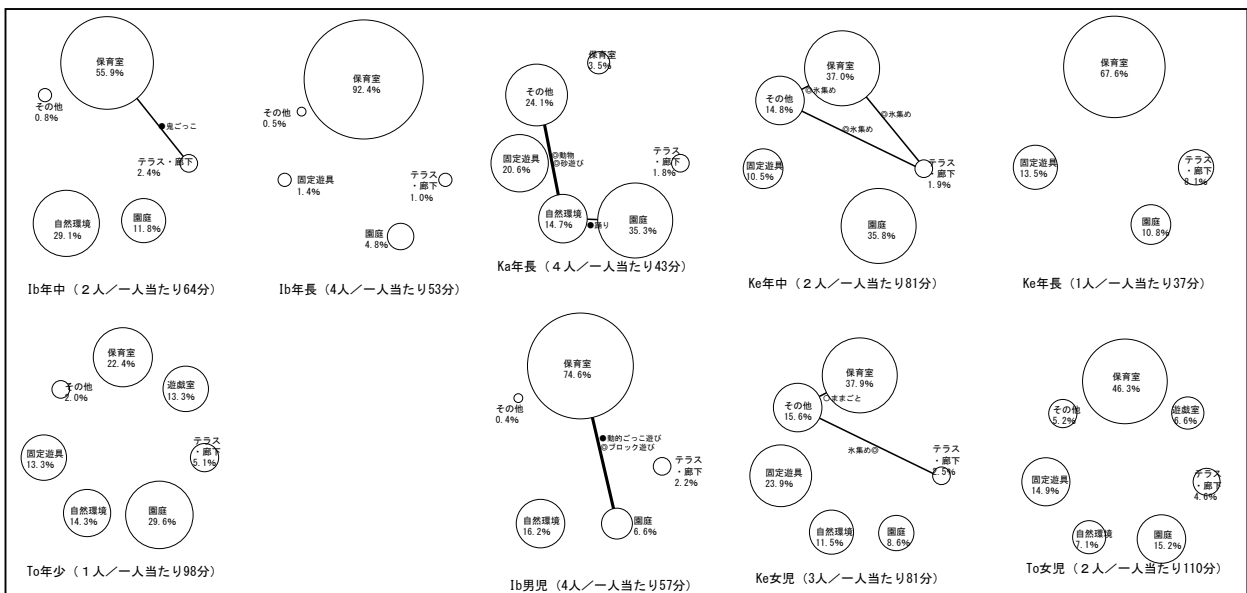


図 4.28 各室・空間完結型の事例

□屋内・半屋外完結型 (図 4.29)

いずれも保育室と遊戯室が分棟でウッドデッキテラスでつながれている Yu の園児のみである。静的遊びから動的遊びまで屋内と半屋外で行うことができるため、比較的狭い園庭に出る必要がないと判断している可能性もある。複数の各室・空間を利用している遊びは動的ごっこ遊び、鬼ごっこなどが挙げられる。

□保育室中心型 (図 4.30)

保育室の滞在割合が高いものの、園庭や固定遊具、自然環境などでも複数の各室・空間を利用している遊びがみられるタイプ。遊びは工作、砂遊び、動的ごっこ遊び、ままごとなど属性により遊びは異なっている。

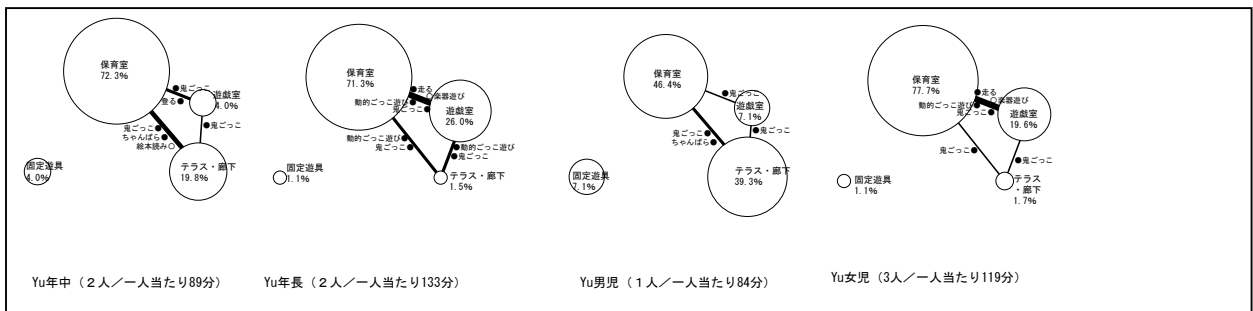


図 4.29 屋内・半屋外完結型の事例

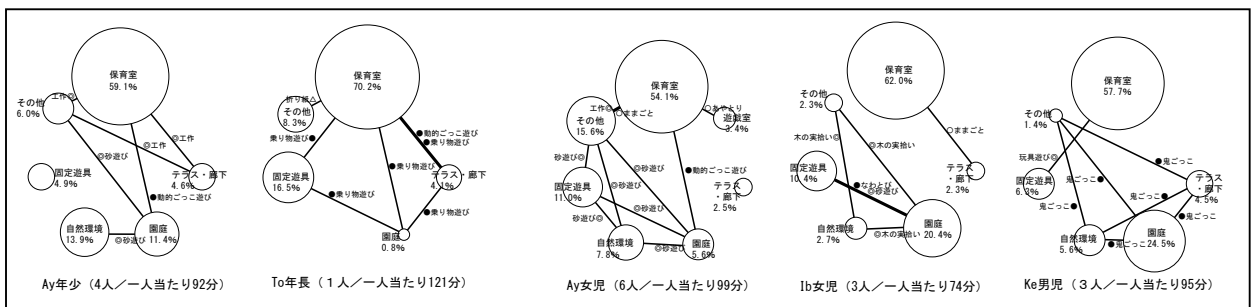


図 4.30 保育室中心型の事例

□屋外連携型（図 4.31）

保育室の滞在割合が比較的小さく、園庭や自然環境、その他などで滞在している。複数の各室・空間を利用している遊びは砂遊びが中心となっている。性別ではいずれも女兒であることも特徴である。

□バランス型（図 4.32）

多少の増減はあるものの、様々な各室・空間に滞在し複数の各室・空間利用も活発なタイプ。砂遊びや動的遊びがみられる。性別ではいずれも男児となっていることも特徴である。

以上、大まかな傾向をみると、各室・空間完結型は比較的高学年の園児が該当し、バランス型は低学年の園児が該当している。また、屋外連携型は女兒、バランス型は男児と棲み分けがされている。

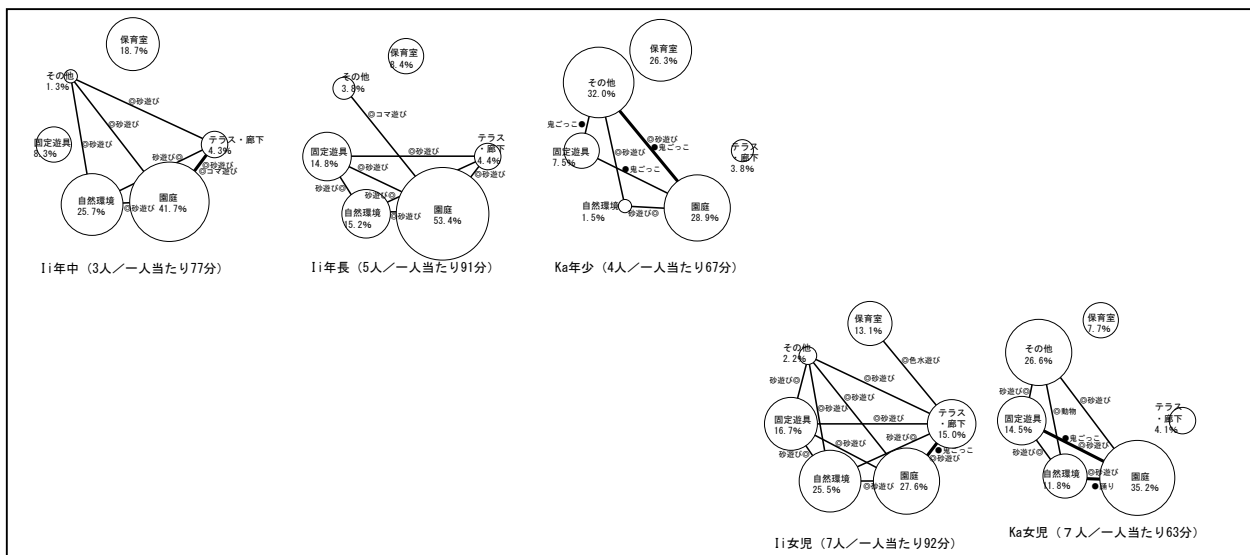


図 4.31 屋外連携型の事例

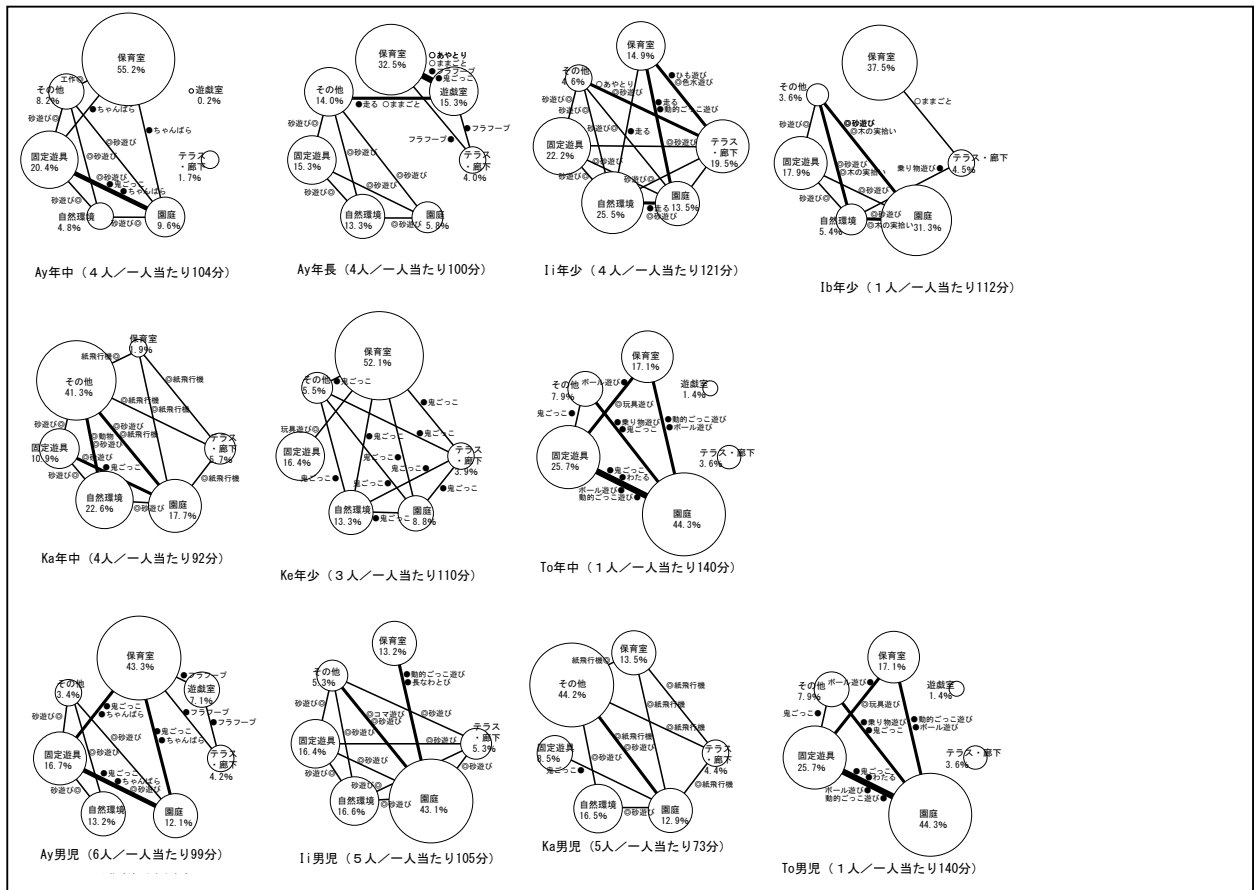


図 4.32 バランス型の事例

4.3 遊び行為に関わる各室・空間と特徴的な環境要素

以上のとおり、園児は遊びの特徴に応じて様々な場所で滞在し、遊びを展開している。この節では、園児一人ひとりの遊びと各園の特徴的な環境要素が関わっている遊びを比較し、各園の特徴的な環境要素が遊びの発生に関与していると思われた、動的遊び：動的ごっこ遊び、鬼ごっこ、探検、踊り、中間的遊び：砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、静的遊び：工作、ままごとの9種類を取り上げて論じる。

1) 動的遊び

□動的ごっこ遊び（表 4.15）

集団でその場所に留まって遊びを行うため、広さがある場所が選択されている。テラス・廊下では To・Yu のウッドデッキテラスのように幅員が広い園でのみ見られている。それ以外は、保育室、遊戯室、園庭が活動場所の中心となっているが、Ka 木製デッキ、擁壁、To キバなどで短時間滞在している。特に Ka の木製デッキは動的ごっこ遊びの集合場所として機能していた。

表 4.15 園児別にみた動的ごっこ遊びで滞在している場所

園	延べ観察時間(分)	各室・空間					Ka Ka To To Yu					
		保育室	遊戯室	テラス・廊下	自然環境	固定遊具	その他	木製デッキ	擁壁	キバ	ウッドデッキテラス	ウッドデッキテラス
Ay	8	◎										
Ay	11			●								
Ii	18	■										
Ii	21			■								
Ii	4			○								
Ii	1			○								
Ib	7	○		◎								
Ka	21			■		○	○	○				
Ka	18			■								
Ke	10			●								
To	9	○	○		○				○			
To	3	○	○							○		
Yu	23	◎	■									
Yu	35	◎	○									○
Yu	10			●								●

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

□鬼ごっこ（表 4.16）

比較的短時間みられるものから長時間に至るものまで混在している。短時間みられる事例は、途中参加や途中で脱退していることが要因である。走り回る線的な動線となっており、集団としてある程度の広さが必要な動的ごっこ遊びとは異なり、様々な場所を動き回っている。特に固定遊具の短時間滞在がみられる点が特徴で、鬼ごっこの中で高低差のある環境要素が選択されている。延べ観察時間が10分以上の各室・空間はテラス・廊下（Ii）、園庭（Ka）、遊戯室（To）、園庭（To）、保育室（Yu）などであり、幅員の広いIiのテラス・廊下を含め、広いスペースが選択されている。動的ごっこ遊びと同様、Kaの木製デッキ、Yuウッドデッキテラスなどで滞在している。また、裏山（Ii）や裏の林（Ke）など自然環境で行動がみられることも特徴である。Yuは保育室、遊戯室、テラス・廊下を連続的に移動しながら遊びを展開している。

表 4.16 園児別にみた鬼ごっこ遊びで滞在している場所

園	延べ観察時間(分)	各室・空間						各室・空間							
		保育室	遊戯室	テラス・廊下	園庭	自然環境	固定遊具	その他	Ay Ii	Ka	Ka	Ke	Ke	Ke	Yu
								トイレ前スペース	裏山	木製デッキ	擁壁	楽器コーナー	裏の林	アスレチック遊具	ウッドデッキテラス
Ay	3	○	○												
Ay	6	○	○	○											
Ay	1			○											
Ay	9			○			◎								
Ii	13	○	●				○								
Ii	2			○											
Ii	1			○											
Ii	7			◎	○	○			○						
Ib	5	○	○												
Ka	19			●	○	○			◎	○					
Ka	15			●	○										
Ke	4	○		○		○						○			
Ke	23		○	◎	●	○	○					●	○		
To	12		●												
To	23			■	○										
Yu	15	◎	○	◎											◎
Yu	18	●	○	○											○
Yu	12	◎	○	○											○

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

□探検（表 4.17）

自然環境を中心に行われることが特徴で、その他も園外の畑（Ka）であることから、自然環境を配置しないと発生しないことがわかる。Ii では裏山、Ke では裏の林など他者の目につきにくい園舎から遠方の場所であるが、場所の魅力により行動領域が広がっていることがわかる。

□踊り（表 4.18）

思いついたように短時間（1～2分）踊る園児が8人中6人と多く、場所も保育室と園庭で行われている。ただし、アスレチック遊具（Ay）の上部がフラットになっている箇所では集団で踊っている。また、Ka の園児は様々な場所に働きかけながら1人で踊っている。これは、一連の行為の前に教員手で音楽に合わせて複数人で踊っていた後に展開した行為で、そのことをきっかけに棒をもちながら踊っている。すなわち、集団で踊るための広さが必要な場合と、環境要素が近接配置されていることにより、転々と移動するタイプが存在する。

表 4.17 園児別にみた探検で滞在している場所

園	延べ観察時間（分）	各室・空間					裏山	園外の畑	裏の林
		保育室	遊戯室 テラス・廊下	園庭	自然環境	固定遊具 その他			
Ii	3				○		○		
Ii	5				◎		◎		
Ii	2				○		○		
Ka	32						●	●	●
Ke	22						■	■	■

凡例 ○ ～5分 ◎ ～10分 ● ～15分 ■ 15分以上

表 4.18 園児別にみた踊りで滞在している場所

園	延べ観察時間（分）	各室・空間					アスレチック遊具	砂場	飼育小屋
		保育室	遊戯室 テラス・廊下	園庭	自然環境	固定遊具 その他			
Ay	1	○							
Ay	1			○					
Ay	11					●		●	
Ii	2	○							
Ib	1	○							
Ib	1	○							
Ka	29					●		●	
Ke	1				○				

凡例 ○ ～5分 ◎ ～10分 ● ～15分 ■ 15分以上

2) 中間的遊び

□砂遊び (表 4.19)

自然環境のうち砂場 (Ay・Ib・Ka)、土手のくぼみ (Ii) を中心に遊びが発生している。ただし、砂場だけで砂遊びをしている園児は33人中4人と少なく、砂場のすぐ外 (Ay・Ka・To)、水道 (Ay・Ii・Ib・Ka) などまで遊びの領域が広がっている。さらに固定遊具、その他の場所も砂遊びで使用していることに留意が必要である。その他の場所では、階段 (Ay)、屋根付きベンチ (Ii)、屋外のテーブル (Ka)、裏の通り (Ke) などが挙げられ、基本的には砂場や土手のくぼみなどを中心に遊び、そこから遊びの領域が広がっているが、Ka 屋外のテーブルでは砂場から砂や鍋などの料理道具、さらには水道を行き来して砂遊びをするための素材・道具をそろえ、この場所が砂遊びの中心となっている園児もいる。このことは Ib も同様で、砂場ではなく前庭が砂遊びの中心となっている。すなわち、砂場等を設けるだけでは砂遊びのための場所としては不十分であり、砂遊びが可能となる様々な拠点を配置し、さらに遊びの領域を広げるように多様な環境要素を配置することが求められよう。

表 4.19 園児別にみた砂遊びで滞在している場所

園	延べ観察時間(分)	各室・空間																										
		保育室	遊戯室	テラス・廊下	園庭	自然環境	固定遊具	その他	Ay 砂場	Ay 水道	Ay 階段	Ii 土手のくぼみ	Ii 裏山	Ii 樹木	Ii 水道	Ib 屋根付きベンチ	Ib 前庭	Ib 砂場	Ib 樹木	Ib 水道	Ka 砂場	Ka 土手	Ka 砂場のすぐ外	Ka タイヤブランコ	Ka 屋外のテーブル	Ka 水道	Ke 裏の通り	To 砂場のすぐ外
Ay	1		○																									
Ay	1		○																									
Ay	12		◎		○	○			○	◎																		
Ay	30		●	●	○				●	◎	○																	
Ay	77		○	■	■	■			■	◎	○																	
Ay	15			■	■	■			■	◎	○																	
Ay	1								○																			
Ay	11								◎		○																	
Ay	21								■		○	○																
Ay	16								●		○	○																
Ii	47	○	●	◎	■	■			■	◎	●																	
Ii	30		◎	○	■	■			◎	●																		
Ii	19		○		■	■			◎	○	○																	
Ii	42		◎	●	■	■			◎	○	○																	
Ii	54			■	■	■			◎	○	○																	
Ii	33		◎		■	■			◎	○	○																	
Ii	20				■	■			◎	○	○																	
Ii	16				■	■			◎	○	○																	
Ii	39				■	■			◎	○	○																	
Ib	27			■	■	■														○	○							
Ib	36			■	■	■														○	○							
Ka	2																											
Ka	4																											
Ka	53				■	■					◎																	
Ka	27			●	○	◎	◎																					
Ka	3																											
Ka	12										●																	
Ka	9										◎	○																
Ka	21										■																	
Ka	52										■																	
Ke	1			○																								
Ke	11										●																	◎
To	2																											○

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

□玩具遊び (表 4.20)

玩具が設置されている保育室で行為がみられるが、Ii では1～2分と短時間ではあるもののテラス・廊下や園庭で行われている。延べ観察時間が52分と長いKe園児は、教諭が玩具箱をひっくり返して玩具コーナーとなったKe円形の穴から遊びが発生し、段ボール製の拠点や室内すべり台(Ke)に玩具を持ち運びながら保育室内で遊んでいる。Toでも保育室内のキバに玩具を持ち運んでいる姿がみられる。すなわち、玩具遊びにおいても玩具があるだけでは遊びが展開されず、周囲の特徴的な環境要素に働きかけている。

□ブロック遊び (表 4.21)

ブロック遊びは設置されている場所で行われており、玩具遊びとは異なり、複数の各室・空間を使用することはみられなかった。保育室では絨毯(Ib)(33分)やブロックコーナー(Ke)(37分)がある園で観察された時間が長くなっている。Ibは園庭にもブロックが設置されており、園庭の広さを利用して遊んでいる姿があった。

表 4.20 園児別にみた玩具遊びで滞在している場所

園	延べ観察時間(分)	各室・空間					
		保育室	遊戯室 テラス・廊下	園庭 自然環境	固定遊具 その他	楽器コーナー 円形の穴	段ボール製の拠点 室内すべり台 キバ ままごとコーナー
Ay	1	○					
Ay	1	○					
Ay	3	○					
Ay	4	○					
Ii	1		○				
Ii	2		○				
Ib	2	○					
Ke	13	◎			○		
Ke	52	■	○	○	●	○	◎
Ke	8	◎		○		○	
To	8	◎					
To	5	◎					
To	6	◎		○			○
Yu	1	○					
Yu	1	○					○
Yu	1	○					○
Yu	1	○					○

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

表 4.21 園児別にみたブロック遊びで滞在している場所

園	延べ観察時間(分)	各室・空間			裏の林 ブロックコーナー
		保育室	遊戯室 テラス・廊下	園庭 自然環境 固定遊具 その他	
Ay	5	◎			
Ay	1	○			
Ay	8	◎			
Ib	33	■			■
Ib	7		◎		
Ib	8		◎		
Ka	5	◎			
Ka	5	◎			
Ke	37	■			◎
Ke	1		○		○

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

3) 静的遊び

□工作 (表 4.22)

工作物をつくっている間は、他の場所に移動せず、テーブルにイス座 (Ay)、床 (Ii)、屋外の工作コーナー (Ka)、段ボール製の拠点 (Ke) などで滞在し制作することが基本となる。ただし、製作途中で玩具的に使用するため、トイレ前スペースなどに働きかける園児 (Ay)、紙バツタを段差で試すために擁壁に移動する園児 (Ka) などもみられる。移動せずに遊ぶためのスペースが必要というよりは、他の動線や動的な遊びに邪魔されない位置に工作が行われる拠点を設置することが肝要で、他の場所へのアクセスの良さも重要となる。

□ままごと (表 4.23)

ままごとの拠点は保育室とその他で観察されている。保育室はままごとがしやすいようにセッティングされている場合 (Ib) や、保育室内にままごとコーナーが設けられている場合がある。Ay の園舎すぐ外にあるクラス全員で制作した拠点はぬいぐるみ・人形などが置かれたままごと遊びの場所となっており、園児はこの場所を中心に保育室や遊戯室に出かけている。また Ke はままごとコーナーが保育室とは別に室として設置されている。

表 4.22 園児別にみた工作で滞在している場所

園	延べ観察時間 (分)	各室・空間			
		保育室 遊戯室 テラス・廊下	自然環境 固定遊具 その他	Ay トイレ前スペース	Ka Ka Ke 屋外工作コーナー 擁壁 段ボール製の拠点
Ay	81	■			
Ay	36	○		○	
Ay	36	○		◎	
Ay	18			○	
Ii	12	●			
Ii	5	◎			
Ka	64		○	■	◎
Ke	15	■			■
Ke	2	○			
Yu	8	◎			

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

表 4.23 園児別にみたままごとで滞在している場所

園	延べ観察時間 (分)	各室・空間			
		保育室 遊戯室 テラス・廊下	自然環境 固定遊具 その他	Ay Ke To Yu ままごとコーナー 制作した拠点	ままごとコーナー キバ
Ay	44	◎ ○	■		
Ii	4	○ ○			
Ib	25	○			
Ke	18			■	
Ke	19			■	■
To	1		○		○
Yu	22				■
Yu	23				■
Yu	23				■

凡例 ○ ~5分 ◎ ~10分 ● ~15分 ■ 15分以上

4) 遊び行為に関わる各室・空間と特徴的な環境要素のまとめ

以上、9種類の遊びについて以下の通りまとめる。

- ・動のごっこ遊びは、集団で遊ぶための広さがある場所が選択され、幅員が広いテラス・廊下でもみられる。
- ・鬼ごっこは、線的な軌跡を描き、様々な場所で滞在がみられる。特に一連の遊びの中で固定遊具の短時間滞在がみられる点が特徴である。
- ・探検は、自然環境を配置しないと発生せず、敷地の端にあっても場所の魅力によりアクセスするなど行動領域が広がっている。
- ・踊りは、集団で踊るための広さが必要な場合と、環境要素が近接配置されていることにより、転々と移動するタイプが存在する。
- ・砂遊びは、砂場等を設けるだけでは砂遊びとしては不十分であり、砂遊びが可能となる様々な拠点を設置し、さらに遊びの領域を広げるように多様な環境要素を配置することが求められる。
- ・玩具遊びは、玩具があるだけでは遊びが展開されず、周囲の特徴的な環境要素に働きかけている。
- ・ブロック遊びはブロックが置かれている場所で発生し、他の場所を使用することはあまりみられない。
- ・工作は、他の園児に邪魔されない位置に拠点を設置することが肝要で、他の場所へのアクセスの良さも必要である。
- ・ままごとは、ままごと拠点の存在とその他の場所へのアクセスが必要となる。

4.4 自由保育における園児一人ひとりの遊び行為実態とその特徴

表 4.24 は園児一人ひとりが滞在した場所と遊び行為の関係についてまとめたものである。ここでは各室・空間別の滞在割合に着目し、最も滞在割合が高い各室・空間ごとに園児を分類する作業を試みた。しかし、保育室の滞在割合が高い園児が多いため、保育室以外に最も多く滞在している場所が 30% 以上の場合は、そのタイプと判断して分析を進めた。

1) 保育室を中心に滞在しているタイプ

Ay 4 名、Ii 1 名、Ib 5 名、Ke 2 名、To 1 名、Yu 1 名の 14 名である。Ib で観察した園児 7 名のうち 5 名が該当している。保育室内の特徴的な環境要素は絨毯 (Ib)、パソコンコーナー (Ib)、円形の穴 (Ke)、ままごとコーナー (Yu) などが挙げられる。観察された主な遊びは、工作、お絵かき、毛糸、コマ遊び、カード遊び、ブロック遊び、パソコン、玩具遊び、玉転がし、ままごと、絵本読みなどで、静的遊びが中心ではあるものの、動的遊びや中間的遊びもみられる。また、保育室以外では砂遊びや鬼ごっこ、乗り物遊びなどを行っている園児もいる。すなわち保育室を中心に活動している園児は、静的遊びの割合が高い園児も存在するが、様々な遊びができる場所を求めている園児もいることがわかる。

2) 遊戯室を中心に滞在しているタイプ

遊戯室の滞在割合は全体を通して少なく、Ay 1 名 Yu 2 名の 3 名である。Ay 年長保育室は遊戯室と隣接しており、かつ扉がなく連続しているため、比較的滞在割合が高くなっている。Yu は分棟型の保育室がウッドデッキテラスでつながれており、年長は保育室と遊戯室、年中はテラス・廊下と保育室で滞在するといったテリトリー意識が働いていると思われる。そのため、遊戯室が自由保育の中で活用されるためには、保育室との位置関係とアクセスのしやすさに配慮した配置計画が重要になることが分かる。観察された主な遊びは、フラフープ (Ay)、動のごっこ遊び (Yu) である。

3) テラス・廊下を中心に滞在しているタイプ

Ii 1 名、Yu 1 名の 2 名である。両者はタイプが異なっており、Ii では幅員が広く、端に合って通過する園児が少ないテラスが色水遊びの場所となっており、同じ場所に滞在して遊んでいる。Yu では動のごっこ遊びや鬼ごっこ遊びなどの動き回る遊びがみられており、特に鬼ごっこでは、保育室などにも入り込んで走り回っている。

すなわち、その場所にとどまって遊ぶことのできる一定の広さが必要な場合と、様々な通り抜けができるような空間的配慮が必要な場合の両者がある。

4) 園庭を中心に滞在しているタイプ

Ay 2名、Ii 5名、Ib 1名、Ka 4名、Ke 2名、To 2名の16名である。園庭にある特徴的な環境要素は前庭(Ib)、サッカーコーナー(To)である。観察された主な遊びは、砂遊び、ボール遊び、コマ遊び、鬼ごっこ、動的去っこ遊び、長なわとび、踊りなどである。広いスペースを占有する遊びがみられ、集団で動的遊びを行うことができる空間の広さが求められている。一方、砂遊びも観察されており、Ibでは前庭が砂遊びの場所となっている。そのため、園庭は広さが求められる動的遊びのための場所だけではなく、その場所にとどまって遊ぶためのしつらえを求めている園児もいることが分かる。

5) 自然環境を中心に滞在しているタイプ

Ay 1名、Ii 3名、Ib 1名、Ka 1名の6名である。自然環境にある特徴的な環境要素は、砂場(Ay・Ib・Ka)、土手のくぼみ(Ii)、裏山(Ii)などである。観察された主な遊びは砂遊びである。すなわち自然環境で砂遊びができる環境セッティングの重要性が示唆される。半数がIiであることから、特徴的な自然環境を用意することの重要性がわかる。また、このタイプは園庭や固定遊具の滞在割合も高く、園庭、自然環境、固定遊具の連携に配慮した配置計画が求められる可能性がある。

6) 固定遊具を中心に滞在しているタイプ

Ay 3名、Ii 2名、Ka 2名、Ke 1名の8名である。特徴的な環境要素は、アスレチック遊具(Ay)、タイヤブランコ(Ii・Ka)、ロープウェイ(Ii)が挙げられる。観察された主な遊びは固定遊具であるが、砂遊びをしている園児も半数程度みられる。自然環境や園庭の滞在割合が高い園児もいることから、園庭や自然環境で述べたとおり、砂遊びの場所として3つの場所の連携が重要となる。

7) その他を中心に滞在しているタイプ

Ay 1名、Ka 5名、Ke 1名の7名で、Kaの割合が高い。特徴的な環境要素は、制作した拠点(Ay)、屋外工作コーナー(Ka)、屋外のテーブル(Ka)、擁壁(Ka)、ままごとコーナー(Ke)が挙げられる。観察された主な遊びは、ままごと、工作、砂遊びなどであり、特徴的な環境要素が遊びの拠点となっていることが分かる。ま

た、紙飛行機は、Kaの擁壁と園庭の高低差が遊びを成立させており、敷地全体の特徴が関わっていることが特筆される。

以上、園児の活動タイプの特徴は次の通りまとめられる。

- ・保育室を中心に活動している園児は、静的遊びの割合が高い園児、様々な遊びができる場所を求めている園児が存在する。
- ・全体として遊戯室はあまり活用されていない。遊戯室が自由保育の中で活用されるためには、保育室との位置関係とアクセスのしやすさに配慮した配置計画が重要である。
- ・テラス・廊下の利用は、その場所にとどまって遊ぶことのできる一定の広さが必要な場合と、様々な通り抜けができるような空間的配慮が必要な場合がある。
- ・園庭は動的遊びのための広い場所と、砂遊びなどのとどまって遊ぶしつらえの両者が必要である。
- ・自然環境は各園の特徴的を前面に出し、園庭、自然環境、固定遊具の連携に配慮した配置計画が求められる。
- ・固定遊具自体で遊ぶことができる環境に加えて、砂遊びの場所として園庭・自然環境との連携が重要となる。
- ・その他は、各園の特徴を出す計画上のポイントであり、特徴的な環境要素が遊びの拠点となっていることが分かる。

表 4.24 観察した全園児の遊びと滞在場所の実態

園名	学年・性別	各室・空間							10%以上滞在が見られた特徴的な環境要素	動的遊び (%)	中間的遊び (%)	静的遊び (%)	観察された主な遊び(分)
		保育室	遊戯室	テラス・廊下	園庭	自然環境	固定遊具	その他					
Ay	年少女	89							89	12	4	83	話(38)/工作(36)
Ay	年中女	76						○	121	1	20	79	虫(12)/工作(81)
Ay	年少男	73				○			111	10	14	76	砂遊び(15)/工作(36)
Ay	年少女	47			○	○			103	20	26	53	砂遊び(21)/お絵描き(23)
li	年中女	100							38	32	18	50	じゃれ(12)/毛糸(17)
lb	年中男	97							69	58	3	39	コマ遊び(29)/お絵かき(18)
lb	年長男	98							47	45	55		コマ遊び(20)/カード遊び(25)
lb	年長男	98							54	4	61	35	ブロック遊び(33)
lb	年長女	85			○				88	15		85	なわとび(13)/パソコン(69)
lb	年長女	95							21	10		90	お絵かき(5)/絵本読み(6)
Ke	年少男	61				○	○		126	37	43	20	鬼ごっこ(23)/玩具遊び(52)
Ke	年長女	68			○		○		37	62	19	19	玉転がし(16)
To	年長女	70					○		121	40	11	49	じゃれ(23)/乗り物遊び(5)/お絵かき(45)
Yu	年中女	96							93	5	1	94	ままごと(22)/絵本読み(29)
Ay	年長男	◎	42	○	○				81	68	11	21	ボール遊び(12)/フラフープ(28)
Yu	年長女	◎	68						135	43	15	42	動的去遊び(35)/楽器遊び(10)/ままごと(23)
Yu	年長女	◎	75						130	38	18	44	動的去遊び(23)/楽器遊び(10)/ままごと(23)
li	年少女	○	53		◎				133	2	81	17	砂遊び(39)/色水遊び(68)
Yu	年中男	46		●					84	64	2	33	動的去遊び(10)/鬼ごっこ(15)
Ay	年少男	○			●	◎	○		64	39	48	13	砂遊び(30)
Ay	年中男	66			◎				111	42	1	57	ボール遊び(19)/ちゃんぼら(16)/工作(18)/粘土(22)
li	年長男	○			71		○	100	71	98	2		コマ遊び(82)
li	年長男				96				96	98		2	ボール遊び(54)
li	年長女			○	58	◎			83	72	24	4	鬼ごっこ(13)/ボール遊び(47)/砂遊び(20)
li	年中男				45	◎	○	106	45	75	19	6	固定遊具(19)/コマ遊び(26)/登る(8)/砂遊び(19)
li	年中女				56	●		86	56	35	63	2	コマ遊び(13)/砂遊び(54)
lb	年少女	●			●		○	112	112	21	38	42	固定遊具(17)/砂遊び(27)/木の実拾い(8)/ままごと(25)
Ka	年少女	◎			45		○	88	45	53	25	22	動的去遊び(21)/鬼ごっこ(19)/砂遊び(12)/うた(5)
Ka	年少女	○		○	61		○	61	61	51	16	33	固定遊具(9)/コマ遊び(20)
Ka	年長女	○			57	◎		23	57	61	4	35	長なわとび(13)
Ka	年長女				83	●		46	83	67		33	踊り(29)
Ke	年少男	54		○	◎			57	54	30	19	51	動的去遊び(10)/工作(15)
Ke	年中男	55			43			103	55	54	36	10	ボール遊び(42)/ブロック遊び(37)
To	年少女	◎	○		◎	○	○	98	98	56	21	22	じゃれ(22)/鬼ごっこ(12)/動物(13)/料理(5)
To	年中男	○			44		◎	140	44	76	6	18	鬼ごっこ(25)/ボール遊び(27)/わたる(6)/水たまりに入る
Ay	年長男	●				◎	◎	138	138	11	59	30	砂遊び(77)/粘土(20)
li	年少男	○			◎	◎	◎	133	133	52	36	12	動的去遊び(21)/ひも遊び(10)/砂遊び(43)
li	年少女	◎			◎	◎	◎	128	128	57	23	20	固定遊具(35)/動的去遊び(18)/砂遊び(30)
li	年長女			○	◎	◎	◎	47	47	12	86	2	砂遊び(49)
lb	年中男				◎	◎	◎	64	64	19	76	5	砂遊び(36)
Ka	年中男				◎	◎	◎	46	46	36	61	3	探検(32)/乗り物遊び(6)/砂遊び(53)/紙飛行機(12)
Ay	年中男	●					◎	53	53	55	1	44	固定遊具(17)/お絵かき(20)
Ay	年中女	●				○	◎	97	97	24	20	57	固定遊具(21)/砂遊び(16)/折り紙(14)/隠れる(8)
Ay	年長女	41	○				◎	103	41	25	21	53	固定遊具(19)/砂遊び(11)/あやとり(32)
li	年長女	○			◎	◎	◎	154	154	55	21	23	固定遊具(46)/ボール遊び(38)/砂遊び(33)/お絵かき(19)
li	年少女				◎	◎	◎	49	49	57	22	20	固定遊具(38)/砂遊び(16)
Ka	年中女				◎	◎	◎	104	104	29	35	37	固定遊具(18)/砂遊び(27)
Ka	年長男				◎	◎	◎	58	58	63	24	13	固定遊具(20)
Ke	年少女	44				◎	◎	147	44	46	22	32	固定遊具(34)/探検(22)/玩具遊び(13)/ままごと(18)
Ay	年長女	◎					◎	53	53	31	1	68	ひも遊び(12)/ままごと(44)
Ka	年少男	69					◎	62	69	13	58	29	ブロック遊び(18)/紙飛行機(14)/工作(14)
Ka	年少女						◎	100	100		95	5	砂遊び(52)
Ka	年中男						◎	91	91	3	3	95	工作(64)
Ka	年中男			○	●			82	82	30	63	6	鬼ごっこ(15)/紙飛行機(47)
Ka	年長女				◎		◎	49	49	37	54	10	動的去遊び(18)/砂遊び(21)/動物(13)
Ke	年中女				◎		◎	59	59	53	14	34	固定遊具(16)/ボール遊び(14)/氷集め(7)/ままごと(19)

●:10%未満 ○:20%未満 ◎:30%未満 ■:40%以上

4.5 園児の興味・関心対象が存在する生活領域の特徴

園児の滞在がみられた特徴的な環境要素・空間について、生活領域の概念に着目すると、1) 身近な生活領域に存在する要素・空間、2) 近傍の生活領域に存在する要素・空間、3) 遠方の生活領域に存在する要素・空間の3つに分類・整理することができる(表 4.25)。以下に自由保育における園児の活動タイプと比較しながらそれらの特徴を述べる。

1) 身近な生活領域に存在する要素・空間

屋内・半屋外・園舎のすぐ外側などの拠点である。各タイプで複数該当する要素・空間は、ままごとコーナーである。専用目的の場所はパソコンコーナー (Ib)、飼育小屋 (Ka)、屋外工作コーナー (Ka) で、多目的な場所は絨毯 (Ib)、円形の穴 (Ka)、ウッドデッキテラス (Yu)、キバ (To)、前庭 (Ib)、段ボール製の拠点 (Ke)、制作した拠点 (Ay)、屋外のテーブル (Ka) 等が挙げられる。保育室滞在型、園庭滞在型、その他滞在型で複数の場所が該当している。

2) 近傍の生活領域に存在する要素・空間

園児が所属する保育室およびその周辺からその存在が観察可能な場所である。各タイプで複数該当する要素・空間は、砂場、土手のくぼみ、樹木、固定遊具である。専用目的の場所は飼育小屋 (To)、サッカーコーナー (To) で、多目的な場所は木製デッキ (Ka)、砂場のすぐ外 (Ay)、擁壁 (Ka) 等が挙げられる。園庭滞在型、自然環境滞在型、固定遊具滞在型で複数の場所が該当している。

3) 遠方の生活領域に存在する要素・空間

園児が所属する保育室およびその周辺からその存在が観察不可能な場所である。各タイプで複数該当する要素・空間は、アスレチック遊具、裏の林である。専用目的の場所は該当せず、多目的な場所は園外の畑 (Ay)、裏山 (Ii)、屋外のテーブル (Ka) 等が挙げられる。Ka の屋外のテーブルは年少・年長保育室周辺にあるが、高低差のある園庭を隔てて距離のある年少児がここで滞在しているため、この分類としている。他の2つと比較すると、遠方であるためか該当する場所が少ない傾向にある。

表 4.25 滞在場所からみた自由保育における園児の活動タイプ

滞在場所からみた自由保育における園児の活動タイプ	人数(人)	平均延べ時間(分)	身近な生活領域にある環境要素	近傍の生活領域にある環境要素	遠方の生活領域にある環境要素	コメント
保育室中心型	14	80	Ib絨毯(2) / Ibパソコンコーナー / Ke円形の穴 / Yuままごとコーナー	Ay砂場(2)	Ke裏の林 / Ay園外の畑	保育室内で比較的静かな遊び(工作・お絵かき・玩具遊び)を中心に活動するタイプ。保育室では遊びコーナー等で滞在している。
遊戯室滞在型	3	115	Yuままごとコーナー(2)	-	-	保育室や遊戯室で動的遊びを行っているタイプ。いずれも遊戯室と保育室がアクセスしやすい保育室に所属する園児である。
テラス・廊下滞在型	2	109	Yuウッドデッキテラス	Ii土手のくぼみ	-	テラス・廊下で滞在しているが、それぞれ遊び方は異なっている。幅員の広いテラスで滞在するタイプと、分棟型で保育室とテラスを動き回るタイプがある。
園庭滞在型	16	83	Toキバ / Ib前庭 / Ke段ボール製の拠点	Ay砂場 / Ka砂場 / Ay砂場のすぐ外 / Ii土手のくぼみ(2) / Ii樹木 / Ka木製デッキ / Kaタイヤブランコ / To飼育小屋 / Toサッカーコーナー	-	ボール遊びやコマ遊びなど園庭の広さを利用するものと、動的小ごっこ遊び・鬼ごっこなどの園庭を中心に周囲の環境に働きかけるもの、砂遊びなどの場所として園庭を利用するタイプなどがある。
自然環境滞在型	6	104		Ay砂場 / Ib砂場 / Ka砂場 / Ii土手のくぼみ(2)	Ii裏山 / Iiアスレチック遊具	砂遊びの場所として砂場や土手のくぼみなどの自然環境に滞在するタイプ。裏山までアクセスし動きのある遊びをする園児もいる。
固定遊具滞在型	8	103	Ka飼育小屋	Ay砂場 / Iiタイヤブランコ / Kaタイヤブランコ / Ii土手のくぼみ / Iiロープウェイ / Ka樹木 / Ka土手	Ayアスレチック遊具(2) / Ke裏の林	固定遊具で遊ぶ時間が長いタイプ。砂遊びの場所として固定遊具を選択している園児もいる。
その他滞在型	7	68	Ay制作した拠点 / Ka屋外工作コーナー(2) / Ka屋外のテーブル / Keままごとコーナー	Ka擁壁(2)	Ka屋外のテーブル	身近な領域にある特徴的な環境要素で遊んでいるタイプ。保育室と園庭の間にある擁壁、砂遊びの場所となっている遠方の屋外のテーブルに働きかける園児もいる。

4.6 まとめ

本章では、園児一人ひとりの遊び実態から各室・空間と環境要素の関係を把握することを試み、改めて詳細な分析を行った結果、以下の知見を得た。

1) 保育施設の設計時に想定すべき基本的遊びは、動的遊び：固定遊具、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、走る、中間的遊び：砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、うた、楽器遊び、静的遊び：工作、ままごと、お絵かき、絵本読みの14種類である。

2) 基本的遊びのうち、動的遊びは園庭を中心として保育室、テラス・廊下、固定遊具へ領域が広がることを想定する必要がある。砂遊びは園庭やその他が中心であるが、自然環境や固定遊具でもみられるなど領域が広範囲である。砂遊び以外の中間的遊び・静的遊びは保育室のテーブル・イスや狭いスペースが中心となっている実情にある。ただし保育室機能軽減の観点からは、保育室以外に中間的・静的遊びの場所を設ける必要があると考えられる。

3) 園特有の遊びが発生するためには、特徴的な環境要素の組み合わせ方が重要となる。動的遊びは広いスペース、中間的遊びは広いスペースに加えて専用コーナーや高低差・段差、静的遊びはテーブル・イスや専用コーナーが中心となっているが、その関係性について園の保育方針との融合の仕方が設計上のポイントとなる。

4) 遊びの流れから環境要素の配置を鑑みると、遊びの切り替わりを想定した空間的余地、拠点とその周りの環境への働きかけ、環境要素の近接配置による領域の拡がりなどが計画上の留意点となる。

5) 複数の各室・空間で観察された遊びの特徴は、各室・空間完結型、屋内・半屋外完結型、保育室中心型、屋外連携型、バランス型の5つに分けられ、屋外連携型は女児、バランス型は男児が該当する傾向にある。

6) 保育室は、静的遊びから動的遊びまで様々な遊びがみられ、屋外の滞在が少ない園児は動的遊びを保育室内で行っている。

7) 遊戯室はほとんどの園児が使用していない。それを改善するためには、接するテラス・廊下を日常的に使われる場所となるように幅員や形状を考慮するか、遊戯室を独立させず、可動間仕切り等でフレキシブルにして保育室の中に取り込んでしまうことも考えられる。

8) テラス・廊下の利用は、その場所にとどまって遊ぶことのできる一定の広さが必要な場合と、鬼ごっこのように様々な通り抜けができるような空間的配慮が必要な場合がある。また砂遊びが盛んな園では、土団子を隠す場所としてテラスの下駄箱が機能している。

9) 園庭は動的遊びのための広い場所と、砂遊びなどの滞在して遊ぶしつらえの両者が必要である。

10) 自然環境は各園の特徴的を前面に出し、園庭、自然環境、固定遊具の連携に配慮した配置計画が求められる。特に探検は自然環境のみで発生している。

11) 固定遊具は、それ自体で遊ぶことができることに加えて、砂遊びや鬼ごっこの場所として園庭・自然環境との連携が重要となる。

12) その他は、各園の特徴を出す設計上のポイントであり、特徴的な環境要素が遊びの拠点となっている。具体的には、クラス単位で制作した拠点、屋外工作コーナー、屋外のテーブル、擁壁、ままごとコーナーなどが挙げられる。

13) 園児の滞在がみられた特徴的な環境要素・空間について、生活領域の概念に着目すると、屋内・半屋外・園舎のすぐ外側にある「身近な要素・空間」、保育室とその周辺から観察可能な「近傍の要素・空間」、保育室とその周辺から観察不可能な「遠方の要素・空間」に大別され、それぞれ園児の興味関心によって滞在する生活領域に差がみられる。

以上を総括すると、各室・空間同士の関係は図 4.33 のように示される。まずは様々な場所を行き来する園児の遊び要求を満たすように、可能な限りアクセスしやすい関係性を担保する。次に各室・空間の行き来が少ない園児が落ち着いて遊べるよう、占有されるコーナーと共有されるコーナーを設ける。それらは各室・空間から直接アクセスできる、もしくはメインとなる活動の場所から距離を置き、階層的に計画されるなどのバリエーションを設けることが求められる。

次に遊びの動き別に、5つの特性（専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差）と特徴的な環境要素の関わりを整理した（図 4.34～36）。このダイアグラムは、基本的遊びが可能な限り多様となるように取捨選択して環境をつくり、次に保育方針に応じてそれ以外の遊びを誘発するような環境を計画するためのツールになることを意図している。滞在時間の長さを鑑

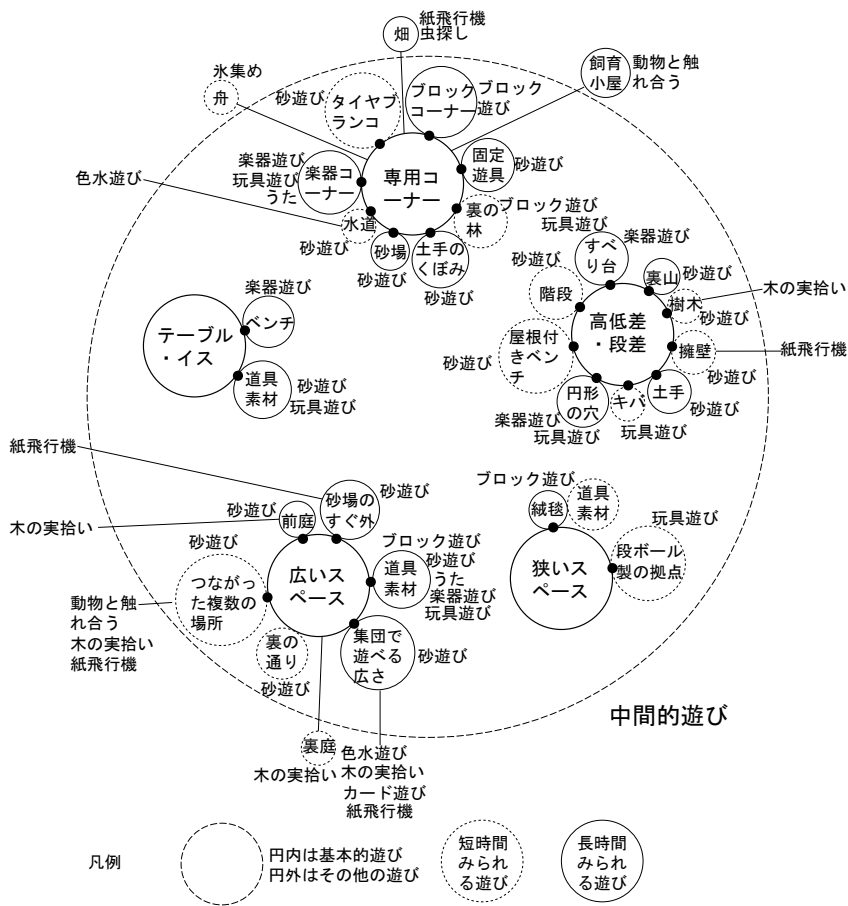


図 4.35 中間的遊びにおける遊びと滞在場所の関係

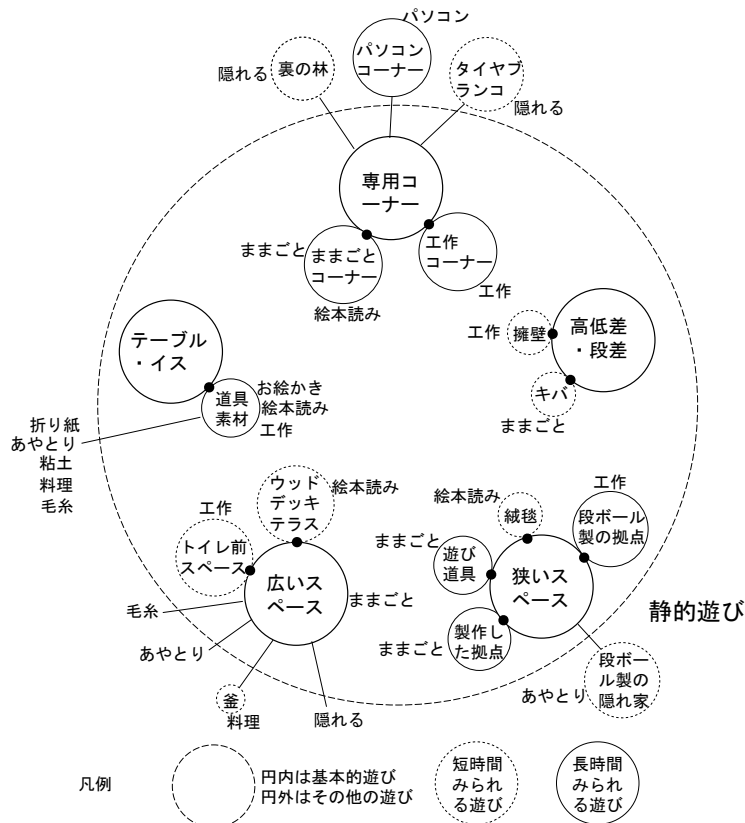


図 4.36 静的遊びにおける遊びと滞在場所の関係

参考文献

- 4.1) 西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.601, pp.47-55, 2006.03
- 4.2) 西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1257-1264, 2013.06
- 4.3) 西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.319-327, 2014.02
- 4.4) 細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.634, pp.2565-2572, 2008.12
- 4.5) 細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, No.639, pp.1029-1035, 2009.05
- 4.6) 山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.637, pp.549-557, 2009.03
- 4.7) 正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究, 日本建築学会計画系論文集, No.714, pp.1765-1773, 2015.08

第5章

各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価

- 5.1 本章の背景
- 5.2 本章の目的と方法
- 5.3 園児の好きな各部空間・要素と特徴
- 5.4 園児の撮影傾向と特徴
- 5.5 写真投影法で明らかになった園児の興味・関心対象と特徴
- 5.6 まとめ

第5章 各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価

5.1 本章の背景

保育施設の建築計画に関わる研究では、これまで主に園児の遊び活動場面に着目し、一定時間毎の行動観察調査や園児一人ひとりの行動追跡調査等から、各部空間・要素と行動との対応関係を分析し、空間・要素のあり方や施設機能・規模に関わる計画指針を得る方法が一般に行われてきた。一方、年齢や発達段階の異なる園児が、身近な保育施設各部空間・要素に対して有する興味・関心については、行動面のみならず心理面にも着目し、保育施設各部空間・要素に対する認識・評価を捉えることが必要と思われる。しかしながら、言語表現能力が十分でない園児の場合、心理面から保育施設各部空間・要素に対する認識・評価を捉えることは一般に困難であり、関連する既往研究方法の特徴を整理した上で、園児に適用可能な心理的調査・実験の方法を模索・試行・評価することが必要と考えられる。

5.2 本章の目的と方法

5.2.1 既往研究方法の整理と本章の目的

ここでは建築内外空間・要素に対する認識・評価を捉える試みを行っている既往研究方法を整理した。精神科医である野田正彰^{5.1)}は、園児から高校生まで約30人のこどもが有する日常生活空間・要素に対する認識・評価を捉える一つの方法として、「写真投影法」を用いている。野田が行った写真投影法ではこどもが撮影対象とした日常生活空間・要素と撮影理由を読み解く際、専門的能力が求められる精神分析学的方法を採用しているが、園児に対する手法の有効性については明確に示されていない。

建築計画分野で写真投影法を用いる場合、写真撮影とその理由を問う方法が採用されている。写真投影法をこどもに実施している研究として、伊藤俊介、長澤泰、山下哲郎^{5.2-5.3)}は、「小学校の中で好きなどころ、面白いところ」を児童に撮影してもらい、調査員が同行してヒアリングしている。被験者は小学校高学年(4～6年生)であり、調査員に対して撮影理由を説明することが可能と考えられる。一方、言語表現能力が不十分な園児に対しては、実験方法や手順を工夫する必要があると考えられる。

曾英敏、延藤安弘、森永良丙ら^{5.4)}は、団地再生の意見収集のため写真投影法を住民(高齢者)に実施し、写真撮影に加えてインタビュー調査を行っている。インタビュー調査は、フィルムカメラを回収・現像後、1人あたり2～3時間をかけて写真から被験者の思いを丁寧に引き出しているが、園児の場合は長時間ヒアリングすることが困難である。

古賀誉章・小島隆矢ら^{5.5-5.6)}は、被験者が「いいな/いやだなと思う景観」を撮影し、その理由をキャプションとして記述する「キャプション評価法」から、都市景観構成要素を抽出・評価している。キャプション評価法は写真投影法の応用手法と考えられ、景観評価やまちづくりワークショップ等でも用いられているが、この方法では被験者自身が写真撮影とキャプション記述をするため、被験者が園児の場合、文字記述以外の補助手段でキャプションデータを得る必要がある。

以上の既往研究方法を比較検討した結果、本研究では園児の保育施設各部空間・要素に対する認識・評価を捉える方法として、写真撮影と園児にも適用可能なヒアリング(園児が撮影する度にスタッ

5.1) 野田正彰 漂白される子供たち, 情報センター出版局, 1988

5.2) 伊藤俊介, 長澤泰, 山下哲郎 小学校における場所の認識と空間の見えに関する研究 - 写真投影法による分析 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.77-78, 1996

5.3) 伊藤俊介, 長澤泰, 山下哲郎 児童の環境認識とその経過的变化に関する研究 - 写真投影法による2小学校の比較を通して -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.303-304, 1997

5.4) 曾英敏, 延藤安弘, 森永良丙 サステイナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画の研究 - 写真投影法による高根台団地の考察 -, 日本建築学会計画系論文集 No.549, pp.95-102, 2001.11

5.5) 古賀誉章, 高明彦, 宗方淳, 小島隆矢, 平手小太郎, 安岡正人 キャプション評価法による市民参加型景観調査 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1 -, 日本建築学会計画系論文集 No.517, pp.79-84, 1999.3

5.6) 小島隆矢, 古賀誉章, 宗方淳, 平手小太郎 多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その2 -, 日本建築学会計画系論文集 No.560, pp.51-58, 2002.10

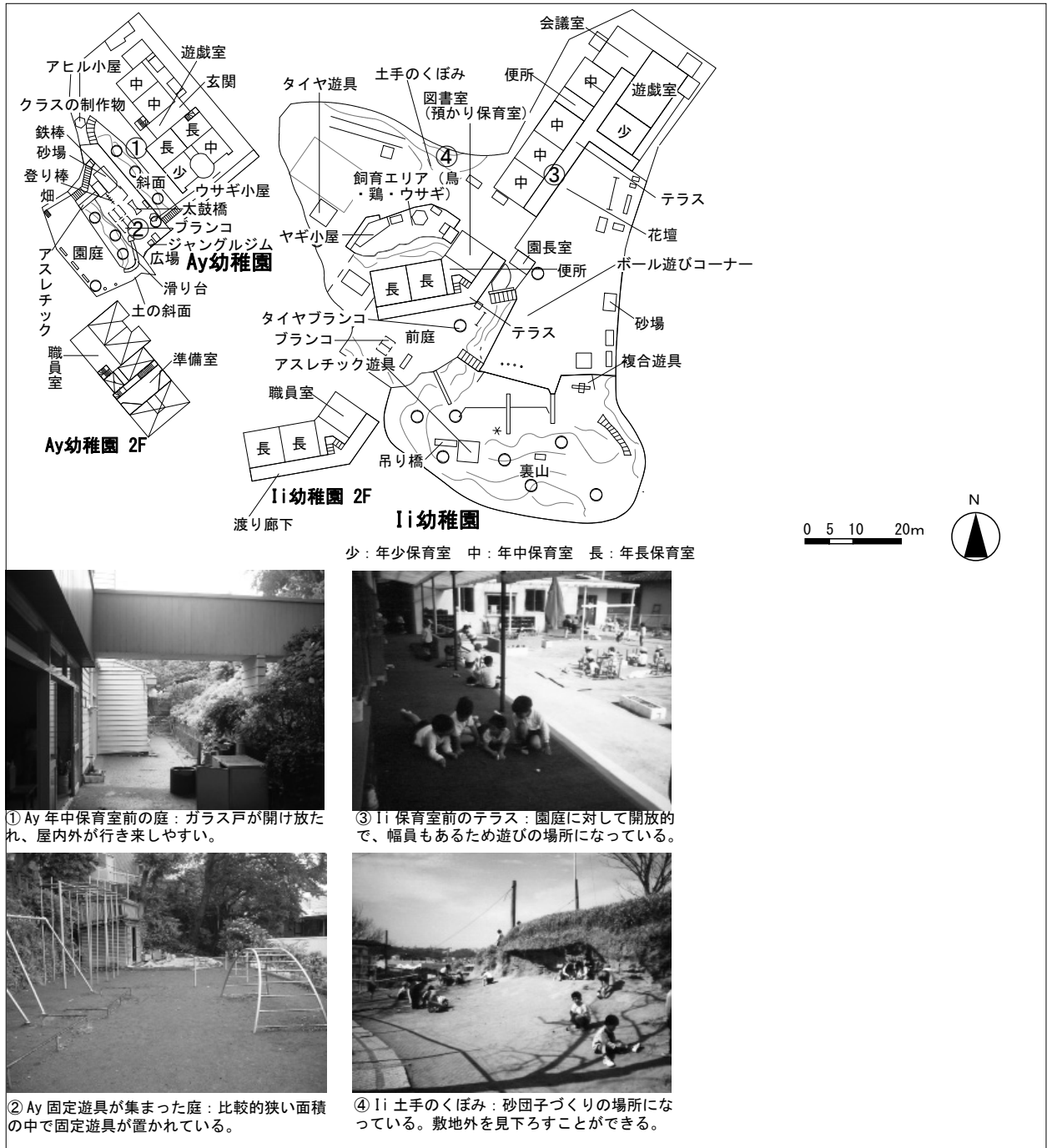
フが撮影対象・理由を聞き出す)を併用した実験を検討し、施設規模、機能、環境構成要素等が異なる4園において本実験を実施した。本研究では、園児一人ひとりが興味・関心を有する保育施設各部空間・要素とその特徴を保育環境・学年・性別の差異から明らかにし、この実験方法の可能性を検討することを目的とした。

5.2.2 研究方法

ここでは園児が写真撮影方法をできるだけ容易に習得できれば実験可能と考え、簡易カメラ(=市販使い捨てポケットカメラ)を実験道具に用いた。実験対象園は各部空間・要素の特徴と活動実態を事前に把握していることが分析上必要と考えられるため、行動観察調査を実施し、空間的特徴を把握しているAy、Ii、Ka、Keの4施設を選定した(表5.1・図5.1)。実験対象施設はいずれも特色ある保育環境を有しており、屋内では毛糸・粘土等の豊富な遊び素材(Ay)、幅員のあるテラス(Ii)、ウサギの飼育ゲージ(Ka)、デン(Ke)、屋外では高低差のある敷地(Ay・Ka)、アスレチック遊具(Ay・Ii・Ke)、ヤギ小屋(Ii・Ka)、土遊びコーナー(Ii・Ka)、山・林(Ii・Ke)等が特色ある環境要素となっている。実験では各部空間・要素に対する嗜好を把握することが重要であると考え、園児一人ひとりに簡易カメラ1台を手渡し、「自分の好きな場所」を一人あたり屋内・屋外各5枚、計10枚撮影してもらった。なお、実験時に園児の注意力が散漫になるのを避けるため、撮影対象を各部空間・要素に限定し、人の活動風景などは含めないよう指示した。撮影に際しては簡易カメラの撮影方法を調査員が事前に教え、数枚の撮影練習後、園児1人に調査員1人が同行して撮影を実施し、撮影のたびに撮影対象の名称と撮影理由を記録した。ただし、予備実験において、園児から得られた撮影理由が具体的でない場合もあったことから、園児全員を対象とした撮影理由の分析は難しいと判断し、必要に応じて撮影理由を参照することとした。実験では、園児が撮影対象を十分に考えてから撮影するよう、最初に施設内全体を散策させ撮影対象を想定してもらった後、屋内は園舎中央付近、屋外は園庭中央付近から撮影実験を開始した。被験者は園児計46名(年少8、年中20、年長18/男児22、女児24)であった。

表 5.1 実験対象施設の空間的特徴

施設名	実験対象	屋内空間・要素の特徴	屋外空間・要素の特徴	実験日の状況と保育活動の特色
Ay	年少：2 年中：8 年長：6 16人	造形遊びのため毛糸や粘土、画材等の素材が設置されている。園児が制作した絵や粘土が空る所に展示されている。また、花や絵画などを教員が設置し空間を彩っている。玄関ホールは動的遊びに使用するフーフーフやボールが設置されている。	園舎、遊具庭、グラウンドの3層に分かれ、斜面には様々な種類の樹木・植え込みがある。遊具庭は砂場や飼育小屋のほか、固定遊具が密集している。最上部グラウンドへのアクセスのため階段のほか、滑り台様に土の斜面がある。	屋内外の素材（動植物や草花、絵本、毛糸、粘土）を利用して保育活動を展開。絵画、造形活動に力を入れている。玄関ホールすぐ外にはクラスで制作した舟を模した制作物が設置されている。
Ii	年少：2 年中：4 年長：4 10人	様々な動物やキャラクターの壁画装飾や教員が制作した飾りがある。保育室前は広いテラスであり、園児が滞在して遊ぶ場所となっている。他クラスへの侵入はあまりないが、テラスで遊びが展開しており、覗き見ることはできる。	屋外環境豊かで、ヤギ、鶏、うさぎ、アヒルの飼育小屋があるほか、裏山や土団子をつくることに適した土手などが設置されている。敷地・グラウンドが広く、高台にあるため、空や遠くの景色がよく見える。	兄弟クラスを設けており、異学年クラスが隣り合っているため、クラス間の交流もある。ひな祭りの時期であったため、遊戯室にひな壇が飾られている。
Ka	年少：2 年中：4 年長：4 10人	グラウンドと同じレベルに年少保育室、擁壁を上がったところに年中・年長保育室がある。屋外で遊ぶことを重視しているため玩具・素材は比較的少ない。各クラスでうさぎを飼育しており、保育室すぐ外側にゲージが置かれている。	グラウンドと擁壁上部は4mの高低差があり、上部からはグラウンドの他、園外の景色が見渡せる。園児が木工（釘打ち）で制作に関われる大きな基地がある。	屋外環境豊かで屋外の活動が中心である。園児自らが制作した作品を展示する展示会の直後で、屋内には制作物があふれている。
Ke	年少：2 年中：4 年長：4 10人	保育室は遊び内容別にコーナーが設けられ、ままごと・音楽コーナーなどは専用の部屋がある。年長保育室は広い一室空間となっており、各種遊びコーナーのほか、テラスも配置されている。保育室やテラス部分は花や緑が設置されている。	園舎周辺は静的スペースとしてピオトープや植栽、飼育小屋が設置されている。動的スペースであるグラウンド周囲は、固定遊具が密集して配置されている。園舎奥にも雑木林があり、敷地全体を探索することができる。	特に年少・年長保育室は広い一室空間で、随所に遊びコーナーを設定するコーナー保育を展開。特に年長はクラス活動場所を日によって変更し、園の様々な場所を使用している。
合計	46人	(年少8人、年中20人、年長18人、男児22人、女児24人)		



5.3 園児の好きな各部空間・要素と特徴

表 5.2 は園児が好きな対象として写真撮影した各部空間・要素(合計 457 枚)を保育施設の典型的な各部空間・要素に分類整理したものである。表 3 は屋内及び屋外の撮影対象枚数の割合(以下、撮影割合)を示したものである。撮影割合が高いものは屋外〔固定遊具〕58.1%、屋内〔制作物〕30.7%、屋外〔自然〕21.8%で、園児は屋外〔固定遊具〕に最も興味・関心を有していることがわかる。

5.3.1 実験対象施設別にみた撮影対象と特徴

表 5.3 の施設別、学年別、性別の撮影対象枚数について χ^2 乗検定を行った結果、特に屋内及び屋外の撮影対象と施設別の撮影枚数は有意な関係 ($p < 0.01$) があり、これらは施設毎の保育環境の違いに影響されることが判明した。表 5.3 の施設別撮影割合の高い対象をみると、Ay では屋内の〔制作物〕41.3%、〔玩具・素材〕26.3%である。Ay では造形を中心とした保育方針を打ち出していることから、これらの撮影割合が高くなっていると考えられる。屋外は〔固定遊具〕66.3%、〔自然〕20.0%であるが、〔固定遊具〕、〔自然〕はどの園でも撮影割合が高い傾向にある。Ii では 屋内〔園具〕38.0%、〔飾り〕30.0%で、実験当時の屋内環境の設え(写真 5.1・ひな壇設置等)が影響していると考えられる。Ka では屋内〔制作物〕64.6%で撮影割合が高い。屋外〔制作物〕16.0%は教諭が設置し、かつ園児も制作に関わったもので、園児にとって愛着あるものと考えられる(写真 5.2)。Ke では屋内〔空間〕36.0%で最も撮影割合が高いが、これはコーナー保育を実施し、日常的に空間全体を意識する機会が多いこと等が影響していると考えられる(写真 5.3)。なお、屋内で〔固定遊具〕が撮影されているのは Ke だけであるが、これは保育室の一角に特徴的な固定遊具(写真 5.4・デン)が設置されているためである。



写真 5.1 遊戯室にあるひな壇 (Ii)



写真 5.2 教諭がつくった基地 (Ka)



写真 5.3 ままごとコーナー (Ke)



写真 5.4 年長保育室のデン (Ke)

表 5.2 撮影対象の分類

分類	特徴	撮影例	屋内	屋外	合計
園具	施設側が運営上必要と認め設置したもの	時計、イス、棚、下駄箱	32	2	34
飾り	教諭が環境を彩るために設置したもの	壁飾り、絵画、ひな壇	35	2	37
固定遊具	動かすことのできない大型遊具	すべり台、ブランコ、ネット遊具	6	133	139
玩具・素材	移動可能な玩具・遊びの素材	積み木、人形、毛糸、乗り物遊具	28	5	33
制作物	園児自らが制作に関わったもの	大型基地、絵画、工作物	70	11	81
空間	撮影対象を空間・コーナーと捉えたもの	遊びコーナー、グラウンド、園外の風景	40	26	66
自然	動植物、雲などの自然	樹木、植栽、ヤギ、ウサギ、雲	17	50	67
合計(枚数)			228	229	457

表 5.3 施設別・学年別・性別にみた撮影割合

撮影対象(%)	施設別				学年別			性別		合計	
	Ay	li	Ka	Ke	年少	年中	年長	男児	女児		
屋内	園具	1.3**	38.0**	10.4	14.0	20.0*	18.4*	6.7*	16.7	11.7	14.0
	飾り	13.8	30.0*	8.3	10.0	20.0	15.3	13.3	11.1	19.2	15.4
	固定遊具	0.0	0.0	0.0	12.0**	0.0	2.0	4.4	2.8	2.5	2.6
	玩具・素材	26.3**	6.0	2.1*	6.0	12.5	11.2	13.3	16.7	8.3	12.3
	制作物	41.3	2.0**	64.6**	10.0**	27.5	31.6	31.1	32.4	29.2	30.7
	空間	12.5	16.0	8.3	36.0**	7.5*	15.3	24.4*	14.8	20.0	17.5
	自然	5.0	8.0	6.3	12.0	12.5	6.1	6.7	5.6	9.2	7.5
	計(枚数)	80	50	48	50	40	98	90	108	120	228
屋外	園具	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.9	0.8	0.9
	飾り	0.0	2.0	2.0	0.0	2.6	1.0	0.0	0.9	0.8	0.9
	固定遊具	66.3	49.0	48.0	64.0	56.4	63.0	53.3	53.2	62.5	58.1
	玩具・素材	0.0	0.0	2.0	8.0*	0.0	5.0*	0.0*	3.7	0.8	2.2
	制作物	2.5	2.0	16.0**	0.0	2.6	5.0	5.6	5.5	4.2	4.8
	空間	8.8	14.3	18.0	6.0	15.4	7.0	14.4	15.6	7.5	11.4
	自然	20.0	32.7	14.0	22.0	23.1	19.0	24.4	20.2	23.3	21.8
	計(枚数)	80	49	50	50	39	100	90	109	120	229
全体	園具	1.9*	19.2**	5.1	7.0	10.1	9.1	4.4	8.8	6.3	7.4
	飾り	6.9	16.2**	5.1	5.0	11.4	8.1	6.7	6.0	10.0	8.1
	固定遊具	33.1	24.2	24.5	38.0	27.8	32.8	28.9	28.1	32.5	30.4
	玩具・素材	13.1*	3.0	2.0*	7.0	6.3	8.1	6.7	10.1*	4.6*	7.2
	制作物	21.9	2.0**	39.8**	5.0**	15.2	18.2	18.3	18.9	16.7	17.7
	空間	10.6	15.2	13.3	21.0*	11.4	11.1*	19.4*	15.2	13.8	14.4
	自然	12.5	20.2	10.2	17.0	17.7	12.6	15.6	12.9	16.3	14.7
	計(枚数)	160	99	98	100	79	198	180	217	240	457

凡例 * $p < .05$, ** $p < .01$: $p < .05$ のうち撮影割合が高いもの : 撮影割合20%以上

5.3.2 学年別・性別にみた撮影対象と特徴

表 5.3 の学年別撮影割合をみると、屋内では〔制作物〕の撮影割合がどの学年とも 30%前後で最も高くなっている。屋内〔園具〕は年少 20.0%、年中 18.4%、年長 6.7% で、低学年の方が高学年より撮影割合が高くなる傾向にある。また屋内〔空間〕は年少 7.5%、年長 24.4% で高学年の方が低学年より撮影割合が高くなる傾向にある。このことから低学年では保育施設内の小さな要素、高学年では大きな空間に興味・関心を有する傾向にあると考えられる。屋外〔玩具・素材〕は年中 5.0%、年長 0.0% で有意な差がみられる。これは特に Ke 年中の撮影割合が高いことと関係している。

性別の撮影割合は男女とも屋内〔制作物〕30%前後で最も高く、〔園具〕は男児 16.7%、女児 11.7%、〔飾り〕男児 11.1%、女児 19.2%、〔玩具・素材〕は男児 16.7%、女児 8.3%、〔空間〕男児 14.8%、女児 20.0% で、男女で撮影割合に差が見られる対象が複数存在する。屋外〔固定遊具〕は男児 53.2%、女児 62.5% で女児の撮影割合がやや高くなっている。全体〔玩具・素材〕は男女の撮影割合に有意差がみられる。撮影された〔玩具・素材〕内訳をみると、積み木（写真 5.5）、フラフープ、絵の具、毛糸、編み物、粘土等が撮影対象となっており、特に積み木は 7 人中男児 5 人、女児 2 人で性別の差が大きくなっている。



写真 5.5 積み木 (Ay)

5.4 園児の撮影傾向と特徴

ここでは、園児一人ひとりが撮影した幼稚園各部空間・要素の撮影傾向と特徴を明らかにするため、屋内7区分、屋外7区分、計14区分の撮影枚数を分析データとして、クラスター分析(ウォード法)を行った。抽出グループ数は14区分の撮影枚数の差を距離と考え、デンドログラムでこの距離が大きくなるところで分類した結果、8つの撮影対象パターンを得た(図5.2)。以下、得られた撮影対象パターンA～Hの特徴を分析・考察する。

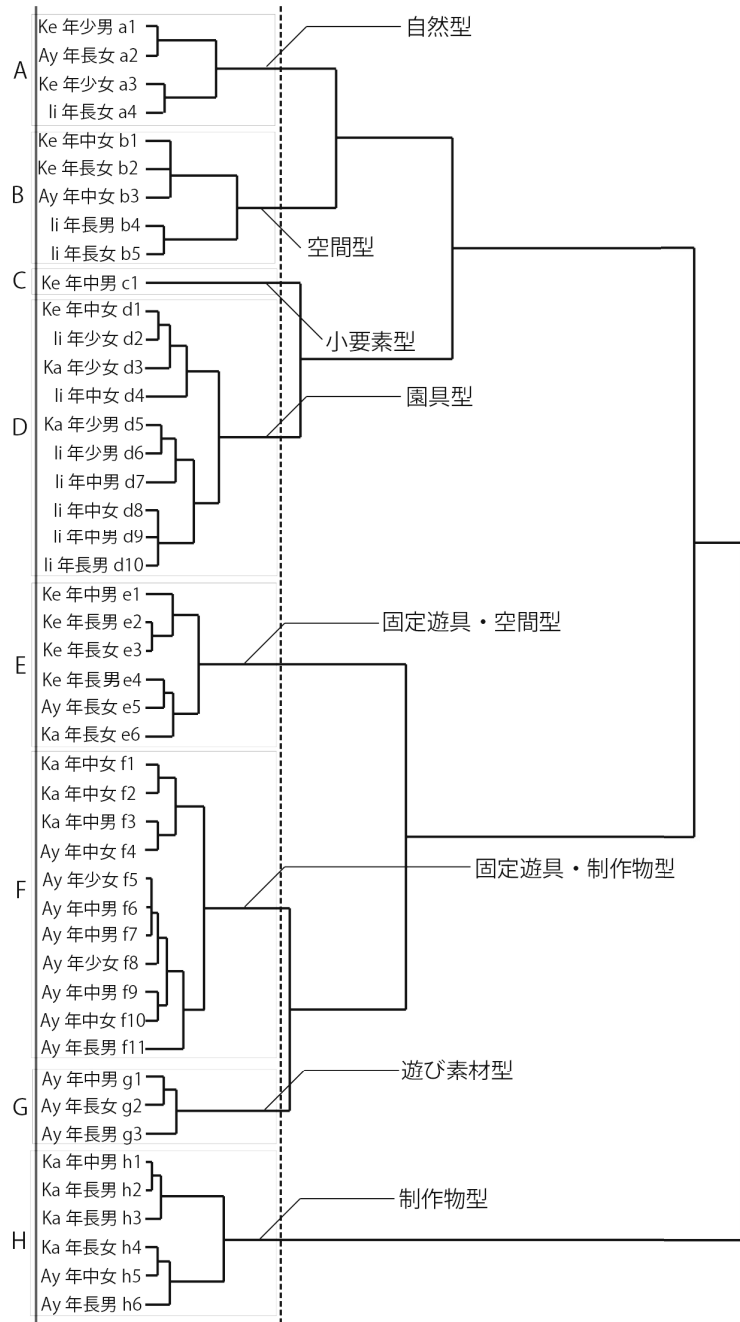


図 5.2 園児の撮影パターン (クラスター分析)

A. 自然型 (8.7% :4 / 46人) : 屋内で [飾り]、[自然]、屋外で [固定遊具]、[自然] 等が主に撮影され、女兒の人数割合が4人中3人 (75%) となっている。屋内 [自然] はいずれも写真 5.6 に示すような飾られた花である。また屋外 [自然] を撮影した Ay 年長女兒は樹木を主に撮影し、施設内の代表的な樹木を撮り分けていることがヒアリングから判明した。



写真 5.6 花瓶に生けられた花
撮影 : Ay 年少女兒 f8

B. 空間型 (10.9% :5 / 46人) : 屋外 [自然] 及び屋内 [空間] を主に撮影するタイプ。年少の学年は該当せず、女兒の人数割合が5人中4人 (80%) となっている。屋内では遊びコーナーや部屋全体の撮影が主であるが、屋内 [空間] を4枚撮影している Ay 年中女兒は、特に保育室から見える風景写真の構図にこだわっており (写真 5.7)、個人の特性が現れていると考えられる。



写真 5.7 保育室からの屋外風景
撮影 : Ay 年中女兒 b3

C. 小要素型 (2.2% :1 / 46人) : Ke 年中男児のみの特異なタイプ。撮影割合は屋内 [園具] が5枚中3枚 (60%)、屋外 [玩具・素材] が5枚中4枚 (80%) で、撮影対象は4輪車 (写真 5.8) の他、イス、ゴミ箱、やかん、ボール等、主に小さなものを好んで撮影している。



写真 5.8 四輪車
撮影 : ke 年中男児 c1

D. 園具型 (21.7% :10 / 46人) : 屋内 [園具]、屋外 [固定遊具] 等が主に撮影され、年少・年中の人数が9人 (90%) と多いタイプ。施設別では Ii の人数が7人 (70%) で最も多くなっている。撮影された屋内 [園具] の内訳は、時計、ピアノ、イス、個人棚 (写真 5.9)、ロッカー等で、様々な種類を撮影する Ii 年少女児、特定の家具に興味・関心を有する Ii 年中女兒等がこのタイプに属する。



写真 5.9 個人ロッカー
撮影 : Ii 年中女兒 d4

E. 固定遊具・空間型 (13.0% :6 / 46人) : 屋内 [空間]、屋外 [固定遊具] 等を主に撮影するタイプ。人数は年長が6人中5人 (83%) で、特に Ke では滑り台が好んで撮影されている (写真 5.10)。



写真 5.10 滑り台
撮影 : Ke 年中男児 e1



写真 5.11 制作した工作物
撮影：Ka 年長女児 e6



写真 5.12 かごに入った毛糸
撮影：Ay 年中男児 g1



写真 5.13 壁に掲示されている絵
撮影：Ay 年中女児 f4

F. 固定遊具・制作物型 (23.9% :11 / 46 人) : 屋内 [制作物]、屋外 [固定遊具] 等が主に撮影され、年中の人数が 11 人中 8 人 (73%) と多いタイプ。施設別の人数は Ay8 人 (73%)、Ka3 人 (27%) で、Ay では常設の制作物、Ka では新たに展示された制作物 (写真 5.11) が撮影されている。これらの撮影対象は園児自らが制作した絵や工作物であることが特徴的である。

G. 遊び素材型 (6.5% :3 / 46 人) : 屋内 [玩具・素材]、屋外 [固定遊具] を主に撮影し、Ay 園児 (年中 1 名、年長 2 名) の撮影対象のみで特徴づけられるタイプ。Ay では園児の目に触れやすいよう粘土、毛糸等の素材 (写真 5.12) が身近に設置されていることが撮影に影響していると考えられる。

H. 制作物型 (13.0% :6 / 46 人) : 屋内 [制作物] を主に撮影し、屋外では様々な要素を撮影しているタイプ。撮影対象がクラス全員でつくったものから個人のものまで幅広く選択されている。特に Ay では自ら制作した絵 (写真 5.13) の撮影割合が 52% (33 枚中 17 枚) と半数を占めていることから、自ら関わったものに対して興味・関心をもっていることが分かる。

以上の結果をもとに保育施設各部空間・要素と撮影対象パターンの関係を図 5.3 に示した。屋内では、[園具]、[制作物]、[空間] が複数の撮影対象パターンで撮影されており、C 小要素型・D 園具型では [園具]、F 固定遊具・制作物型・H 制作物型では [制作物]、B 空間型・E 固定遊具・空間型では [空間] が撮影される傾向にある。屋外では、大半の撮影対象パターンで [固定遊具] が撮影されているが、A 自然型では [自然]、C 小要素型では [玩具・素材] などが撮影されている。すなわち園児にとって拠点となる屋内では複数の空間・要素に興味・関心を有し、屋外では主に園児が着目しやすい [固定遊具] の他、[自然] 等に興味・関心を有する傾向にあることが判明した。

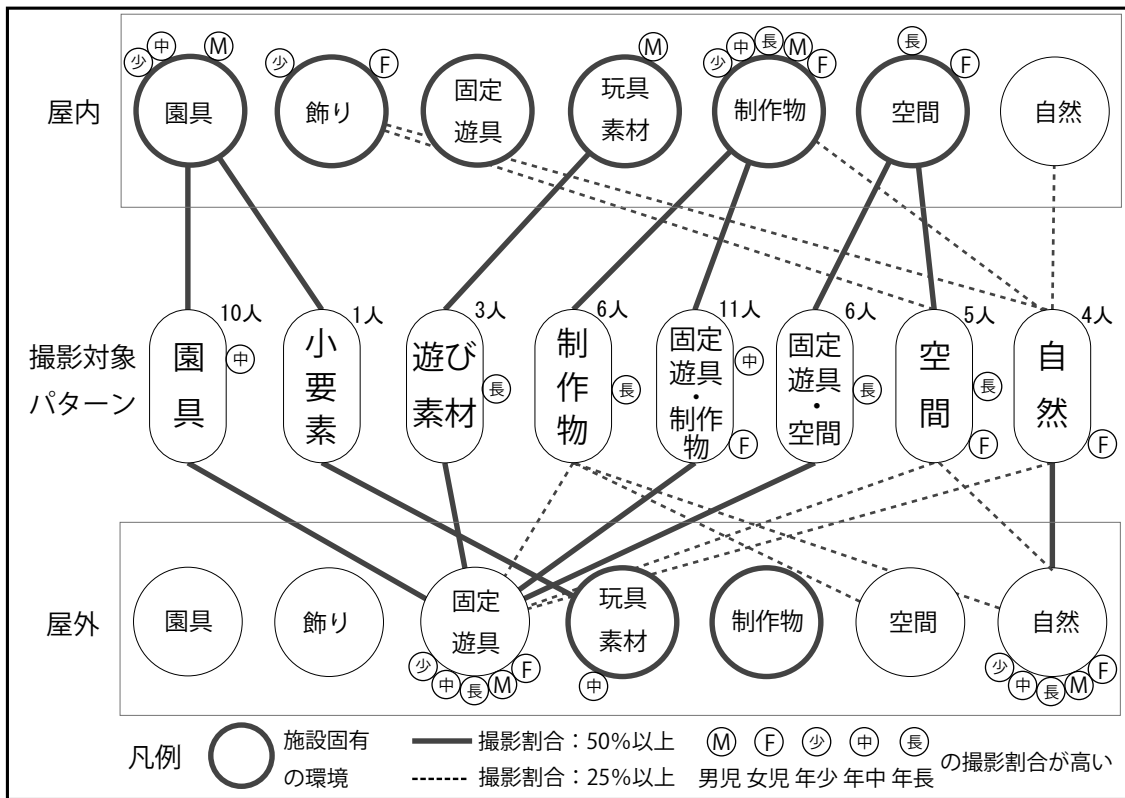


図 5.3 保育施設各部空間・要素と撮影対象パターンの関係

5.5 写真投影法で明らかになった園児の興味・関心対象と特徴

表 5.4 は写真投影法を用いた実験で明らかになった園児の興味・関心対象（要素・空間・風景）を生活領域の概念に着目し、1）身近な生活領域に存在する要素、2）近傍の生活領域に存在する要素、3）遠方の生活領域に存在する要素・空間・風景の3つに分類・整理してみたものである。以下それらの特徴を述べる。

1) 身近な生活領域に存在する要素

各園で共通する要素は、壁飾り、絵、壁面装飾（写真 5.14）などである。園固有の要素は Ay のみみられるもので、制作物、タペストリー（写真 5.15）、園児が描いた絵 7 点、粘土の展示等が挙げられ、園児が描いた絵に対して興味・関心が高いことが分かる。これらは園児の身の回りに存在するものであると同時に、教諭が教材として展示していることが特徴である。



写真 5.14 教諭が作成した壁面装飾
撮影：Ke 年少女児 a3

2) 近傍の生活領域に存在する要素

これらはいずれも園固有のもので、劇の際に教諭が話題にしたトプライト（Ay・写真 5.16）、壁掛け時計（Ii）、造花（Ka・写真 5.17）、蛍光灯（Ka）、モビール（Ka）など、園児が直接手に触れることは出来ないが、過去の保育活動やイベント等で重要な意味をもっていることが園児へのヒアリングから判明した。



写真 5.15 タペストリー
撮影：Ay 年中男児 f7

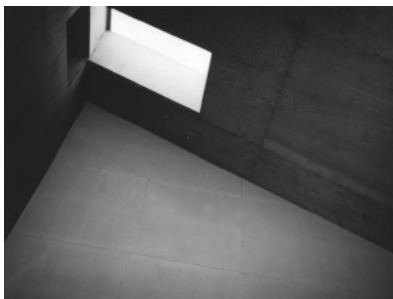


写真 5.16 保育室のトプライト
撮影：Ay 年長男児 g3



写真 5.17 階段上部の造花
撮影：Ka 年中女児 f2

表 5.4 生活領域の概念からみた園児の興味・関心対象

	1) 身近な生活領域に存在する要素	2) 近傍の生活領域に存在する要素	3) 遠方の生活領域に存在する要素・空間・風景
Ay	壁飾り(2), 落ち葉を貼った絵, 職員室に飾ってある絵, 制作物, タペストリー, 園児が描いた絵(7), 粘土の展示	トプライト	広場, 樹木(6), 保育室からみた屋外の風景 畑(2)
Ii	飾り, 壁面装飾	壁掛け時計	樹木(4), 保育室から見た屋外の風景, 敷地外の風景 空, 雲
Ka	絵	造花, 蛍光灯, 鳥のモビール	樹木(2), <u>グラウンド全体</u> , 敷地外の風景
Ke	<u>壁面装飾(3)</u>		樹木, 中庭

凡例：（ ）内は合計撮影枚数／下線は写真で示した撮影対象／太字は園固有の撮影対象

3) 遠方の生活領域に存在する要素・空間・風景

各園共通のものは、樹木、広場などの空間全体、風景などである。一方、園固有のものは、畑 (Ay)、空 (Ii)、雲 (Ii) が挙げられる。園児が入れない斜面に存在する樹木 (Ay・写真 5.18)、高台にある見晴らしが良い園庭から俯瞰した風景 (Ii・写真 5.19)、青空に浮かぶ雲 (Ii・写真 5.20)、グラウンド全体の風景 (Ka・写真 5.21) など、生活拠点から遠方に存在するが、日常で利用したり、観察される要素・空間・風景であることが特徴となっている。以上、写真投影法の結果を園児の生活領域の概念に着目して分類・整理し、それらの特徴を考察した結果、園児が興味・関心を有する要素・空間・風景に対する認識・評価の一端が明らかとなった。



写真 5.18 斜面に植えられた樹木
撮影：Ay 年長女児 a2



写真 5.19 園庭から俯瞰した町並み
撮影：Ii 年長男児 b4



写真 5.20 空に浮かぶ雲
撮影：Ii 年中男児 d7



写真 5.21 グラウンドの風景
撮影：ka 年少男児 d5

5.6 まとめ

本章では、特色ある保育環境を有する4園において、ヒアリングを併用した園児に対する写真投影法実験を試行・実施した結果、以下のことが明らかとなった。

1) 施設別にみた撮影割合は、造形中心の保育方針(Ay)では屋内[制作物][玩具・素材]等が高く、コーナー保育実施により様々な空間利用が活発な園(Ke)では屋内[空間]が高くなっている。園児が好きな撮影対象は施設毎の保育環境の違いと密接に関係していると考えられる。

2) 学年別にみた撮影割合は、低学年は屋内[制作物][園具]が高く、高学年は屋内[制作物][空間]が高いことから、低学年は保育施設内の小さな要素、高学年は大きな空間に興味・関心を有する傾向にあると考えられる。

3) 性別にみた撮影割合は、屋内[制作物]は男女で最も好まれ、[園具][飾り][玩具・素材][自然]等は男女で撮影割合に差がみられる。屋外[玩具・素材]の撮影割合は全体でみると男児の方が女児よりも高く、特に積み木で差がみられる。

4) 園児の撮影対象パターンは、自然型、空間型、小要素型、園具型、固定遊具・空間型、固定遊具・制作物型、遊び素材型、制作物型の8つに分類される。これらの分類は施設別、学年別、性別の特徴がみられ、特に屋内の保育施設各部空間・要素は複数の対象が撮影される傾向にある。

5) 園児が興味・関心を有する保育施設及び周辺的环境要素は、生活領域の概念で捉え直すと「身近な生活領域にあるもの(身近に存在し、教師が教材等で展示)」、「近傍の生活領域にあるもの(過去の保育・イベント活動等で体験)」、「遠方の生活領域にあるもの(日常利用・観察するもの)」の3つに大別される。

以上、園児の環境に対する認識・評価の特性を捉えることは、通常の行動観察調査では一般に難しいと考えられるが、今回試行・実施した写真投影法実験は一つの方法として可能性があると考えられる。一方、本実験で参照したヒアリング情報(撮影対象・理由)は園児の言語表現能力に依存し、必ずしも正確に捉えられない場合があることが課題に挙げられる。本実験の妥当性を検証するためには、調査対象園での行動調査結果と比較分析すること等が今後の課題と考えられる。

参考文献

- 5.1) 野田正彰 漂白される子供たち, 情報センター出版局, 1988
- 5.2) 伊藤俊介, 長澤泰, 山下哲郎 小学校における場所の認識と空間の見えに関する研究 - 写真投影法による分析 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.77-78, 1996
- 5.3) 伊藤俊介, 長澤泰, 山下哲郎 児童の環境認識とその経過的变化に関する研究 - 写真投影法による 2 小学校の比較を通して -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.303-304, 1997
- 5.4) 曾英敏, 延藤安弘, 森永良丙 サスティナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画の研究 - 写真投影法による高根台団地の考察 -, 日本建築学会計画系論文集 No.549, pp.95-102, 2001.11
- 5.5) 古賀誉章, 高明彦, 宗方淳, 小島隆矢, 平手小太郎, 安岡正人 キャプション評価法による市民参加型景観調査 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その 1 -, 日本建築学会計画系論文集 No.517, pp.79-84, 1999.3
- 5.6) 小島隆矢, 古賀誉章, 宗方淳, 平手小太郎 多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その 2 -, 日本建築学会計画系論文集 No.560, pp.51-58, 2002.10

第6章

結論

- 6.1 各章のまとめ
- 6.2 保育施設に求められる環境整備の試論
- 6.3 本研究で取り扱った行動・心理の範囲
- 6.4 今後の課題

第6章 結論

6.1 各章のまとめ

ここでは、本研究で得られた知見についてまとめる。なお、第1章および第2章は研究の背景・目的及び研究の位置づけについて述べたものであり、ここでは省略する。

6.1.1 第3章 各室・空間における園児の滞在時間とその特性

第3章では、各室・空間における保育活動の時間的特性と建築計画的課題を明らかにすることを目的として、園児の行動観察調査を行った。

1) 園児の1日の保育活動時間に占める自由保育の割合は、園・学年により差がみられるが全体では概ね4割強である。学年別にみた場合、年少は年中・年長より自由保育活動の時間と空間の確保が重要な課題である。

2) 保育活動は自由保育、プログラム保育ともに保育室が拠点となる。この他屋内では魅力的な遊びコーナー、食事機能を有する遊戯室、屋外では固定遊具、土遊びができる自然環境・飼育小屋、ボール遊び・工作コーナー、回遊性のあるウッドデッキテラス、近隣の畑・公園等の機能が大きな役割を有している。

3) 年長は保育室と遊戯室、年少・年中は保育室と園庭が保育活動の拠点となり、これら諸室相互の関係に十分配慮する必要がある。

4) 保育活動における集団形成単位は、テラス・廊下や固定遊具では小集団、遊戯室や園庭では中・大集団が形成され、これらの集団形成単位に対応した空間規模の設定が重要である。

5) 自由保育における園児の滞在場所・時間は、特に高低差のある敷地や魅力的なしつらえ、保育室との近接・連続性等の空間特性に影響される。

以上を明らかにし、プログラム保育に特化した保育室以外に、自由保育で多様な活動が展開できる魅力的な各種内外空間をしつらえることが建築計画上の課題であることを主張した。

6.1.2 第4章 園児一人ひとりの遊び行為と各室・空間の関わり

第4章では、園児一人ひとりの遊び実態から各室・空間と環境要素の関係を把握することを試み、改めて詳細な分析を行った。

1) 保育施設の設計時に想定すべき基本的遊びは、動的遊び：固定遊具、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、走る、中間的遊び：砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、うた、楽器遊び、静的遊び：工作、ままごと、お絵かき、絵本読みの14種類である。

2) 基本的遊びのうち、動的遊びは園庭を中心として保育室、テラス・廊下、固定遊具へ領域が広がることを想定する必要がある。砂遊びは園庭やその他が中心であるが、自然環境や固定遊具でもみられるなど領域が広範囲である。砂遊び以外の中間的遊び・静的遊びは保育室のテーブル・イスや狭いスペースが中心となっている実情にある。ただし保育室機能軽減の観点からは、保育室以外に中間的・静的遊びの場所を設ける必要があると考えられる。

3) 園特有の遊びが発生するためには、特徴的な環境要素の組み合わせ方が重要となる。動的遊びは広いスペース、中間的遊びは広いスペースに加えて専用コーナーや高低差・段差、静的遊びはテーブル・イスや専用コーナーが中心となっているが、その関係性について園の保育方針との融合手法が設計上のポイントとなる。

4) 遊びの流れから環境要素の配置を鑑みると、遊びの切り替わりを想定した空間的余地、拠点とその周りの環境への働きかけ、環境要素の近接配置による領域の拡がりなどが計画上の留意点となる。

5) 複数の各室・空間で観察された遊びの特徴は、各室・空間完結型、屋内・半屋外完結型、保育室中心型、屋外連携型、バランス型の5つに分けられ、屋外連携型は女兒、バランス型は男児が該当する傾向にある。

6) 保育室は、静的遊びから動的遊びまで様々な遊びがみられ、屋外の滞在が少ない園児は動的遊びを保育室内で行っている。

7) 遊戯室はほとんどの園児が使用していない。それを改善するためには、接するテラス・廊下を日常的に使われる場所となるように幅員や形状を考慮するか、遊戯室を独立させず、可動間仕切り等でフレキシブルにして保育室の中に取り込んでしまうことも考えられる。

8) テラス・廊下の利用は、その場所にとどまって遊ぶことのできる一定の広さが必要な場合と、鬼ごっこのように様々な通り抜けが

できるような空間的配慮が必要な場合がある。また砂遊びが盛んな園では、土団子を隠す場所としてテラスの下駄箱が機能している。

9) 園庭は動的遊びのための広い場所と、砂遊びなどのとどまって遊ぶしつらえの両者が必要である。

10) 自然環境は各園の特徴を前面に出し、園庭、自然環境、固定遊具との連携に配慮した配置計画が求められる。特に探検は自然環境のみで発生している。

11) 固定遊具は、それ自体で遊ぶことができることに加えて、砂遊びや鬼ごっこの場所として園庭・自然環境との連携が重要となる。

12) その他は、各園の特徴を出す設計上のポイントであり、特徴的な環境要素が遊びの拠点となっている。具体的には、クラス単位で制作した拠点、屋外工作コーナー、屋外のテーブル、擁壁、ままごとコーナーなどが挙げられる。

13) 園児の滞在がみられた特徴的な環境要素・空間について、生活領域の概念に着目すると、屋内・半屋外・園舎のすぐ外側にある「身近な要素・空間」、保育室とその周辺から観察可能な「近傍の要素・空間」、保育室とその周辺から観察不可能な「遠方の要素・空間」に大別され、それぞれ園児の興味関心によって滞在する生活領域に差がみられる。

以上を明らかにし、様々な場所を行き来する園児のアクセスを重視した各室・空間の関係性を担保し、次に一つの場所にとどまって遊ぶ園児のため占有されるコーナーと共有されるコーナーを設ける計画手法を導き出した。また、特徴的な環境要素に含まれる5つの特性と遊びとの関係を整理し、動的遊びは広いスペースを中心とした環境要素同士の近接性、中間的・静的遊びは専用コーナーの多様さ、多目的コーナーと道具・素材が置かれた場所の整備が重要であることを把握した。

6.1.3 第5章 各部空間・要素に対する園児一人ひとりの認識・評価

第5章では、特色ある保育環境を有する4園において、ヒアリングを併用した園児に対する写真投影法実験を試行・実施した。

1) 施設別にみた撮影割合は、保育方針が造形中心の園では屋内〔制作物〕〔玩具・素材〕等が高く、コーナー保育実施により様々な空間利用が活発な園では屋内〔空間〕が高くなっている。園児が好きな撮影対象は施設毎の保育環境の違いと密接に関係していると考えられる。

2) 学年別にみた撮影割合は、低学年は屋内〔制作物〕〔園具〕が高く、高学年は屋内〔制作物〕〔空間〕が高いことから、低学年は保育施設内の小さな要素、高学年は大きな空間に興味・関心を有する傾向にあると考えられる。

3) 性別にみた撮影割合は、屋内〔制作物〕は男女で最も好まれ、〔園具〕〔飾り〕〔玩具・素材〕〔自然〕等は男女で撮影割合に差がみられる。屋外〔玩具・素材〕の撮影割合は全体でみると男児の方が女児よりも高く、特に積み木で差がみられる。

4) 園児の撮影対象パターンは、自然型、空間型、小要素型、園具型、固定遊具・空間型、固定遊具・制作物型、遊び素材型、制作物型の8つに分類される。これらの分類は施設別、学年別、性別の特徴がみられ、特に屋内の各部空間・要素は複数の対象が撮影される傾向にある。

5) 園児が興味・関心を有する幼稚園及び周辺的环境要素は、生活領域の概念で捉え直すと「身近な生活領域にあるもの（身近に存在し、教師が教材等で展示）」、「近傍の生活領域にあるもの（過去の保育・イベント活動等で体験）」、「遠方の生活領域にあるもの（日常利用・観察するもの）」の3つに大別される。

以上を明らかにし、通常の行動観察調査では一般に難しいと考えられる園児の環境に対する認識・評価の特性を捉えることについて、今回試行・実施した写真投影法実験の可能性について論じた。

6.2 保育施設に求められる環境整備の試論

本研究で得られた知見に基づいて、今後の保育施設環境整備で考慮すべき点について試論としてまとめたい。

1) 保育室機能の解体と再構築

現在の保育施設計画では最低基準面積が実質的な標準面積となる厳しい状況であるにも関わらず、保育室ではクラス単位で活動するスペースに加えて各種コーナーや身支度のスペースが整備されている。また、クラス単位のテリトリー意識により自由保育時に他クラスの保育室にアクセスすることが意識的な障壁となっており、遊びコーナーを保育室ごとに設定している実情にある。一方、第3章で指摘したように、自由保育だけではなく保育活動全体を通して保育室の滞在時間が長く、他の場所が有効に利用されていない。異年齢交流や他クラス園児との交流、さらには園児一人ひとりの遊び方に個性があることに配慮すると、例えばKaの屋外工作コーナーのように、これまで保育室内で設定されていた遊びコーナーを保育室の外に出し、他クラスの園児と共存できる場をつくることを提案したい。これはコーナー保育を実施している園ではすでに実施され、他クラスの園児との共存がみられており、年齢別のクラス編成を採用している園でも実現可能である。保育室内外の流動性担保の観点から考えると、各園の保育方針に応じて保育室の機能を一度解体して検討し、他の場所への移転を含めた再構築を設計上の選択肢としたい。現状では保育室内が活動の中心となっている中間的遊びや静的遊びにおいても、保育室以外にその拠点や遊び場所の設置の工夫を工夫することで園の保育方針に即した個性的な環境が生まれると思われる。

2) 保育施設で想定すべき基本的遊びと整備すべき環境

基本的遊びとして、固定遊具、動のごっこ遊び、鬼ごっこ、ボール遊び、走る、砂遊び、玩具遊び、ブロック遊び、うた、楽器遊び、工作、ままごと、お絵かき、絵本読みの14種類をピックアップした。このうち動的遊びは園庭を中心として様々な場所でも活動がみられ、各室・空間相互のアクセスの良さを担保する必要がある。また、砂遊びは砂場等の拠点から他の場所への働きかけを想定した計画が求められる。それ以外の中間的遊び・静的遊びは、現状では保

育室が中心となっているが、前述したとおり保育室の機能軽減を最優先し、遊びコーナーとして保育室以外に設置することを検討したい。また各遊びを成立させている空間構成・環境要素は一律にするのではなく、設計時に遊びが網羅されているかチェックすることとし、専用の遊びコーナーや多目的なコーナーなどを組み合わせることを想定している。各園の実情に応じて、それぞれの遊び拠点が隣接し、時には融合するような配置計画となることを期待したい。

3) 園児一人ひとりの個性からみた環境要素の配置

園児一人ひとりの遊びの移り変わりから考察した特徴として、遊びと遊びが切り替わる際に身を寄せることが可能な空間的余地の配置、拠点周辺に短時間滞在できる環境（専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差）の配置、遊び領域の拡がりや立ち寄り行為を促す環境要素・空間の近接配置などが挙げられる。また、遊びの領域をみると、ある遊びが各室・空間の中で完結している園児、屋内外の様々な場所を行き来する園児など、園児の興味・関心により遊びの場所利用特性が異なっており、両者の共存を想定した環境セッティングが求められる。具体的には自由保育のほぼすべてを同じ場所で過ごす園児がいたり、様々な場所を転々としながらそこで行われている遊びに加わる園児もいる。その時々で園児の主体性が担保されるような環境セッティングを目指す必要がある。

4) 試論のまとめ

図 6.1 は行動面からみた保育室機能の解体と各室・空間の再構築案を示したものである。保育室・遊戯室・園庭は、プログラム保育利用を想定して広いスペースやテーブル・イスを配置するとともに、それ以外の場所は自由保育に特化した場所として計画する。ただし、自由保育に特化した魅力的な場所を計画することで、プログラム保育の中でも使用されると推測される。なお、盛り込むべき機能・空間は、図 6.2 に再掲したダイアグラムと照らし合わせて検討する。

保育室：プログラム保育に特化した場所として再構築するが、集団になじむことが難しい園児のためのポケット的な場所として高低差・段差や狭いスペースを少し残しておくか、隣接させてすぐアクセスできるように計画する。専用コーナーは保育室以外に配置し、他クラスや異年齢交流を促す場所として計画する。

遊戯室：全学年が同時に使用するためのスペースを担保しようとすると自由保育では使用しにくい場所になってしまう。イベント時には稼働間仕切りを動かして広いスペースとするか、保育室の中にうまく取り入れることを想定し、遊びのための場所を取り入れるように計画したい。

テラス・廊下：移動・通過するためだけに留まらず、面積を確保し遊びの場所として計画したい。専用コーナーや狭いスペースを設け、静的・中間的遊びの場所として機能させる。

園庭：動的遊びのための場所を残しつつ、ただ単にフラットなグラウンドは計画せず高低差・段差を設けるようにしたい。専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペースは他場所と重複しても良いが、広いスペースからアクセスしやすい配置とする。

自然環境：敷地の端に配置されることが多いが、孤立させず周囲の場所との近接性・アクセスを担保することが肝心である。専用コーナー、テーブル・イス、高低差・段差が多様になるようにセッティングし、広いスペース、狭いスペースへのアクセスも担保する。

固定遊具：固定遊具自体で遊ぶことを想定するよりは、遊びの流れの中で固定遊具がどのように使用されうるのかを想定し配置する。固定遊具以外の遊び拠点の周辺に近接配置することで遊び領域を広げることが重視したい。

その他：園の保育方針に応じて魅力的な環境を配置することが重要で、その園にとってこの場所の意義を高めるように計画したい。

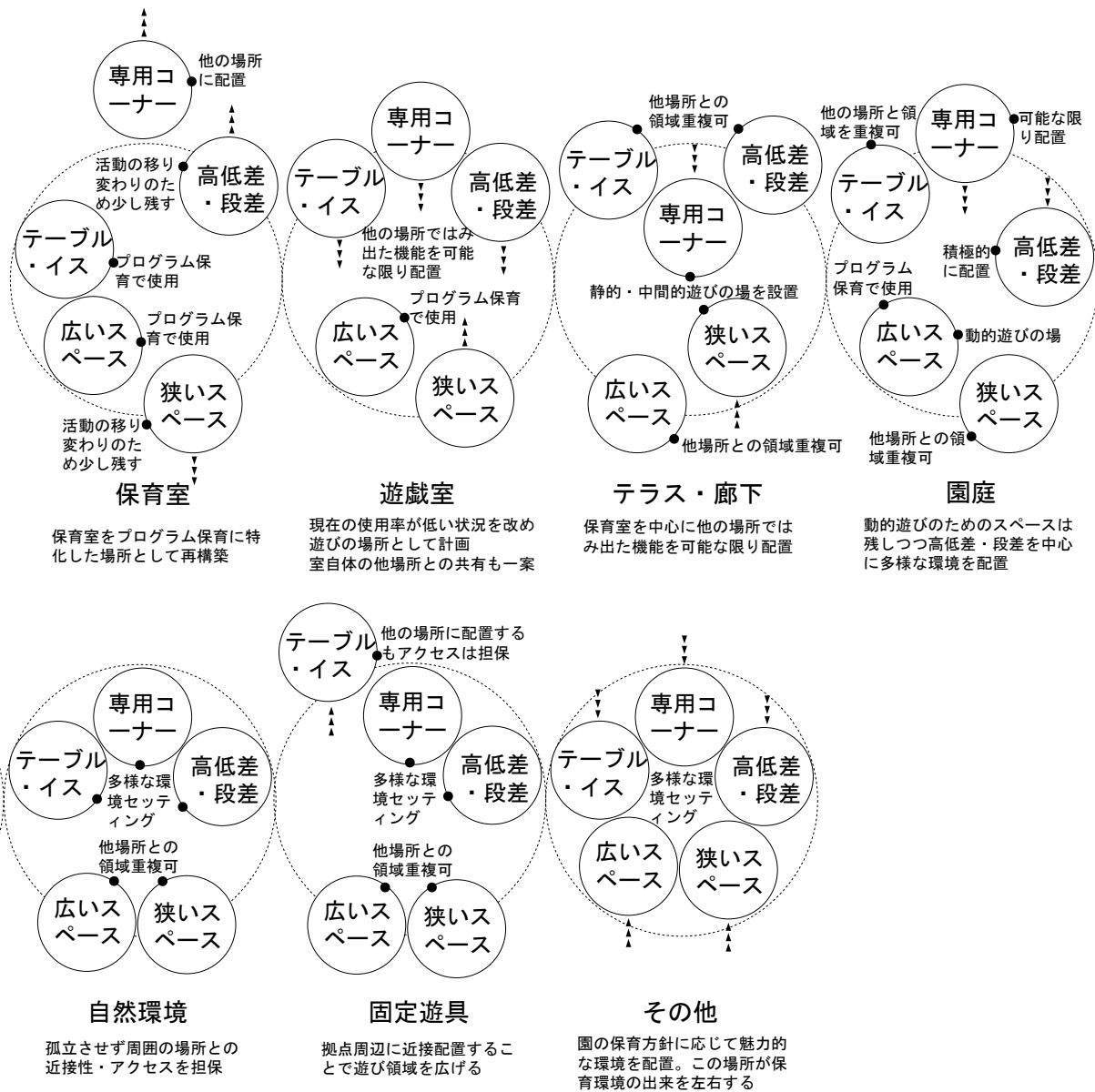


図 6.1 行動面からみた保育室機能の解体と各室・空間の再構築案

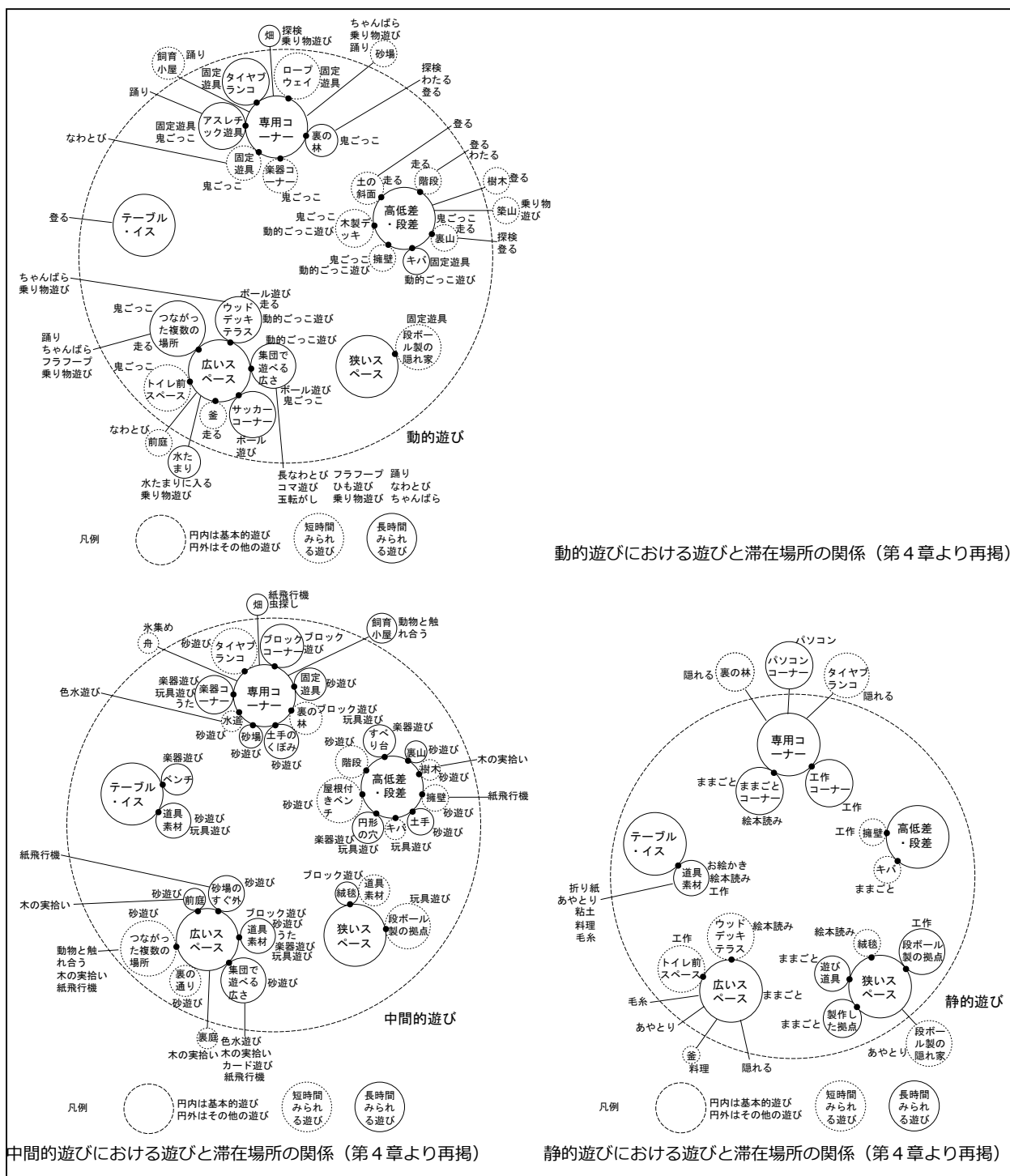


図 6.2 遊びの動きと滞在場所の特性 (専用コーナー/テーブル・イス/狭いスペース/広いスペース/高低差・段差)

6.3 本研究で取り扱った行動・心理の範囲

1) 心理的側面から環境を評価する意義

第5章で実施したヒアリング（Ay 男児）で、「この太鼓橋では良く遊んでいるけれど好きじゃない」という話を聞くことができた。行動観察調査で定量的に実態把握する場合、「その場所で遊んでいた」とカウント・評価することが一般的である。この園児の言葉を信じれば、行動観察で空間の評価を行う場合、参与観察などで丹念に子どもの動きをみるとともに、その表情や心の動きを見ることが必要になってくるが、心の動きまで把握することはなかなか難しい。そこで、行動観察に加えて、場所に対する心理的評価実験等を併用し、園児一人ひとりが有する場所に対する意味付けや評価を把握することが必要になってくる。また、環境と行動の関係は1対1対応ではなく、ある程度のゆらぎ・あいまいさがある点についても改めて認識する必要がある。園児が撮影した写真は、固定遊具など日々の遊びが評価されているもの、自ら製作したものに対する愛着形成などもみられるが、写真投影法を用いた実験の本質的意義は、行動では現れにくい事項について扱えたことである。すなわち、教諭が設置した展示物、過去の保育やイベントの記憶による愛着、日常的に観察している樹木や風景などである。これらに対して園児が好んでいることを把握できたことは、今後の保育施設環境評価および調査・実験手法を考える上で重要な視点になると思われる。

2) 本研究で得られた行動・心理的側面からの知見

表 6.1 は本研究で取り扱った行動的側面および心理的側面から得られた知見を整理したものである。ここでは設計段階に応じて、配置計画、各室・空間計画、コーナー計画に分けて整理する。

□配置計画

行動的側面：多様な遊び拠点を近接配置し、相互のアクセスを良くすることで遊びの領域を拡げる。また、動線のつながりと面的な広がりの方を踏まえて計画する。

心理的側面：空間全体や敷地外の風景を好んでいる園児もいることから、園児目線に即した眺望計画とする。

□各室・空間計画

行動的側面：園児の遊びの差異を鑑み、遊び拠点周辺的环境要素を多様化する。また、保育室の機能を軽減してプログラム保育に特化

させ、保育室以外に多様な遊び場所を用意する。

心理的側面：保育やイベントなどで見立てることを想定した特徴的な環境を用意する。

□コーナー計画

行動的側面：遊びの切り替わりを想定し、一時的に身を寄せる空間的余地を残す。また、各室・空間の計画時には、専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差が含まれているかチェックする。

心理的側面：教諭が飾り・空間演出がしやすいような環境構成とする。

3) 本研究で扱った行動・心理的側面の範囲

行動的側面および心理的側面で評価・観察された環境要素は数多く存在する。

行動的側面ではみられたが、心理的側面では表出されなかったものとしては遠方の園具が挙げられる。心理的評価では遠方の要素は空間全体や風景などであるが、園具といった環境要素の評価は不得手であることが示唆される。

行動的側面ではみられなかったが、心理的側面の評価があったものは、飾りや遠方の空間全体が挙げられる。飾りについては行動観察では把握することが難しいこと、空間全体は例えば敷地外ではそもそも行動が発生しないことが挙げられ、園児の興味関心を把握する上で、心理的評価の重要性が再認識される。

一方、どちらも表出されなかったものは遠方の飾り、玩具・素材、制作物などが挙げられるが、これらは調査・実験対象園に存在しないものである。すなわち、本研究の調査・実験対象では、行動観察とそれを補完する心理的実験である程度の評価が網羅されたと推察できる。

表 6.1 行動的側面と心理的側面からみた保育施設計画のポイント

	配置計画	各室・空間計画	コーナー計画
行動的側面	<ul style="list-style-type: none"> 多様な遊び拠点を近接配置し、相互のアクセスを良くすることで遊びの領域を広げる 動線のつながりと面的な広がり の双方を踏まえて計画する 	<ul style="list-style-type: none"> 園児の遊びの差異を鑑み、遊び拠点周辺の環境要素を多様化する 保育室の機能を軽減してプログラム保育に特化させ、保育室以外に多様な遊び場所を用意する 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの切り替わりを想定し、一時的に身を寄せる空間的余地を残す 専用コーナー、テーブル・イス、狭いスペース、広いスペース、高低差・段差が含まれているかチェックする
心理的側面	<ul style="list-style-type: none"> 空間全体や敷地外の風景を好んでいる園児もいることから、園児目線に即した眺望計画とする 	<ul style="list-style-type: none"> 保育やイベントなどで見立てることを想定した特徴的な環境を用意する 	<ul style="list-style-type: none"> 教諭が飾り・空間演出がしやすいような環境構成とする

6.4 今後の課題

本研究では取り扱えなかった課題について以下に列挙する。

1) 研究全般

□認定こども園・保育所との違い：本研究では幼稚園の自由保育を中心に論を展開しているが、基本的には保育施設全体に対して有用な知見であると確信している。ただし、特に保育室のあり方については、認定こども園、保育所で行われている午睡のスペースと布団等の収納場所、食寝分離なども機能に含める必要があるため、その扱いについて注意が必要である。

□行動追跡調査の限界：園児一人ひとりの登園から降園までの行動を記録・追跡する調査（行動追跡調査）は、保育施設で実施する場合、園児の動きが俊敏で、かつ移動の際も走って移動することが多く、記録時の写真撮影が常にできる状況ではない。例えば高齢者の行動追跡調査とは全く性格が異なるものであり、写真等で記録に残しておきたい活動場面があった場合でも、記録できていないこともある。そのあたりはビデオ撮影などと併用すれば可能とも推測できるが、園児一人につき2人以上の調査員が必要で、園児の行動への影響が懸念される。本研究では、非参与観察のスタンスを取り、ある行為の発生時刻、行為内容、活動場所、集団人数を記録することに終始したが、今後調査記録のあり方について、検討を重ねる必要があろう。GPS 追跡調査などと併用すれば行動軌跡は把握することができると思われるが、事前に園児に調査対象であることを知られてしまうため、その方法については注意が必要である。

□これまで行ってきた様々な調査・実験の結果：主に日本建築学会大会にて発表した様々な研究、例えば心理的側面では1/10 模型を使った心理評価実験、写真を使用した遊び評価実験などがあるが、今回の論文ではその内容を組み込むことができなかった。

□園以外の生活実態との関係：園児一人ひとりに着目し分析をしているが、行動的・心理的側面においても園だけが生活の場所ではない。日常の過ごし方や興味・関心など園以外の活動の様子をヒアリング等で把握し、比較・分析することも必要であったと思われる。

□行動と心理的評価の関わり：実施には入念な準備が必要となるが、園児一人ひとりを扱う場合、行動からの環境評価と心理からの環境評価を同じ園児で実施・分析できると、その違いなどについても論じることができた。

□調査対象園児の偏り：調査を依頼する関係上、調査対象園児数に差が出るのは仕方がないが、本論文では大きく差がある。予備調査を踏まえて、観察した園児が園の遊びの特徴を表していることは確認したが、追加調査が好ましいと考えられる。

□調査時期による遊びの異なり：本研究では、遊び・生活が落ち着いてきた11月以降を調査・実験時期としているが、年度当初の春～夏の活動実態については扱っていない。園によっても保育の流れがあり、必ずしも1年を通した環境評価の把握には至っていない。

2) 行動的側面

□自由保育以外で使われる空間のあり方：行動追跡調査は園児一人ひとりの登園から降園までを記録するもので、自由保育以外の活動の詳細も記録されている。第3章では時間的特性に着目し、自由保育を論文の中心とするための理論構築を試みたが、プログラム保育の多様性や問題点などについても論点と成りうる。特に認定こども園の計画に活かす場合、時間帯により園児数も増減するので、適切なプログラム保育の運用と空間の相互関係について有用な知見が得られる可能性が高い。

□面積配分・各種コーナーの大きさ：設計に活かすためには、使用している面積と活動内容、人数などを把握し、人的密度として場を評価する必要がある。該当するコーナーを絞ったうえで定点観察する等の対応であれば把握できるが、園児一人ひとりを追跡する調査では判断するのが難しく、その手法について検討する必要がある。

3) 心理的側面

□心理的評価と経年変化の関係：園児における心理的評価の経年変化等、時系列で実験を進めた場合の変化の有無などについて、きめ細やかに把握する必要がある。

□写真投影法にヒアリングを併用した意義：小学生を対象とした既往研究では、児童に様々な写真を撮らせて環境を評価していたが、園児に対しては発達段階に個人差があり、予備実験の結果「好きな場所」を撮影してもらうことに留まっている。ヒアリングを併用し、丁寧にやり取りをする中でコメントの分析を含めた実験手法の開発が求められる。

引用・参考文献
図表一覧
研究業績一覧
謝辞

引用・参考文献

■第1章

- 1.1) J. ラング (著)・今井ゆりか (訳)・高橋鷹志 (監訳)：建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割, 鹿島出版会, 1992.08
- 1.2) 日本建築学会編：よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門, 技法堂出版, 2000.05
- 1.3) 長澤泰・岡本和彦・伊藤俊介：建築地理学—新しい建築計画の試み, 東京大学出版会, 2007.05
- 1.4) 前田昌弘：「再定住社会」のデザインに向けた住宅・地域計画の研究と実践, 建築・都市・農村計画研究のカットニングエッジ - 若手研究者は研究テーマといかに出会い、発展させてきたか -, 日本建築学会, 2018.09
- 1.5) 日本建築学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法 (改訂版), 井上書院, 2012.05
- 1.6) 森上史朗・柏女霊峰編：保育用語辞典, ミネルヴァ書房, 2000.12
- 1.7) 文部省：学制百年史, 1981.9
- 1.8) 文部省：幼稚園設置基準, 1956.12 (昭和 31 年 12 月)
- 1.9) 山田あすか・藤田大輔：建築設計テキスト 保育施設, 彰国社, 2017.04
- 1.10) 日本建築学会編：こどもの環境づくり事典, 青弓社, 2014.09
- 1.11) 新建築 2007 年 5 月号, 新建築社, 2007.05
- 1.12) 文部科学省：幼稚園教育要領, 2017.03
- 1.13) 幼稚園施設整備指針, 2018.3
- 1.14) 厚生労働省：保育所等における保育の質の確保・向上に関する基礎資料, 2018.05
- 1.15) 奈良県橿原市：保育所と幼稚園と認定こども園との比較表, 2008.08

■第2章

- 2.1) 白川 賀津子・定行 まり子：保育・教育思想に基づく保育施設の空間特性 - モンテッソーリ教育とハンガリーの保育実践を対象として -, 日本建築学会計画系論文集, No.734, pp.877-884, 2017.04
- 2.2) 高橋節子・元岡展久：モンテッソーリ保育所における物理的環境 - 非モンテッソーリ保育所との比較による検討 -, 日本建築学会技術報告集, No.44, pp.207-212, 2014.02
- 2.3) 今川峰子：幼稚園児の社会的行動に影響する保育空間と保育理念, 人間・環境学会誌, 2 巻 2 号, pp.21-27, 1996
- 2.4) 北浦かほる・木下恵津子：夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 夜間保育所の保育環境整備に向けて (3), 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.37-45, 2004.01
- 2.5) 北浦かほる・木下千絵・萩原美智子・木下恵津子：保育環境としての子どもの生活空間の検討 夜間保育所の保育環境整備に向けて (2), 日本建築学会計画系論文集, No.568, pp.33-40, 2003.06
- 2.6) 北浦かほる・萩原美智子：保育環境としての遊び空間のあり方 夜間保育所の保育環境整備に向けて, 日本建築学会計画系論文集, No.563, pp.139-146, 2003.01
- 2.7) 小池孝子・近藤ふみ・定行まり子：保育施設の物理的環境指標に関する考察 - 全国認可保育所の施設環境実態調査を通して -, 日本建築学会技術報告集, No.48, pp.759-764, 2015.06
- 2.8) 宮本文人・稲村友子・仲綾子・長瀬有紀子：幼保連携施設における多様な連携形態と保育室の配置, 日本建築学会計画系論文集, No.679, pp.2035-2042, 2012.09
- 2.9) 倉斗綾子・山田あすか・佐藤将之・古賀誉章：就学前保育施設の施設状況とその評価 - 全国保育施設アンケート調査より -, 日本建築学会技術報告集, No.31, pp.865-870, 2009.10
- 2.10) 山田あすか・佐藤栄治・佐藤将之・樋沼綾子：幼保一体型施設における運営様態, 混合保育, 活動場所の変遷に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.625, pp.543-550, 2008.03
- 2.11) 宮本文人・中尾友子：幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間, 日本建築学会計画系論文集, No.611, pp.45-51, 2007.01
- 2.12) 小池孝子・定行まり子：東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.605, pp.47-53, 2006.07
- 2.13) 山田恵美・服部岑生：保育園施設の建築計画の実態と保育室の使われ方に関する調査報告, 日本建築学会技術報告集, No.21, pp.239-242, 2005.06
- 2.14) 近藤ふみ・定行まり子：保育所における 0 歳児の食事・午睡・あそびの行為と面積について, 日本建築学会計画系論文集, No.653, pp.1647-1654, 2010.07
- 2.15) 近藤ふみ・定行まり子：保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について, 日本建築学会計画系論文集, No.645, pp.2371-2377, 2009.11

- 2.16) 西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.319-327, 2014.02
- 2.17) 西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1257-1264, 2013.06
- 2.18) 細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, No.639, pp.1029-1035, 2009.05
- 2.19) 山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.637, pp.549-557, 2009.03
- 2.20) 細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, No.634, pp.2565-2572, 2008.12
- 2.21) 西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.601, pp.47-55, 2006.03
- 2.22) 正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究, 日本建築学会計画系論文集, No.714, pp.1765-1773, 2015.08
- 2.23) 山田あすか：東京都内の種別が異なる小規模保育拠点における都市環境の利用・評価に関する研究 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1069-1078, 2016.05
- 2.24) 太幡英亮・古川智之・恒川和久・生田京子・谷口元：保育園児の散歩行動と街路環境の関係 - 名古屋市認可保育所での散歩行動観察を通じて -, 日本建築学会計画系論文集, No.689, pp.1533-1542, 2013.07
- 2.25) 小林陽・山田あすか：東京都家庭福祉員制度での拠点内の環境づくりと都市環境の利用・評価に関する研究 - 小規模保育拠点とその保育の場となる都市環境のあり方についての研究その1 -, 日本建築学会計画系論文集, No.681, pp.2507-2516, 2012.11
- 2.26) 山田あすか：拠点外空間での保育に着目した小規模保育拠点運営の実態と保育者による都市環境評価 京都・屋間里親と大阪・保育所分園制度を対象として, 日本建築学会計画系論文集, No.658, pp.2789-2798, 2010.12
- 2.27) 松橋圭子・三輪律江・田中稲子・谷口新・大原一興・藤岡泰寛：保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究 - 横浜市を対象としたアンケート調査より -, 日本建築学会計画系論文集, No.651, pp.1017-1024, 2010.05
- 2.28) 小池孝子・定行まり子：都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, No.628, pp.1197-1204, 2008.06
- 2.29) 樋沼綾子・山田あすか・上野淳：幼保一体型施設における活動場面展開の実態と園児のなじみの過程, 日本建築学会計画系論文集, No.638, pp.771-779, 2009.04
- 2.30) 吉田祥子・森傑：園児の協働による遊びから見た遊び環境と自主創造的遊びに関する研究 札幌市の市立幼稚園の三歳児と五歳児の比較, 日本建築学会計画系論文集, No.609, pp.25-32, 2006.11
- 2.31) 山田あすか・上野淳：保育所における園児の居場所の反復性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.602, pp.35-42, 2006.04
- 2.32) 山田あすか・上野淳・登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集, No.587, pp.49-56, 2005.01
- 2.33) 山田あすか・上野淳・登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その1), 日本建築学会計画系論文集, No.580, pp.57-64, 2004.06
- 2.34) 佐藤将之・西出和彦・高橋鷹志：遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その2, 日本建築学会計画系論文集, No.575, pp.29-35, 2004.01
- 2.35) 佐藤将之・高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, No.562, pp.151-156, 2002.12
- 2.36) 宮崎文夏・山田あすか・青木隆太郎・金子亜里砂・高瀬敦・八角隆介：H保育園での活動実態と環境づくりの効果の検証 1歳児室を対象として, 日本建築学会技術報告集, No.56, pp.313-316, 2018.02
- 2.37) 坂戸省三・東野 Adriana・河内あゆ：ブラジルと日本の幼児の箱庭制作に見る文化的差異の起源, 日本建築学会計画系論文集, No.750, pp.1551-1561, 2018.08
- 2.38) 坂戸省三・河内あゆ・東野 Adriana：保育園児の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源, 日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1227-1237, 2016.05
- 2.39) 伊藤美春・山田あすか：就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.695, pp.79-87, 2014.01
- 2.40) 早川垂希・橋本雅好・佐藤将之：幼児の指示代名詞による領域分節に関する実験的研究, 日本建築学会計画系論文集, No.669, pp.2101-2107, 2011.11

- 2.41) 柳沢和彦・岡崎甚幸・高橋ありす：風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察 幼稚園児から大学生までの作品を通して、日本建築学会計画系論文集、No.546,pp.297-304,2001.08
- 2.42) 柳沢和彦・岡崎甚幸・菊池憲一・難波美絵：幼稚園児の居住空間構成法と描画に見る図式の研究、日本建築学会計画系論文集、No.519,pp.309-316,1999.05
- 2.43) 岡崎甚幸・柳沢和彦・難波美絵：居住空間構成法と幼稚園児、日本建築学会計画系論文集、No.518,pp.313-320,1999.04

■第3章

- 3.1) 北浦かほる,萩原美智子：保育環境としての遊び空間のあり方 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて - 日本建築学会計画系論文集 No.563, pp139-146, 2003.1
- 3.2) 北浦かほる,木下千絵,萩原美智子,木下恵津子:保育環境としての子どもの生活空間の検討 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (2)- 日本建築学会計画系論文集 No.568, pp33-40, 2003.6
- 3.3) 北浦かほる,木下恵津子:夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化 - 夜間保育所の保育環境整備に向けて (3)- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp37-45, 2004.1
- 3.4) 佐藤将之,高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その1- 日本建築学会計画系論文集 No.562, pp151-156, 2002.12
- 3.5) 佐藤将之,西出和彦,高橋鷹志：遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察 - 園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その2- 日本建築学会計画系論文集 No.575, pp29-35, 2004.1
- 3.6) 山田あすか,上野淳,登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その1)- 日本建築学会計画系論文集 No.580, pp57-64, 2004.6
- 3.7) 山田あすか,上野淳,登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析 - 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その2)- 日本建築学会計画系論文集 No.587, pp49-56, 2005.1
- 3.8) 小川信子：子どもの生活と保育施設 彰国社 2004.7

■第4章

- 4.1) 西本雅人・今井正次・木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究,日本建築学会計画系論文集、No.601,pp.47-55,2006.03
- 4.2) 西本雅人・河合慎介・今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1,日本建築学会計画系論文集、No.688,pp.1257-1264,2013.06
- 4.3) 西本雅人・河合慎介・今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究その2,日本建築学会計画系論文集、No.696,pp.319-327,2014.02
- 4.4) 細谷俊子・積田洋・青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究,日本建築学会計画系論文集、No.634,pp.2565-2572,2008.12
- 4.5) 細谷俊子・積田洋・鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析,日本建築学会計画系論文集、No.639,pp.1029-1035,2009.05
- 4.6) 山田恵美・佐藤将之・山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究,日本建築学会計画系論文集、No.637,pp.549-557,2009.03
- 4.7) 正田博之・山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究,日本建築学会計画系論文集、No.714,pp.1765-1773,2015.08

■第5章

- 5.1) 野田正彰 漂白される子供たち,情報センター出版局,1988
- 5.2) 伊藤俊介,長澤泰,山下哲郎 小学校における場所の認識と空間の見えに関する研究 - 写真投影法による分析 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.77-78, 1996
- 5.3) 伊藤俊介,長澤泰,山下哲郎 児童の環境認識とその経過的変化に関する研究 - 写真投影法による2小学校の比較を通して -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.303-304, 1997
- 5.4) 曾英敏,延藤安弘,森永良丙 サスティナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画の研究 - 写真投影法による高根台団地の考察 -, 日本建築学会計画系論文集 No.549,pp.95-102,2001.11
- 5.5) 古賀誉章,高明彦,宗方淳,小島隆矢,平手小太郎,安岡正人 キャプション評価法による市民参加型景観調査 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1-, 日本建築学会計画系論文集 No.517, pp.79-84,1999.3
- 5.6) 小島隆矢,古賀誉章,宗方淳,平手小太郎 多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その2-, 日本建築学会計画系論文集 No.560,pp.51-58,2002.10

図表一覧

■第1章

図 1.1	むさしの幼稚園 平面図
図 1.2	みどりの保育園 平面図
図 1.3	ふじようちえん 平面図
図 1.4	きたの保育園 平面図
図 1.5	ささべ認定こども園 平面図
図 1.6	認定こども園こどものもり 平面図
図 1.7	新宿せいが保育園 平面図
図 1.8	どろんこ保育園 平面図
図 1.9	まちの保育園 小竹向原 平面図
表 1.1	保育所・認定こども園・幼稚園の園児割合(%) (平成29年度)
表 1.2	保育所・認定こども園・幼稚園における事業内容と設備・面積等の違い

■第2章

表 2.1	近年の先行研究整理 その1 (保育方針と空間特性/施設全体のあり方/平面・空間分析)
表 2.2	近年の先行研究整理 その2 (単位区間・面積/保育室/園庭/敷地外空間/環境行動/環境改善実践)
表 2.3	近年の先行研究整理 その3 (敷地外空間つづき/環境行動/環境改善実践)
表 2.4	近年の先行研究整理 その4 (心理的評価)
図 2.1	本研究のフロー

■第3章

表 3.1	調査対象幼稚園の概要
表 3.2	調査対象幼稚園の調査実施日
図 3.1	調査対象幼稚園の配置図・平面図
図 3.1a	調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Ay 幼稚園・Ii 幼稚園
図 3.1b	調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Ib 幼稚園・Ka 幼稚園
図 3.1c	調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Ke 幼稚園・To 幼稚園
図 3.1d	調査対象幼稚園の配置図・平面図 (拡大) Yu 幼稚園
表 3.3	保育活動の分類
図 3.2	調査対象幼稚園の典型的な保育活動の流れ (年中児)
図 3.3	園別保育活動時間
図 3.4	学年別保育活動時間
表 3.4	各室・空間の分類
図 3.5	保育活動別各室・空間別の滞在時間
写真 3.1	Ke 年少保育室の遊びコーナー
写真 3.2	Ii 土手のくぼみ
写真 3.3	To サッカーコーナー
写真 3.4	Ka 工作コーナー
図 3.6	自由保育における園別各室・空間別の滞在時間
図 3.7	Yu 回遊ができる各室・空間の配置
図 3.8	プログラム保育における園別各室・空間別の滞在時間
写真 3.5	Ke 機械体操設備のある体育館
写真 3.6	Yu 敷地に隣接した公園
図 3.9	自由保育における学年別各室・空間別の滞在時間
図 3.10	プログラム保育における学年別各室・空間別の滞在時間
表 3.5	プログラム保育における集団形成単位の分類
図 3.11	自由保育における各室・空間別の集団形成単位
図 3.12	プログラム保育における各室・空間別の集団形成単位
写真 3.7	Yu 年中保育室内の様子
写真 3.8	Ay 玄関ホールと年長保育室
図 3.13	自由保育における学年別の滞在场所と空間特性 (Yu・Ay・Ka 幼稚園)
図 3.14	幼児の滞在行動を誘発する場所と空間特性
図 3.15	各室・空間別にみた保育活動時間の特性

■第4章

図 4.1	調査対象幼稚園の配置図・平面図 (再掲)
表 4.1	遊びが観察された各園の特徴的な環境要素
表 4.2	観察された遊びの分類
表 4.3	Ay における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.2	製作した拠点を中心としたままごと遊びの流れ (Ay 年長女児)
図 4.3	アスレチック遊具で行われる踊りとその前後の行為 (Ay 年中男児)
図 4.4	遊具庭の様々な場所で行われる砂遊び (Ay 年中男児)
図 4.5	Ay における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.1	最上部のグラウンド (園庭)
写真 4.2	敷地中段にある遊具庭
写真 4.3	園舎周りにある水道
写真 4.4	テーブルについて絵本読み

写真 4.5	テーブルで粘土遊び
写真 4.6	保育室（年少クラス）
写真 4.7	クラス全員で製作した拠点
写真 4.8	砂場とアスレチック遊具
写真 4.9	土の斜面を走っている園児
表 4.4	Ii における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.6	段ボール製の隠れ家で行われている遊びと土手のくぼみを中心とした砂遊びの流れ（Ii 年少男児）
図 4.7	Ii における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.10	屋根付きベンチ
写真 4.11	土手のくぼみ
写真 4.12	人工芝が敷かれたテラス
写真 4.13	幅員の広いテラス
写真 4.14	土団子に白砂をまぶす場所
表 4.5	Ib における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.8	年少保育室のままごと風景
図 4.9	年少保育室前庭で展開されている木の実拾いと砂遊びの流れ（Ib 年少女児）
図 4.10	Ib における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.15	遊びが行われる絨毯
写真 4.16	保育室と一体になった廊下
写真 4.17	行き来が容易な年少保育室
写真 4.18	砂遊びが行われている前庭
表 4.6	Ka における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.11	タイヤブランコおよび土手で行われている砂遊びの流れ（Ka 年長男児）
図 4.12	屋外工作コーナーとその周辺で行われている工作遊びの流れ（Ka 年中男児）
図 4.13	擁壁上部と園庭で行われている紙飛行機遊びの流れ（Ka 年中男児）
図 4.14	様々な場所で踊っている遊びの流れ（Ka 年長女児）
図 4.15	Ka における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.19	園外の畑
写真 4.20	クラスで飼育しているウサギ
写真 4.21	砂場
写真 4.22	土手と階段
写真 4.23	屋外のテーブル
写真 4.24	擁壁の上部（園舎周り）
写真 4.25	グラウンド（園庭）と擁壁
写真 4.26	屋外工作コーナー
表 4.7	Ke における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.16	円形の穴がある年少保育室で展開されている遊びの流れ（Ke 年少男児）
図 4.17	裏の林とその周囲で行われている探検遊びの流れ（Ke 年少女児）
図 4.18	Ke における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.27	円形の穴（年少保育室）
写真 4.28	段ボール製の拠点
写真 4.29	裏の林に向かう途中に平均台
写真 4.30	探検が行われる裏の林
表 4.8	To における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.19	キバとその周辺で行われている遊びの流れ（To 年中男児）
図 4.20	大根掘りから料理およびウサギ小屋とその周辺で行われている一連の遊び（To 年少女児）
図 4.21	To における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.31	二段ベッドのようなキバ
写真 4.32	サッカーコーナー
写真 4.33	楽器演奏をしているベンチ
写真 4.34	園庭に設けられた釜
写真 4.35	くつろぐこともできるテラス
表 4.9	Yu における観察された遊びと各室・空間および特徴的な環境要素の関わり
図 4.22	遊戯室・ウッドデッキテラス・保育室を連続的に使用する遊びの流れ（Yu 年中男児）
図 4.23	ままごとコーナーを中心としたままごと遊びの流れ（Yu 年少女児）
図 4.24	Yu における学年・性別にみた各室・空間の滞在割合と複数の場所で観察された遊び
写真 4.36	分棟の保育室・遊戯室とテラス
写真 4.37	ままごとコーナー
写真 4.38	花いちもんめ（遊戯室）
写真 4.39	電車ごっこ（テラス・廊下）
表 4.10	場所と行為の関係からみた空間の特性
表 4.11	4 園以上で観察された遊びと各室・空間の組み合わせ（基本的遊び）
表 4.12	基本的遊びのうち 3 園以下であった遊びと各室・空間の組み合わせ
表 4.13	3 園以下で観察された遊びと各室・空間の組み合わせ（その他の遊び）
図 4.25	遊びの切り替わりに関わる活動実態（抜粋）
図 4.26	拠点とその周りの環境へ働きかけている活動実態（抜粋）
図 4.27	環境要素の近接配置により拡がっている活動実態（抜粋）
表 4.14	学年・性別にみた複数の各室・空間で行われる遊びのタイプ分類
図 4.28	各室・空間完結型の事例

- 図 4.29 屋内・半屋外完結型の事例
- 図 4.30 保育室中心型の事例
- 図 4.31 屋外連携型の事例
- 図 4.32 バランス型の事例
- 表 4.15 園児別にみた動的ごっこ遊びで滞在している場所
- 表 4.16 園児別にみた鬼ごっこ遊びで滞在している場所
- 表 4.17 園児別にみた探検で滞在している場所
- 表 4.18 園児別にみた踊りで滞在している場所
- 表 4.19 園児別にみた砂遊びで滞在している場所
- 表 4.20 園児別にみた玩具遊びで滞在している場所
- 表 4.21 園児別にみたブロック遊びで滞在している場所
- 表 4.22 園児別にみた工作で滞在している場所
- 表 4.23 園児別にみたままごとで滞在している場所
- 表 4.24 観察した全園児の遊びと滞在場所の実態
- 表 4.25 滞在場所からみた自由保育における園児の活動タイプ
- 図 4.33 各室・空間の行き来を重視した配置ダイアグラム
- 図 4.34 動的遊びにおける遊びと滞在場所の関係
- 図 4.35 中間的遊びにおける遊びと滞在場所の関係
- 図 4.36 静的遊びにおける遊びと滞在場所の関係

■第5章

- 表 5.1 実験対象施設の空間的特徴
- 図 5.1a 実験対象施設の平面図・写真 (Ay 幼稚園・Ii 幼稚園)
- 図 5.1b 実験対象施設の平面図・写真 (Ka 幼稚園・Ke 幼稚園)
- 写真 5.1 遊戯室にあるひな壇 (Ii)
- 写真 5.2 教諭がつくった基地 (Ka)
- 写真 5.3 ままごとコーナー (Ke)
- 写真 5.4 年長保育室のデン (Ke)
- 表 5.2 撮影対象の分類
- 表 5.3 施設別・学年別・性別にみた撮影割合
- 写真 5.5 積み木 (Ay)
- 図 5.2 園児の撮影パターン (クラスター分析)
- 写真 5.6 花瓶に生けられた花 撮影：Ay 年少女児 f8
- 写真 5.7 保育室からの屋外風景 撮影：Ay 年中女児 b3
- 写真 5.8 四輪車 撮影：ke 年中男児 c1
- 写真 5.9 個人ロッカー 撮影：Ii 年中女児 d4
- 写真 5.10 滑り台 撮影：Ke 年中男児 e1
- 写真 5.11 制作した工作物 撮影：Ka 年長女児 e6
- 写真 5.12 かごに入った毛糸 撮影：Ay 年中男児 g1
- 写真 5.13 壁に掲示されている絵 撮影：Ay 年中女児 f4
- 図 5.3 保育施設各部空間・要素と撮影対象パターンの関係
- 表 5.4 生活領域の概念からみた園児の興味・関心対象
- 写真 5.14 教諭が作成した壁面装飾 撮影：Ke 年少女児 a3
- 写真 5.15 タペストリー 撮影：Ay 年中男児 f7
- 写真 5.16 保育室のトップライト 撮影：Ay 年長男児 g3
- 写真 5.17 階段上部の造花 撮影：Ka 年中女児 f2
- 写真 5.18 斜面に植えられた樹木 撮影：Ay 年長女児 a2
- 写真 5.19 園庭から俯瞰した町並み 撮影：Ii 年長男児 b4
- 写真 5.20 空に浮かぶ雲 撮影：Ii 年中男児 d7
- 写真 5.21 グラウンドの風景 撮影：ka 年少男児 d5

■第6章

- 図 6.1 行動面からみた保育室機能の解体と各室・空間の再構築案
- 図 6.2 遊びの動きと滞在場所の特性 (専用コーナー/テーブル・イス/狭いスペース/広いスペース/高低差・段差)
- 表 6.1 行動面と心理面からみた保育施設計画のポイント

研究業績一覧

■■■本論文に深く関連する業績

1. 学術論文（査読有）

- 1) 藤田大輔,山崎俊裕:写真投影法を用いた園児の幼稚園各部空間・要素に対する認識・評価実験,日本建築学会技術報告集 第25巻 第59号, pp.287-292, 2019.02 [第5章に関連]
- 2) 藤田大輔,山崎俊裕:幼稚園各室・空間における保育活動の時間的特性について,日本建築学会計画系論文集 vol.599,pp.203-208,2006.01 [第3章に関連]

2. 学術論文・雑誌

- 1) 藤田大輔:構築環境と園児の遊び 保育の実践と研究 vol.5, No.3, pp.1-15, 2000.12 [第4章に関連]

3. 口頭発表

- 1) 藤田大輔:写真投影法を用いた園児一人ひとりの構築環境に対する評価傾向,日本建築学会北陸支部研究報告集, pp.407-408, 2016.7 [第5章に関連]
- 2) 藤田大輔:こどもの動きからみた遊び場に求められる空間要素 - 遊び動線の特徴からみた空間要素・特徴の評価 - 日本保育学会大会発表論文集, p.315, 2010.5 [第4章に関連]
- 3) 藤田大輔, 山崎俊裕:各学年における活動実態の差からみた幼稚園計画に関する考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.47-48, 2004.9 [第4章に関連]
- 4) 藤田大輔:園児の遊び実態からみた幼稚園の屋外空間構成に関する試論 日本保育学会大会発表論文集, pp.2-3, 2004.5 [第4章に関連]
- 5) 藤田大輔, 山崎俊裕:幼稚園における園児の活動実態と空間構成の関わり 日本建築学会東海支部研究報告集, pp.557-560, 2004.2 [第4章に関連]
- 6) 藤田大輔:写真投影法を用いた幼稚園環境と園児の評価に関する研究 日本建築学会東海支部研究報告集, pp.693-696, 2003.2 [第5章に関連]
- 7) 藤田大輔:幼稚園における園児の構築環境に対する嗜好評価 日本保育学会大会発表論文集, pp.340-341, 2001.5 [第5章に関連]
- 8) 藤田大輔・山崎俊裕:写真投影法による園児の幼稚園環境に対する嗜好・評価実験 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.97-98, 2000.9 [第5章に関連]
- 9) 藤田大輔:幼稚園における遊び行動と構築環境の相互関係 日本保育学会大会発表論文集, pp.334-335, 2000.5 [第4章に関連]
- 10) 藤田大輔・山崎俊裕:幼稚園の遊び行為と構築環境の特性に関する考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.203-204, 1999.9 [第4章に関連]
- 11) 藤田大輔・山崎俊裕・加藤政貴:幼稚園の構築環境に対する園児の意識と評価に関する研究 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.201-202, 1999.9 [第5章に関連]
- 12) 藤田大輔・山崎俊裕・小島隆一:幼稚園における園児の遊び・生活行動の実態調査 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.295-296, 1998.9 [第4章に関連]
- 13) 藤田大輔・山崎俊裕:幼稚園における遊び行動の誘発要因に関する考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.297-298, 1998.9 [第4章に関連]
- 14) 藤田大輔・山崎俊裕:幼稚園の環境構成要素と園児の遊び・生活行動との対応に関する研究 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, pp.253-254, 1997.9 [第3・4章に関連]

4. 著書・報告書等

- 1) 長倉康彦・上野淳・井上寿・仙田満・藤田大輔・茂木弥生子・山崎俊裕:公立学校建物の標準面積(幼稚園)に関する調査研究報告書, 日本建築学会, 1998.7 [第2章に関連]

■ ■ 関連する業績

2. 学術論文・雑誌

- 1) 藤田大輔：保育施設の計画・運営における震災防止に関わるキーワード，2018年度日本建築学会大会（東北）特別研究部門 研究懇談会資料 人為的要因による震災の防止・軽減に向けた技術・社会のあり方について，pp.45-46、2018.9
- 2) 藤田大輔・山田あすか：環境行動から考える保育空間（特集対談） 新建築 2018年6月号，pp.42-45、2018.6
- 3) 藤田大輔：遊び・生活の魅力を高める環境 - 保育施設的环境づくり - Jiha 医療福祉建築 181号，pp.8-9、2013.10
- 4) 藤田大輔：蓄積と自動化を意識した研究姿勢のすすめ - 就学前施設の提案と実践 -，日本建築学会大会PD（建築計画）資料 統合的視野からの建築計画学的実践， pp.11-20、2012.9
- 5) 藤田大輔：「自治体と旗艦施設へのヒアリング調査による幼保一体型施設の運営実態に関する報告」の評論 日本建築学会技術報告集 第25号，p.379、2007.6

3. 口頭発表

- 1) 藤田大輔：動的・自然遊びを重視した福井市のこども園における空間構成と活動の関わり，日本建築学会北陸支部研究報告集，pp.260-261、2017.7
- 2) 藤田大輔：プレーパークにおける居場所の魅力を高める拠点 ～森とヤギのプレーパークにおける子どもとの協働制作～，こども環境学研究 vol.13, No.1, p.43、2017.5
- 3) 藤田大輔：0～2歳児保育空間における開設当初の使われ方 - 食・寝・遊・身支度スペースが連続的につながった園におけるケーススタディ，日本建築学会学術講演梗概集 E-1 pp.67-68、2016.8
- 4) 藤田大輔・小柳峻一：福井市における子どもの居場所の魅力を高める遊具の制作，こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第5号 pp.12-13、2016.9
- 5) 藤田大輔：こどもを包む木のフレーム 木もれ陽保育園 日本建築学会建築デザイン発表梗概集 G-1、pp.186-187、2015.9
- 6) 藤田大輔：幼保連携型こども園新設における低年齢児保育空間の検討 日本保育学会大会発表論文集 p.97、2015.5
- 7) 藤田大輔：保育園における1・2歳児の遊びスペースのあり方に関する考察 - デッキと保育室がゆるやかにつながった園におけるケーススタディ，こども環境学研究 vol.11, No.1, p.73、2015.4
- 8) 藤田大輔：活動実態からみた低年齢児の保育室空間のあり方 - 食・寝・遊が分離された保育所におけるケーススタディ - 日本建築学会学術講演梗概集 E-1、p.351-352、2014.9
- 9) 藤田大輔：幼児の遊び行動からみたリスクを取り入れた固定遊具のあり方，日本保育学会第67回大会発表論文集，p.86、2014.5
- 10) 藤田大輔：固定遊具における幼児の行動特性とリスクの抽出 - 登る行為を誘発する自作固定遊具を用いた検証 -，MERA Journal 第31号，p.40、2013.10
- 11) 藤田大輔：異年齢保育実施園の生活実態からみた保育方針に応じた空間のあり方，こども環境学会合同セミナー梗概集第2号 pp.20-21、2013.9
- 12) 藤田大輔：登る行為に着目した幼児の遊び環境におけるリスクの抽出，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、pp.767-768、2013.9
- 13) 藤田大輔：保育園の設計に関わる行動観察調査の視点，こども環境学会合同セミナー梗概集 第1号 pp.5-6、2012.9
- 14) 福地貴文・藤田大輔：自作固定遊具を用いた遊び行動におけるリスクの抽出，こども環境学研究 vol.8, no.1, p.51、2012.4
- 15) 岩田卓也・藤田大輔：異年齢保育を導入した保育園の有効な点と課題点，こども環境学研究 vol.8, no.1, p.54、2012.4
- 16) 藤田大輔：幼稚園のハード・ソフト面に対するワークショップ参加者の視点の相違 - ワークショップ手法を用いた幼稚園の環境改善 - こども環境学研究 vol.7, no.1, pp.51、2011.12
- 17) 岩田秀斗・藤田大輔：保育所・幼稚園における遊び行為の展開に関わる空間的特性 こども環境学研究 vol.5, no.1, p.76、2009.4
- 18) 藤田大輔：幼稚園・保育所における遊び集団の発生から解散に関わる空間的特性 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、pp.165-166、2007.8
- 19) 藤田大輔：幼稚園・保育所における幼児間の交流を誘発する空間のあり方 こども環境学研究 vol.3, no.1, p.72、2007.4
- 20) 安藤千春・藤田大輔：幼稚園・保育所の用途別面積傾向と各室・空間の保育者評価 こども環境学研究 pp.11-12、2006.4
- 21) 藤田大輔：保育所における写真を用いた園児の遊びイメージの把握 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、pp.175-176、2003.8

- 2 2) 藤田大輔：園児の評価理由からみた遊び場面に対する評価について 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.159-160, 2002.8
- 2 3) 藤田大輔・山崎俊裕：幼稚園における園児の構築環境に対する認識と評価 日本建築学会東海支部研究報告集 ,pp.605-608, 2001.2
- 2 4) 藤田大輔・山崎俊裕：幼稚園における園児の遊び特性と構築環境の関わり 日本建築学会関東支部研究報告集 ,pp.361-364, 2000.3
- 2 5) 藤田大輔：幼稚園の構築環境と園児の行動領域・集団の関わり 日本保育学会大会発表論文集 ,pp.788-789,2002.5
- 2 6) 藤田大輔：幼稚園における異学年交流の場に関する研究 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.45-46,2001.9

3. 基本設計・実施設計・作品

- 1) 青木一実・丸山晴之・藤田大輔：ふじしまこどもの森(認定こども園) 基本設計・実施設計 福井県福井市 2018.6 竣工
- 2) 藤田大輔：かゆーぐ(0-2歳の遊びを誘発する家具と遊具群) 基本設計・実施設計, 静岡県長泉町 2017.8 竣工
- 3) 藤田大輔：あまね保育園園庭 基本設計・実施設計, 静岡県長泉町, 2017.8 竣工
- 4) 青木一実・藤田大輔：ささべ認定こども園(乳幼児保育施設) 基本設計・実施設計 長野県松本市 2015.3 竣工
- 5) 青木一実・藤田大輔：木もれ陽保育園(乳幼児保育施設)(改修) 基本設計・実施設計 愛知県名古屋市 2012.9 竣工

4. 著書・報告書等

- 1) 森一彦,加藤悠介,松田雄二,松原茂樹,山田あすか,藤田大輔,秋山怜史,山田信博,古澤大輔,二井るり子,高草大次郎,横手義洋,橋弘志,大原一興,安藤勝信,吉村英祐,三浦研,西野亜希子,巖爽,松村秀一,宮部浩幸,青木茂,田中康治:福祉転用による建築・地域のリノベーション:成功事例で読みとく企画・設計・運営,学芸出版社,2018.3
- 2) 山田あすか・藤田大輔:建築設計テキスト 保育施設, 彰国社,2017.4
- 3) 日本建築学会編(汐見稔幸,若盛正城,石垣文,倉斗綾子,古賀誉章,古賀政好,佐藤将之,杉山統彦,高野絵里子,武岡紗生,橋弘志,藤田大輔,村上博文,山田あすか,山田恵美):こどもの環境づくり事典,青弓社,2014.9
- 4) 日本建築学会編(森一彦,加藤悠介,松原茂樹,井上由起子,絹川麻理,倉斗綾子,黒木宏一,古賀誉章,古賀政好,小林陽,佐伯博章,橋弘志,隼田尚彦,藤田大輔,北後明彦,松浦正悟,松田雄二,三浦研,室崎千重,山田あすか,巖爽):空き家・空きビルの福祉転用-地域資源のコンバージョン-,学芸出版社,2012.9
- 5) 河邊貴子・杉原隆・柴崎正行・小久保圭一郎・酒井治子・田代幸代・藤田大輔・濱田彩希・廣瀬志保:最新保育講座7「保育内容 健康」,ミネルヴァ書房,2009.8

■その他の業績

3. 口頭発表

- 1) 荒川誠・藤田大輔：高専キャンパスにおける利用者の要望と生活実態に関する研究 - 岐阜高専におけるケーススタディ - 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.469-470, 2013.9
- 2) 藤澤光治・藤田大輔：倉庫におけるコンバージョン事例の実態とその評価 - 岐阜市とその近郊におけるケーススタディ - 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.317-318, 2011.8
- 3) 加藤未知麻・藤田大輔：ワークスペースを有する小学校の活動実態と意識評価の考察 - 岐阜市立岐阜小学校を対象として - 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.509-510, 2011.8
- 4) 田上奈美・藤田大輔：ルームシェアにおける同居者間の関係が個人的領域形成に及ぼす影響 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2,pp.33-34, 2009.8
- 5) 伊藤昌博・藤田大輔：キャプション評価法を用いた玉宮通りとその周辺地区の印象評価 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.821-822, 2009.8
- 6) 江崎徹・服部真和・藤田大輔：利用者の感情別にみた飲食店に求められる空間的特性 - 箱庭手法を用いた利用者の飲食店理想像 - MERA ジャーナル 第 22 号 vol.1, No.2, p.40, 2008.8
- 7) 大西裕太郎・伊藤昌博・藤田大輔：大須商店街の服飾店ファサードに対する人々の印象評価 MERA ジャーナル 第 22 号 vol.1, No.2, p.41, 2008.8
- 8) 服部真和・藤田大輔・小栗琢磨：感情別にみた飲食店空間に対する利用者評価 MERA ジャーナル 第 21 号 Vol.1, No.1, p.58, 2008.2

- 9) 西尾崇志・藤田大輔：水路を利用した集落の観光化に関する考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1,pp.413-414, 2007.8
- 10) 松井寛子・藤田大輔：公園における遊具の特性が遊びの動作・動線に与える影響 こども環境学研究 vol.3,no.1,p.85, 2007.4
- 11) 藤田大輔・曾木夏子：ショッピングモールにおける人々の滞留と構築環境要素の関わり 日本建築学会東海支部研究報告集 ,pp.669-672, 2002.2

3. 基本設計・実施設計・作品

- 1) 藤田大輔：みさきち(若狭町みさき漁村体験施設)(改修) 基本設計 福井県若狭町 2018.4 竣工
- 2) 青木一実・藤田大輔：障害者生活介護 水音 基本設計 2017.3 竣工
- 3) 青木一実・藤田大輔：愛知県幸田町の住宅 基本設計 愛知県幸田町 2016.11 竣工
- 4) 藤田大輔：珪化木の墓 基本設計・実施設計,千葉県船橋市,2016.4 竣工
- 5) 青木一実・藤田大輔：障害者ケアホーム り〜ふ 基本設計 2015.11 竣工
- 6) 藤田大輔：鈴鹿工業高等専門学校マルチメディア棟 基本設計, 三重県鈴鹿市, 2015.10
- 7) 青木一実・加藤悠介・藤田大輔：ケアホームはやぶさ(障害者グループホーム) 基本設計 愛知県豊田市 2013.9 竣工
- 8) 青木一実・藤田大輔：平山邸(住宅) 基本設計 滋賀県高島市 2013.4 竣工
- 9) 藤田大輔：岐阜工業高等専門学校 校内マップ・サイン計画 2012.3
- 10) 藤田大輔：岐阜工業高等専門学校 フロインデホール 基本設計 2012.3

4. 著書・報告書等

- 1) 藤田大輔：福井県三方上中郡若狭町の観光促進を目指した拠点整備の取り組み,2017年度私立大学ブランディング事業研究報告「宇宙」事業推進のための地域と協働するふくいPHOENIXプロジェクト研究報告集 ,pp.40-43,2018.2
- 2) 松本直司,夏目欣昇,藤田大輔,加藤悠介,北川啓介,橋本雅好,谷田真,中井孝幸,伊藤孝紀,道尾淳子,清水隆宏,生田京子,甲村健一：発想し創造する建築設計製図,理工図書,2017.7
- 3) 内藤和彦・橋本雅好・日色真帆・藤田大輔編：設計に活かす建築計画,学芸出版社,2010.4
- 4) 藤田大輔・北川啓介・青木一郎・呉明宣ほか：こども環境新聞,こども環境学会,2009.2
- 5) 鈴木賢一・笠井尚・藤田大輔・西川正純・畔柳昭佳ほか：子どもの場所&元気な毎日,C&D 144号2006-冬 vol.37,pp.13-32,2006.12
- 6) アーキテクテク編集委員会編(藤田大輔ほか26名)：アーキテクテク-東海の現代建築ガイド,建築ジャーナル,2006.5

5. 学会誌・一般雑誌

- 1) 藤田大輔：子どもの遊び・生活環境を中心とした計画・設計 鯖江商工会議所会報 No.694, p5, 2018.1
- 2) 藤田大輔：こども環境学会第5回合同セミナー報告「心と身体が動き出すとき」,こども環境学研究 Vol.12,No3,pp.8-9,2016.12
- 3) 藤田大輔：製作する姿をみせて子どもたちとつくるープレーパークにおける子どもの拠点づくりと愛着形成ー,こども環境学研究 Vol.12No.3,pp.82-83,2016.12
- 4) 藤田大輔：行動と意識を探り、空間を演出 岐阜商工月報 ,pp.12-13, 2009.11
- 5) 藤田大輔：空間演出の方法で決まる「お店」 岐阜商工月報 ,pp.12-13, 2009.9
- 6) 藤田大輔：都市再開発に対し、地元学生が提案 建築ジャーナル No.1120,p.11, 2007.4

6. 講演等

- 1) 藤田大輔：保育の質を高める環境づくり,保育発信 2017 講演会 講演者,2017.10
- 2) 藤田大輔：心とからだの動き出すとき,こども環境学会第五回合同セミナーシンポジウム話題提供, 2016.9
- 3) 藤田大輔：日本建築学会公開研究会 話題提供「こどもの環境づくり その意義と実践」,2015.6
- 4) 藤田大輔：日本建築学会公開研究会 話題提供「こどもの環境づくり その意義と実践」,2015.2
- 5) 藤田大輔：日本建築学会公開研究会 話題提供「空家・空きビルの福祉転用の実践と課題」,2011.2

謝辞

本論文は、東海大学工学部建築学科山崎俊裕研究室で卒業研究として開始し、大学院を経て、現在まで継続している保育施設の建築計画に関わる研究成果の一部をまとめたものです。

研究成果を論文としてまとめることができたのは、そのきっかけを与えてくださり、現在まで辛抱強く関わっていただいた山崎俊裕先生のご指導の賜物です。大学院時代からの度重なるご指導の中で、設計に活かすための注意点や建築計画学の奥深さ、私自身の甘さからくる内容の過不足などについて、常にご教授と叱咤激励をいただきました。さらに、示唆に富んだお話の数々、研究者として生きる上での人生観についても多くのことを肌で感じ、学ばせていただきました。また、主任教授として大変お忙しい立場にも関わらず、博士論文をまとめる際には福井にも何度もお越しいただき、ご指導いただきました。山崎俊裕先生のご実家が現在の勤務先のそばというのも何かのご縁かと思えます。本当にありがとうございました。

そして、本論文を審査していただいた、主査である池田岳史先生、副査である三寺潤先生、副査である西尾浩一先生には、大変お忙しい中、審査に時間を割いていただきました。研究のご専門も異なる上に、私の準備状況が悪く、コメントもしづらかったと推測いたします。そのような中でも親身なご指導・応援をいただき、それを踏まえてブラッシュアップを繰り返してなんとかまとめることができました。

研究の過程では、大学時代の同級生や後輩に調査・実験に同行・ご協力いただきました。特に論文の図表作成のお手伝いをお願いした際は、個人的なこだわりからくる執拗なダメ出し、やり直しなどで大変苦勞をかけてしまいました。特に鈴木裕一さんには図表の作成にご協力いただいただけでなく、私が社会人となってから研究打ち合わせのため大学に立ち寄る際に、何度もご自宅に泊めていただきました。大変お世話になりましたが、これからもよろしく願いいたします。

教員として勤務してからは、多くの優秀な学生たちが当研究室に配属され、保育施設を中心に様々な研究活動、設計活動を実践してきました。特に岐阜にある2園は卒業研究として調査した結果を再分析したものであり、学生たちの真面目な取り組みがなければ、研究として成立しませんでした。

フィールドとして調査・実験をさせていただきました幼稚園、保育園、認定こども園の関係者にも厚くお礼申し上げます。特に研究を始めたばかりの頃は、園長やスタッフの方と話す際に、現場で起こった園児の動きや空間構成への素朴な疑問などをもとに、必死で頭をフル回転させて、拙いながらも「建築計画学の視点」からお話をさせていただき、その経験が「どのように出来事を解釈するか」「現場で何を吸収するか」といった研究スタイルにつながっていったと思います。ある程度経験を重ねては来ましたが、常に現場で学ぶ姿勢を忘れないよう、日々精進していきます。

保育施設の設計に関わることができたのは大きな経験でした。建築計画学は設計と研究の両輪を回すことで様々な事項に気づき、そこから新たな解釈や発想が生まれます。設計を依頼していただいたすべての方と関係者に厚くお礼申し上げます。特に保育施設の設計を協働した青木一実さんには、設計で重視する点、配置の検討方法、設計行為に対する心構えなどをお教えいただきました。ありがとうございました。

同僚の先生方にも様々な面でご配慮いただきました。特に福井工業大学環境情報学部デザイン学科主任教授の川島洋一先生には、業務の面でもご配慮いただき、論文執筆に集中することができました。さらに鼓舞していただいた研究者仲間や、学会等で楽しく飲み交わした仲間たち、書籍執筆の際の研究者や編集者との議論は、その内容が論文の根幹となっていると思います。志を同じくする研究者仲間、もしくは飲み仲間として、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

両親にも感謝の言葉を送ります。二人とも大学院がどのような場所かよく理解していない中、私が選んだ進学という進路に対し、「本人が選んだ道だから」と信じて背中を押していただきました。進学した際は、ここまで研究を続けるとは思ってもみませんでした。大学院時代の厳しくも楽しい日々の中で、がむしゃらに過ごした日々が今につながっていると痛感いたします。

最後に、特に博士論文をまとめる最終段階では、家庭の大部分のことを妻に任せっぱなしとなってしまいました。そのような中、最後まで応援してくれた妻をはじめ、長男・次男・長女の日常の姿に癒されながら、なんとか時間を割くことができました。本当にありがとう。

本研究をまとめるにあたり、様々な方々に本当にお世話になりました。

本来は、お世話になったすべての方のお名前を記載したいところであり、さらにお名前を挙げた方にももっとたくさん書きたいことがあるのですが、徹夜で書いた恋文のようになってしまうので、割愛いたします。本論文をまとめるにあたっては、本当にたくさんの方に支えられていたのだと再認識しております。皆様、ありがとうございました。

平成 31 年 3 月